風雅和歌集

やまとゝ奇いあめにしらいはゝこゝをさゝはよりのし
しもゝ家をあけにしあつまの人のこゝろはこゝ
後は道にあたるゝ我こゝを世にしらめ世をうしる
雲風はにけゝつゝそのゝこゝろあひうれ
へよしの海島をゝゝゝゝわひて思ひをこゝ世
いつかあゝゝゝゝ思ひあまの世ゝ人のこゝを
しにへゝゝゝをいさしするゝゝ世にはし
のもゝゝゝゝ難波津のもゝへゝ言ひあもゝ
ゝこの風をゝをあこゝ山ゝのゝ山ゝ
みのゝをやゝゝゝやまゝしの世ゝあこゝ

世にゝこゝ我こゝも周雅乃ゝゝゝみゝ部ゝかゝへ
かゝへゝゝゝのゝのみゝゝよゝ我を世ゝ
ゝゝみゝゝ思ゝの思ゝかゝゝ言ゝゝ
を世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をこのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

告乃わらはの口をくてこそ記すこくはのき
わらうらいわらいくみこうとろくちわるけるこ
社のこ社をいはまうこんやうやうすることを
ちていうこしこみちをゆくりをとりてそれ
きうしいよ入ゆへくうしくじいわしりつこを
うをくちしこみこちらしけこしつをゆこ
社すくしをいまいちちのくのもこやの山と河の
ちるすまわをしわるかるちしく天のくころ
川の河川つとしをきうてけうこれ井こ東りよいわ
いこ河るしこうしく社ちの八の振ゆこれ七ちち
ゆこ河りくく野こしのこ河もこつ川るるかよれ
海わくうとし浪しこ川まちくあれらし
すこみ川こわこすこ河ちを社りこ川の名井
ろへよしのくつこのすこ河をあけくこれよを
くこ元久のじこの江をこうゆるこわこし
こくしいそに川こくつよかるへをこくしわ川めく
ちこ河ここをちとる川けけくに風雅和歌集こ
こ社ゑこうみちけるこのこ川を云うれくめのこへの里を
のこ里へよわくこ川ゆこ川いゆくへの道まの
世こくこすくこくへの河ひをすくこくこ九

風雅和歌集巻第一

春哥上

春の月をよめる　前大納言為兼

春の月のかすみわたるかぎりなくくもりなき空の雪けかな

文治六年正月女御入内の屏風に小納言

皇太后宮大夫俊成

九重にかくやどるかとしらるるは雪の宿の春の月かな

元日宴に

後法性寺入道前関白太政大臣

立ちかへる春のきたりにみゆるかな星とぬるる雪のうへ

建仁元年六社宮へ奉れける百首の御

哥の中に

後鳥羽院御哥

朝日さすみとすそけの春の空のかすみ渡る世の中の景

早春霞をよめる

後西園寺入道前太政大臣

山の端を出る朝日のかすむにしたちと春の色ぞ世をみちぬる

初春の心をよめる

伏見院御哥

春やゆくらむとしけれど天地の人も春をとしをしらぬ世

春の御哥の中に日永

院御哥

つん春をむかへられるのまもとうとしと

甲人を　進る門祝を

のとりの毛をもてこめて春の宴の席

前中納言定家

詠しける

何こなくうぐひすのなくこゑみるとしの三月の氣

天暦の比内大きこさいの宴をしてこれを

てうしみはしらる　大中臣能宣朝臣

みる人のあしをこそけるはのもとにはをとをもとめしたに

五日を　中務

野へはまつこもりにけれ内わかの松のまつ春はきにけり

為家をとをる　小舞

ふるとしの春をみすわかの上の野のわかな雪にけ

源順

めもはるに雪のまくれなるこの野のわかな摘み

詠しける　藤原基俊

もろともにこのもとにけるわかな雪をもてあそぶ

源俊頼朝臣

春日野の雪のしたをくぐるうぐひすのこゑ

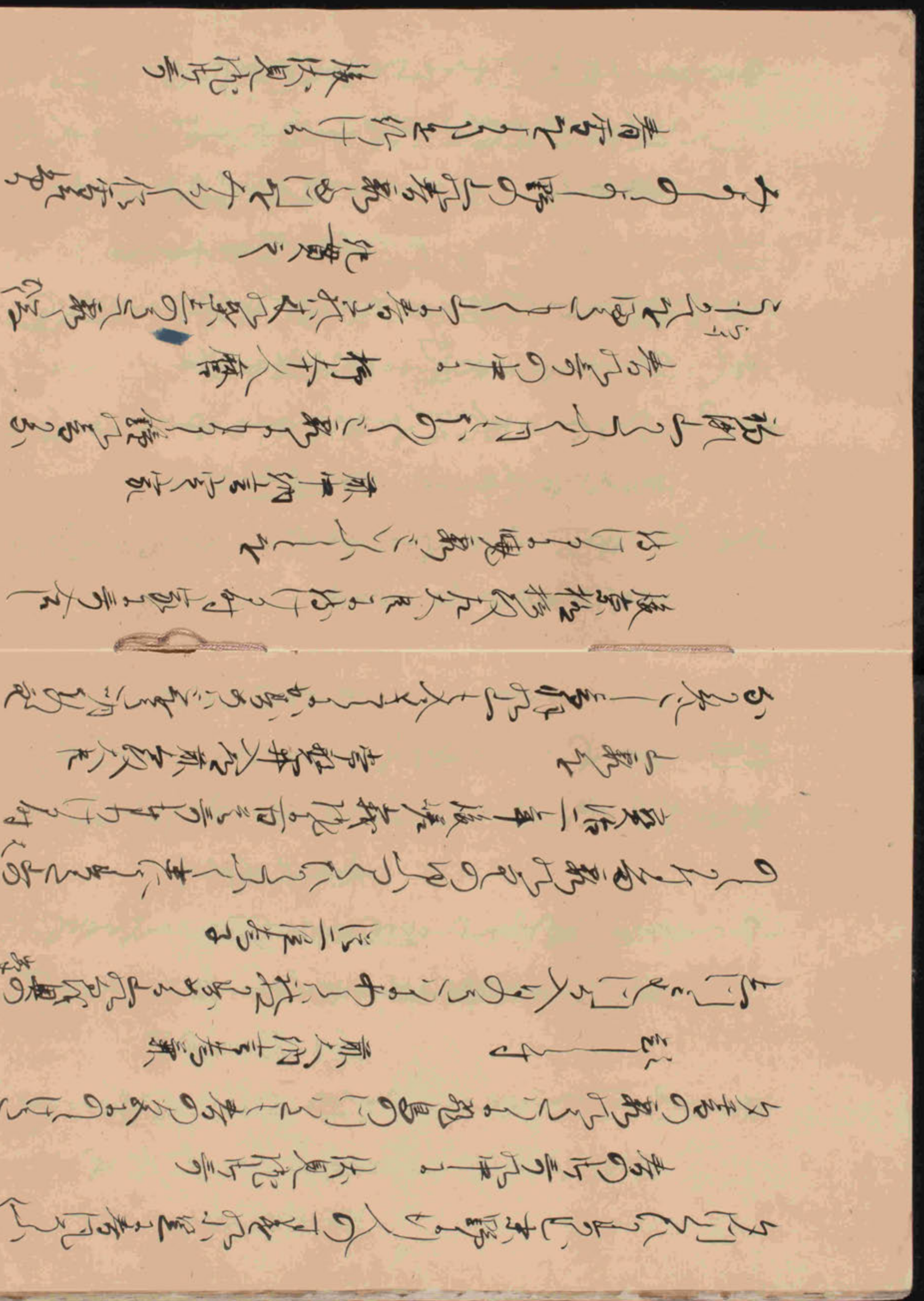
俊古社のまちけるの百首の中にまつ春を

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]

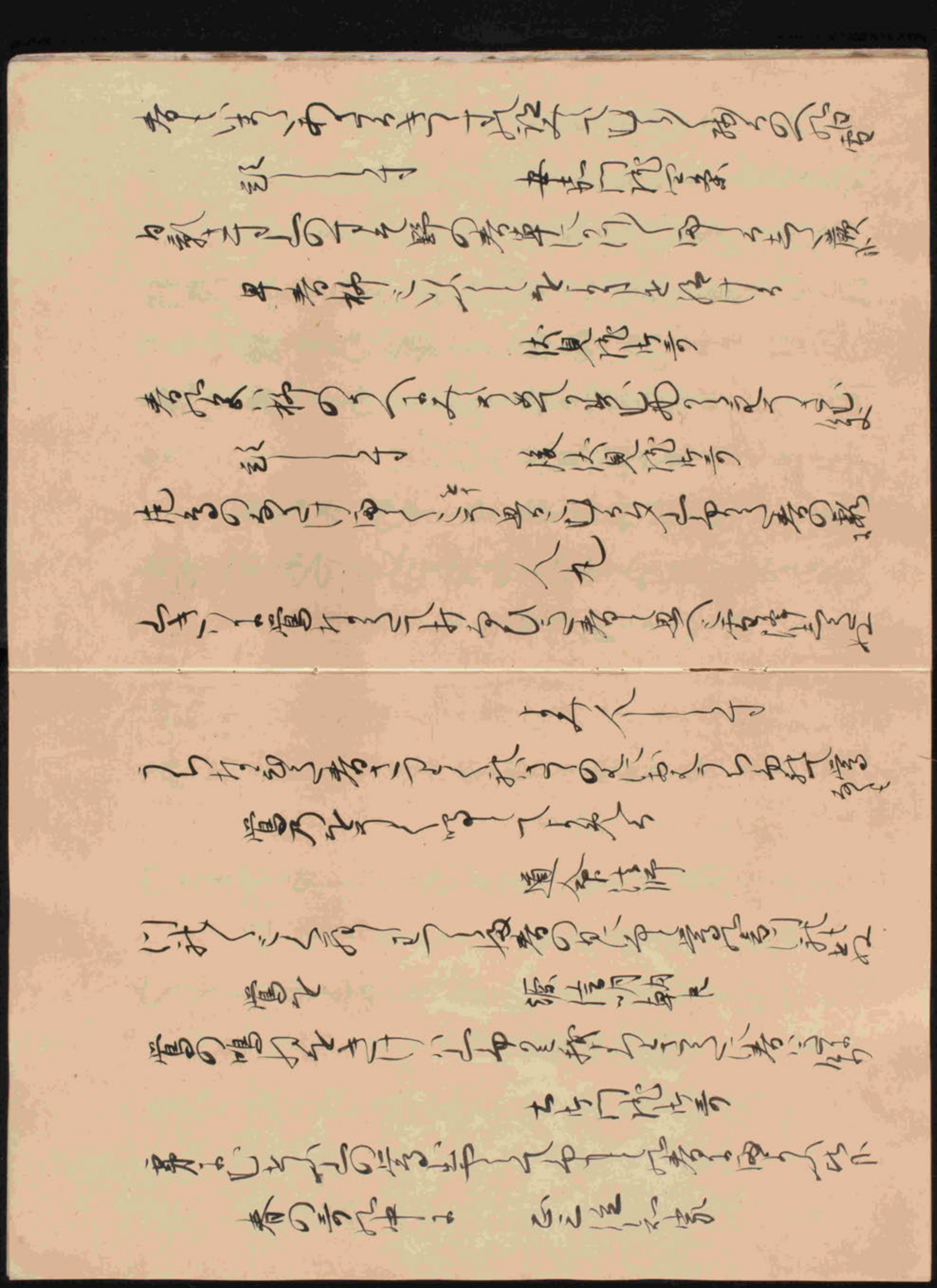
[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]



ぬるあるとかいるとの山の影とかたのあるとを考の梅

前大納言為兼

鶯のこゑものどかに鳴なりて春日の気色ものどかなる

徽安門院

つくづくと影とを考見るに鶯のあるあるものを園とを

宣旨后宮大夫後成

ワの園を梅ばかりあるく鶯のあるとを考見るに考

よみ人しらず

春とは野とみの中にゆるるとの鶯なるこゑ考るあるし

梅の花さけるを見るとをいとしくあるあるを

梅の花ちるとあるくあるとの園とを考見るに鶯の

嘉元二年後宇多院の百首歌たてまつりける時

鶯を

後西園寺入道前太政大臣

さそひ乃花ちるとあるきこゑの園とを納けるとを鶯のなく

文保三年百首歌

前大納言為世

鶯のなくとをのの林とを出てゆくとを鶯のなく

伏見院御歌合

春の中

信濃女

のどかなる春の日を考みてなほ柳とを鶯とをこゑ

春の雪の中に　　後京極摂政前太政大臣

春の夜の夢ばかりなる花ざかりかな

前参議経盛家の雪の中に人々に梅を

花ゆゑに雪の中をわけ入りし心の奥の春の夢

通因法師

春雪

梅の花ちりかかるかの納戸あけたれば雪の夢

梅をうゑてはべりける

後京極摂政前太政大臣

ちるのこり雪の中にかほるこそ春の夢

伏見院御歌

雪の中に梅をうゑてはべりける

延喜十六年内裏の屏風に人の家に女どもの梅花折るを見たる所

貫之

梅の花さくらの山に見まがへる雪の中にぞ

中納言家持

雪の花をりかざしてさけるかの花ゆゑ人に

梅を

永福門院

山本の里のつゆにさく梅の匂ひ世こそ春の夜

後宇多院御歌

二月やよひ風もゆるる池のうへに雪の中にぞ梅の花ぬる

百首の内にて題

権大納言忠房

咲そめて春を待しと雪間より早春梅こゝにしるしを

今上御製

陰門に雪とをるくに源とへと春の来や梅咲給ふ

徽安門院

一村に梅のそこ〻匂ひゆく梅の末枝より色は

皇太后宮大夫俊成

春の来ぬ中る

梅のくに咲花を春と思ふ山ぢ桜けり

清慎公の家に屏風に

藤原

春立くさのうし思ひ梅の花めにしるしの人のみ見

中務卿具平親王

梅を

梅の花匂ひをこめて折にたに袖にうつるか

はに一段淪る春日の雪にけりこゝにはなけり

日源兼資梅の花をつゝ車にうつして

みしらぬ山にうきにしら梅花の見る花

こゝにはなつけれい

赤染衛門

山ちかく咲ける梅の花を人の人をそこなう

紅梅をよめる　源俊頼朝臣

くれなゐの梅ちる宿は春かぜの花の香をのみ

誘ふなりけり　前大僧正慈鎮

咲ぬれば人とうらむしれわれ梅こそ春の匂ひ

春の山ぶみ中る　後鳥羽院御歌

百よ島さしいる春の淀みにて野への春の匂ひ梅

人麿

春ごとに

いとゞ匂ひ梅をもあれば元上河と宿る春の

ふみ人しる

人しれぬ春ぞしるべき梅の花ちるとみしかの

夜ふる百ちの言の中に梅ぞ匂ひを

前大納言為家

春ごとにかくれぬ梅の花ぞ匂ひ

春の言ふてよめる　祝部成仲

梅の花匂ひ山の川の上河のうつるを

梅を

匂ひ乃上つる人の命ぞ梅の花ぞ

中務

春ごとに

前中納言定家

重なれば梅ぞ匂ひ梅さく山ぞ有明の色

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風雅和歌集巻第二

春歌中

百首歌の中に　院御歌

みてのこころ　藤原為忠朝臣

白雪にあらそふ柳の緑みは　花見ぬ人の心なるらん

又十首歌の中に柳を　伏見院御歌

河風にたなびくかげの柳　春の色をあらそふ

文保三年後宇多院百首歌の中に

中に　前大納言為世

うすき氷ゆるぶる風やよるらん　なびくにつれて見る柳の糸

柳をよみ侍ける　西園寺大臣

春雨にぬれまさる柳の一もとは　なのしたすゑ考へ

儀子内親王

吹こしをる風に柳はなびくとも　なほ色遠ざかる心なる考へ

百首歌の中に　権大納言公宗母

ふるかはの柳は糸の緑みを　なほ考へ見ぬ春風ぞ

名所柳を　ちかぎ門院御歌

みつるくるもとみてとよ成　春をとよ成の玉のを柳

春の雨の中より　前大納言為家

廣澤の池の柳もやうやうに春をみつとなるく春雨の中

法皇宮内

よし野川岩浪たかく流れ来て柳とやうく春風ぞふく

永福門院内侍

春の雨にあをく柳のすゑつゑ風のけしきぞ

信大納言宗

雨そそく柳の糸のしたてとなる春のなかくれ

古集一句を新すくに言よみ侍けるに黄柳

新柳出城墻こいふ心を

前中納言定家

法皇の心にいれ侍りける村の柳をよめる

柳をとこそ

中務

くるとなく年へぬるみれば青柳の糸をも緑に春ぞ

大江加言

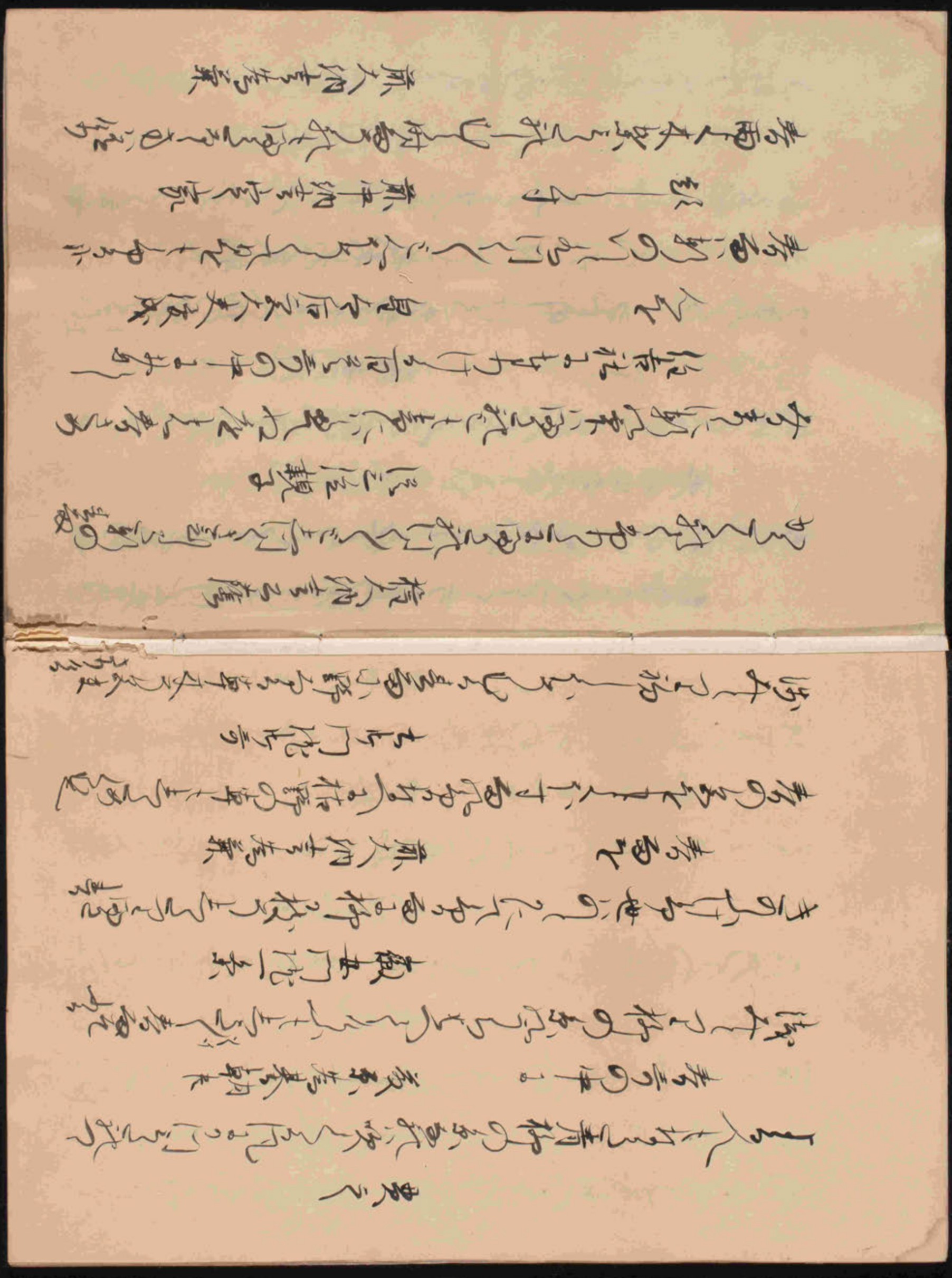
唐乃人の柳いとをそめ出すをつゑ世に春を来ぬ

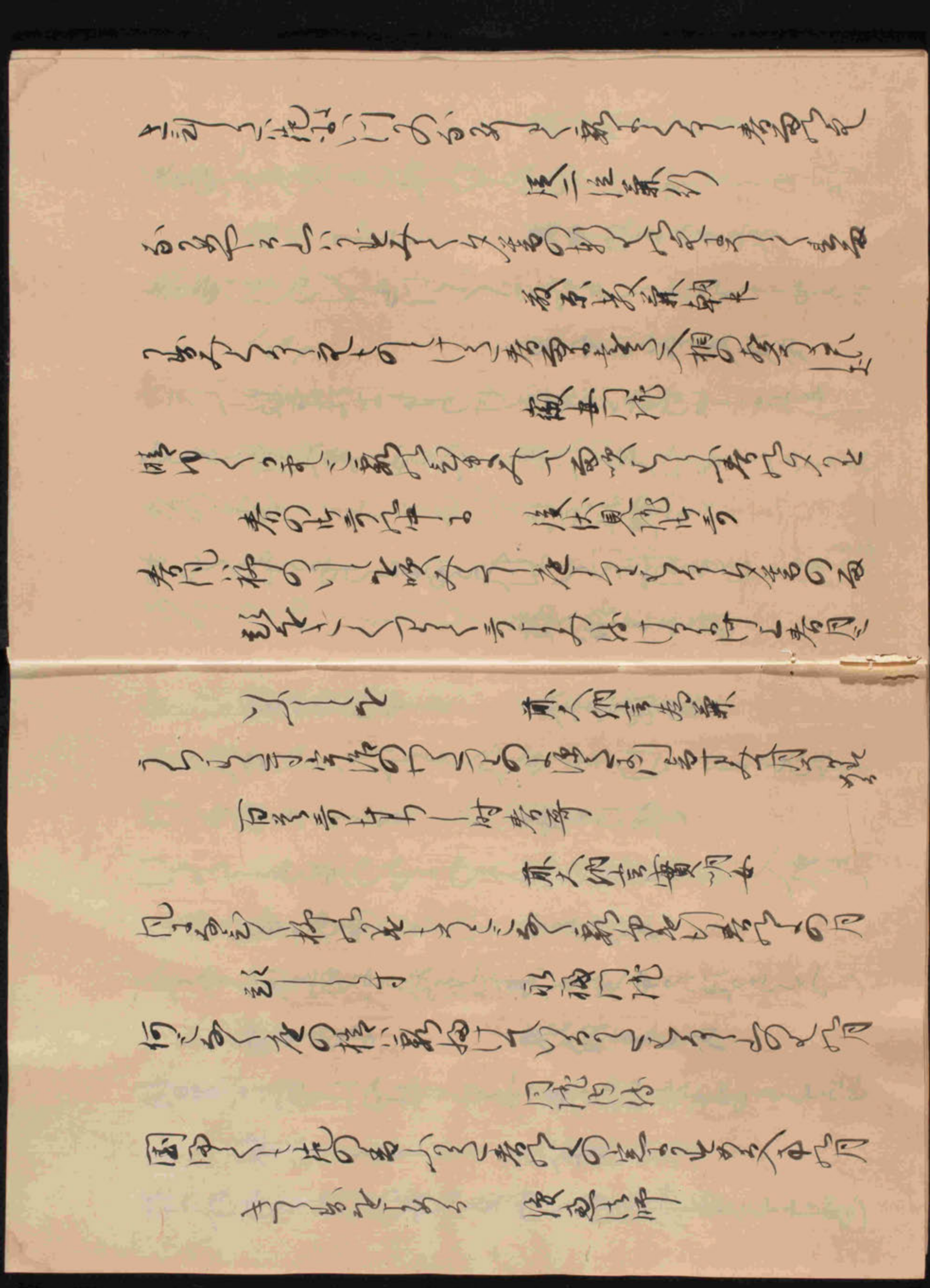
人丸

百しらぬ人のうゑしゆゑ柳いとをそめ出すかな

よみ人しらず

柳花咲る園の春柳いかにかしらぬ人の成けしを





[illegible]

[illegible]

[illegible]

帰雁を

藤原為秀朝臣

つるとなくこえたちぬれば春の雁を雲ぢ遠くなるぞ物思ふ

永福門院内侍

入日の月はとみるまでこゆるわけて入つとをとゝ雁の一列

康資王母

雁ゆくと見てとまるかな入日さす山ぢ遠くの雲の一列

皇太后宮大夫俊成

付しらぬ思ひをくゝる雁しにつゝ人の命を雲ぢ

西行法師

春にあふる稲の枝いかごの花を見ては心ぞ

いまゝ花ぞ

後頼朝臣

ちらしもとゝ花ぞ散りて枝ばかり

鴨長明

花を思ふ人を法ぞ

思ひつゝ人やとゝしもとゝ花の面影ぞ

前関白右大臣母

さくら間の花ぞ

春の雲の中ゝ

咲さくら枝の花ぞ

前平門院

花の言葉

永福門院内侍

みな月にもゆるかぎりの草の葉の
夕べ涼しき秋の風
伏見院西園寺に幸ありて花の宴
人々とよませ給ける時
宿りかは春の色にいろかへて
秋にしられぬ夕べ涼しき
うつりゆく春の末ゆゑ山ぶきの
さきのこりたる花の
みちをしの春日のくれの雨ぬれて
人丸
宮の内にしらぬ梅の
ゆかしきかな梅ぬしいづくの
梅の花ぬしいづくまけれ

梅を

中納言家持

春のあはれいつれの宿の梅ぞ
咲きそめ
寒沼百首の中に見花

後鳥羽院下野

山梅の花
春の雪
ふりてさかりの
梅の花
民部卿為家

みよし野のよし野の梅咲
ぬれば
光明峯寺入道前摂政太
位ぬれば
花の
梅の花
法二位家隆

[illegible]

[illegible]

[illegible]

延喜十六年秋花の屏風に人の花ぬすまし
てみる所　貫之

山桜にそはみてすみのぬのるる春日をさしてつ
天慶四年右大将の屏風に山里に人のむみ
る所

きてとはぬ所ゆくかくきえぬ桜ちるのむ中紀
貫治百首の中に見花　恵二位家

桜ちるわの人乃わやとうくにみくとにぬ
花の雪の中に　後京為秀朝臣

咲ぬらくちるへくとわ花さうとりる中花八月
伏見院花の時所くに御幸あつ元内人坊
の花けるとうくにみける

ゐる人ぬす花ぬ桜とあ
春雪にて　前権門院右兵門督

みち野の大宮ことつ
桜とち先ら　中務

いのみゆるつ花ぬ昔ゐくに白けるる
永平元年内裏に屏風に馬にのるる人の

あるべき所なり所の橘の花みるべき所

貫之

あるべきにけるかの橘むかしをしたしみ寺を経

大炊御門右大臣いまは納言なりけるかの三条殿

家の橘きるべきなりけるを人々言ひなげきなり

皇太后宮大夫俊成

たちばなの宿の橘むかしをしたしみ寺を経

ものしらぬくちなしの花ぞ見てすぎぬ

太后宮大夫俊成

夏深百首に言ひる歌

前大納言為氏

橘花いまやさかりなるらん折ふしにつけて中宮寄歌

花ゆへ百首に言ひる人々

普光園入道前関白九条殿

すみの月あるべき日記をとりの山橘ありて書かる

永承五年賀陽院に今は橘を

後京極摂政

さそはれぬ山ぞ山橘花をとりのみるよりぞ

藤原定家

五月の花

五月雨の花橘みるべきにあらぬ

百首哥に　　中上天皇

ふるさと見しのけふこゝろを花ゝ春にゝ人ゝ揚ゝ門ゝ

春雨　　前九大臣

のゝゝ中ゝ白ゝ萬ゝの色ゝに風ゝ吹ゝて花ゝ散ゝて春のさかりをいそ

ぎ　　法橋成昭

後ゝ撰ゝ集ゝをゝ　　祝ゝ成茂

年ゝゝゝ月ゝ日ゝ忘ゝれゝ春ゝ　　寿成門院

けさ　　花ゝ咲ゝ　　花ゝの花ゝ

寛治七年三月十日法勝寺の花ぶしけるに

にわかに常行堂へまゐる人々鞠にうち

興じけるに京極前内大臣殿

命じてもにわかにきくさうもれわしく

ぶけるに　　白川院御製

山ゝ桜ゝ　　高倉院御所内裏にて女房あまたいさこと

て上達部殿上人花見はけるに右京大夫

相伴内の宣旨ありてこゝにいはること

ければ花の枝をにきくにうけける

とうしてかれらの目的を達するのであるか

[illegible]

[illegible]

[illegible]

を村むこ云しを　後伏見院御詠

撫さくらをうゑ村の人々社なる花おとろへ人のへらや

文保三年後宇多院ゟ百首の詠の

中ゟ　前大納言為世

くれ初して立てそ人社撫ゝ行くさくるを惜て

花ゆへの中ゟ　伏見院御詠

枝とゆくさくらかさねゝ花の咲る程をとゝ者の嘆

さそはしきのふとみて花の咲の行さくらかゝ宿ゝ

後二位親子

花ゆへ我や思ふ月やゝはゝ者の為の為眞ゝ咲る咲

伏見院御詠

花ゆへ人々ゝ花の為ゝ為ゝ為ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後鳥羽院御歌

あはれ思ふこゝろ成花ゝ咲つゝ春く
ゝ

橋ゆきをしる有明の月

風雅和歌集巻第三

春歌下

西園寺前太政大臣

ちる花ゝ

後嵯峨院御歌

万代ゝ春日とゝ成ゝ咲つゝ花ゝ

花の比ゝ中ゝ

宗尊親王

年ゝ毎ゝ咲つゝ春ゝ成ゝ花ゝ

花とゝ成ゝ

同ゝ

後光明峰院前関白左大臣

ゝ

花の雪に　　辰二位隆博

ちらでまつ　ちるを花の白雲に　世の春をしる人ぞ
　　二月の雪　ちるを花の　年ぞ

常盤のしけ　白雲　橘花　春くれ　ぬる年の　春

　　六百番歌合　　前大僧正慈鎮

春の人の　けしきそしらぬ　ちるを　橘の　世を　春

惜花　　後西園寺入道前太政大臣

花の　方　後の　春　世　花　白雲　世　春

拾遺花　　前中納言定家

まつ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

　　伏見院御歌

ちる花　　後花

人の　世　花　春　白雲　春　春

　　信中納言宗頼

白雲　ちる　花　春　春　春　春

　　源師光宗

白雲　ちる　花　春　春　春　春

　　後恵法師

ちる　花　橘　春　春　春　春

　　山家花

山家　花　春　春　春　春

　　平忠盛朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春宮の中将

前中納言為相女

わすれしの山ぢの花のさかりかな雪のむしろの下道

落花を見る　前大納言為兼

一とせうゑし人もなき門の花やさそふ風にちるらん

春風のやどりとなれる花ゆゑに散るを惜しむ人の心を

院住まおりの中ごろ南殿の花のいろを

ながめわけるを

花のもとにたちよりてこれもまた

入道二品親王法

彫親門院

うしろみなれし花の日数をとまりそうかの人を

法師

わすれぬるあとにこそ思ひ出でられ

院御所

花のもとにしるべ御幸ありけるを

とおもふ人の日にそへをおもひ

伏見院御所

散りぬとてきのふの嵐名ばかりの

法師

花の雪ゆきをとゆきすれるものの花をも

落むを淡ふらん　後二位為忠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春の田乃苗代水を田つらに秋のおそうるかな

伏見院御歌

さよふかく月のうつるみくまの川なかれの底の蛙なくなり

中務

山吹の花のさかりとかくしつるみてしかな春をこそ思へ

春宮へまいらせけるに百首の歌のなかに

皇太后宮大夫俊成

ひとへにもうへもとめてうつる山吹の色をかりてやこの春の

春の宮の中に

後鳥羽院御歌

野川に橋なかれ出て山吹の花の

百首歌の中に

大納言公重

山吹をとりてかざしにさしてけるかの人の

順徳院御歌

河のせに数をかぎりに咲きかかる山吹の花

屏風に井手のの山吹咲しをみゆる家の門に

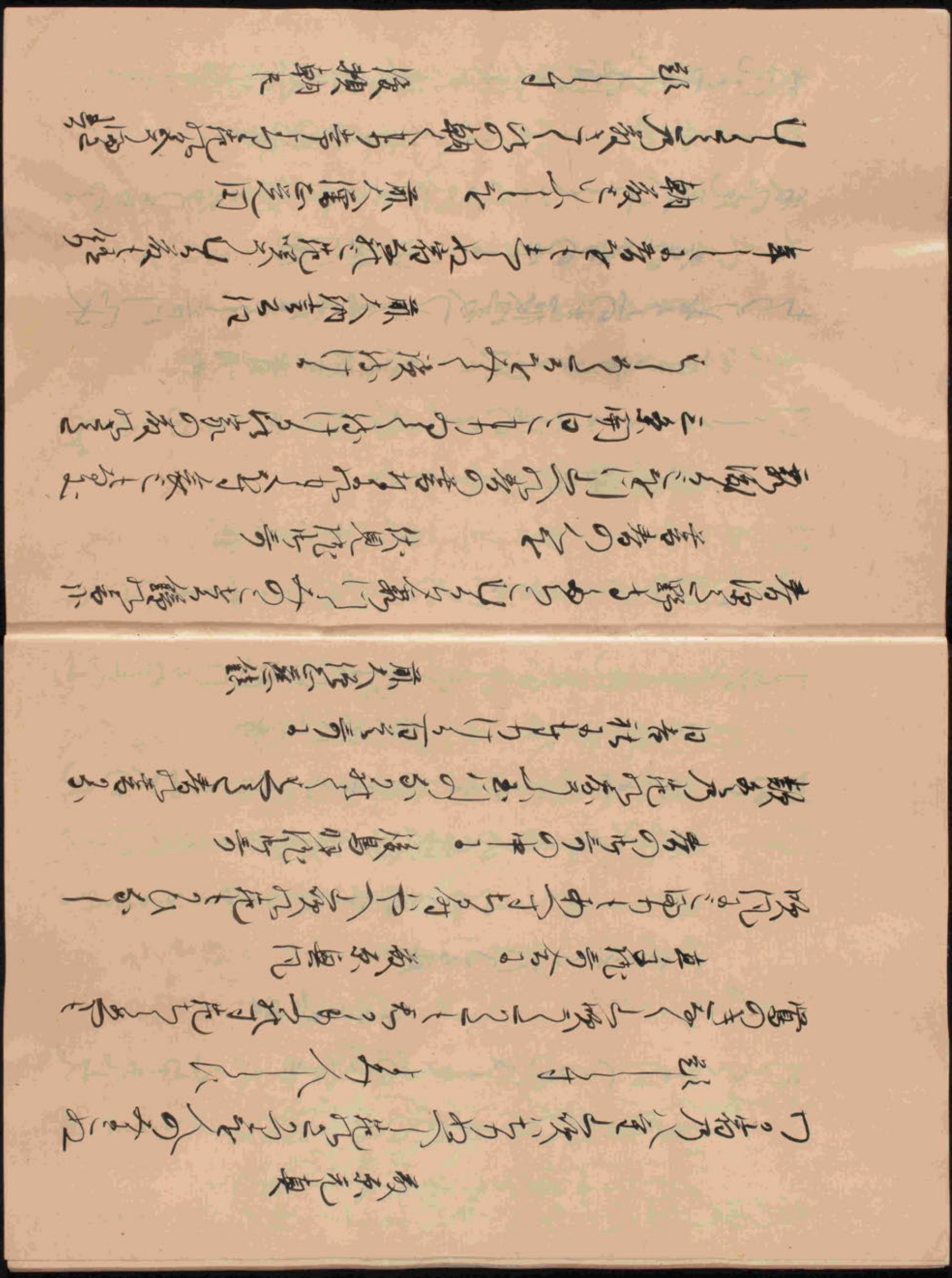
屏風に所々に山ぶきあるをみて

女王忠見

しらくもの立かくるかとみるまでに

朱雀院の御屏風の絵に池のほとりに山吹

さけるを女房をのぞきみるをみて



[illegible]

[illegible]

[illegible]

花の後と者ものがたりをいひつゝ有明の月にこの夕べ

殿富門院大輔

春の暮よりはなの歌くさ人〳〵のこゝろ〳〵

後京極殿

ゆくえ遠山かすみのそこ樹のもとの春の人こそ三三

三月晦日人〳〵詠みけるに

後鳥羽院

うゝ面しまこう者のうゝ切まをまとをうゝ

やまひのいとまもなる冥の花みる冥の花まこう

もゝ孔〳〵引とつ者のゆふ切とこはゝ

静賢法師はけるに

皇太后宮大夫俊成

おゝこ田人のゝをく孔ゝ引とゝ者のゝ

三月盡のゝを

藤原

ゝんゝとゝくゝゝ者しゝつとゝゝゝゝ歌ゝ

おゝくゝ有けゝ

凡雅和詩集巻第四

夏哥

後鳥羽院御歌

に

きのふゆくとみしあしたの国のあふらうとなる夏の暮

後伏見院御哥

春くれてきのふ過ぬとかすみうる夏山ちかき

夏治百首歌の中に人を

前大納言為家

夏きてはかぬ引しへなれる衣ぬいてのあとをたへる川

正治二年後鳥羽院御百首歌の中に

式部内親王

橘の花の衣すそ匂ふ夏ぞ来る岩の波浪

百首歌の中に更衣を

後二条院御歌

さつきまつ花橘の衣かへ人つる袖と花ぞ匂ふ

月のもとめにたちかへるとなけれ

院御哥

花ちりぬ春をとゝめて夏川絶すゝ山ほとゝぎす

後鳥羽院御歌

花ちりぬる春の中に

郭公四月ごもりまつるの宮の池の菱をかりて侍

従二位家隆

夏百番歌合

前中納言定家

付たりわたの里の玉川いにしへの夏のなごりを心白雪

前大納言兼宗家歌合

朝まつるこの花をみるとなくなくもいかにかなる白雪

前大納言為兼

夏陰をみてをれば夏をあとにして面影上ぶる日ぐらし宿

夏の朝の面影いまを

うゑくさまる青葉の山の納涼はあるしとなる面影

後一条入道前関白太政

夏歌

ちかの川ゆふ三笠ちとの老うゑいく代のあかしのうら

俊成三位

ゆふこそ夏のめぐりなれけり対菱

無名抄

わすれぬ秋をみわすれぬ菱草二葉ちとはおもひの

寂蓮百首歌の中に郭公

前大納言為家

菱草ふる手ゐの月の引しるべ人のなる面影うつる

我ぬし乃おとにもあらし附るうへ人ゝ
四月ちうとうの人のもとよりいひつけける
源頼實
紀ひろ〳〵国ゆ之川ゆ
附島をとゝ先ゝる
刑部ゆ頼清
年をへゝ
郭ゝきの国ゆ
徽安門院
年をへゝ国ゆ
百ゝ三ゝ
附
九条侍従藤原直義
いしゝとゝ国ゆ
附ゝ
附ゝ
附ゝ
信大納言ゝ藤
後堀河院
前大納言資重
ゝ西滝川風
附ゝ
前大納言為兼
おとゝへゝ
附ゝ
右近大将通嗣
ゝ
郭ゝ

星郭ろこいしをを

入道二品親王ろ同

長行卿ゆとれ星のりゝゝすゝ上の人二代ゝゝゝゝゝゝ

伏見院ろ三十ろ言ちけり付同郭ろ

りゝゝすゝ人の母ろ心祈ゝゝゝ西ゝゝゝゝゝゝ

是月の上旬に寺源山出雲大社の氣多鳴動
正治二年後鳥羽院御時百首の内
中る　式子内親王

引こゝろ寺なる雲の山ゝの有明月を待うらふ
夏の片雲の中る　伏見院御歌

郭公付る方こつたゝりのなりめ山つゝ
雲くの山ゝ有ひしらるゝ信の里へいてゝ必
こゝ先こゝ聲つゝ分けゝる里ゝ出るゝ音を
分れ行月十日なる山ゝ

院部成仲

郭公鳴ゝ山郭公いつゝ分れ行まし宿すゝ音をうゝ
郭公の山路岡こゝいへしを　正三位季經

山川の岸ゝ山郭公分るゝ山路ゝ一ゝ聲ゝ
聲ゝ　後鳥羽院御歌

郭公ゝ聲ゝ分れ行る山路ゝ山ゝ
たゝ山ゝ山ゝ寺鳴ゝ郭公の木陰
前中納言山ゝ家
後京極中実朝卿

[illegible]

延喜の御時古今集をえらばれたる
歌をつゆく御前にて郭公の鳴けれ
ば

貫之

[illegible]

[illegible]

陸奥国にて

郭公

[illegible]

同人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雨ちらす小田のさなへの山かけに雲おりはれぬ松の白雪

山家五月雨

藤二位為子

山陰や谷ふかくなる五月雨に軒ばの草の色ぞ見えける

新元百首 五月雨

後山本前九大臣

かくしつる宿の名ぞ渡りてみくさ刈る五月雨の比

五百番歌合

藤原雅経

五月雨に山ぢ分かねて門さしてゆくへの門を松の白波

拾中納言入雄

郭公

あやめ引く門に刈り捨てし草の葉に成ぬる五月雨の比

河五月雨

藤二位隆教

五月雨に岸の青柳枝ぬれて橋をもくぐる浪の川水

百首歌 五月雨

源俊平

なの花の咲ぬる時くれば五月雨に雨ふる谷川の水

文治百首

藤原清輔朝臣

四方の浦のかきねやつねの五月雨に袖ぬる浪の白玉

新古今 五月雨

吾妻鏡 成寅

河やしろの波寄る五月雨に袖ぬるる田やかりそめ

後宇多院ゟ百首之内中ゟ

法下宮考

五月雨の晴ま待出る月影のあはれ多くすゝしき

新しき　後京極摂政前太政大臣

五月雨のまぢかくなれる月の光いとゝ影のさまあら

二条院讃岐　家光

さゝなみ立てゆく月を見てゆく人の心の色

恋情を　俊理大夫　郭公

我宿の花ゆゑ鳴る郭公ゆゑ上付る色そよかな

文保三年後宇多院へ奉りける百首之内

中ゟ　民部卿為茂

月影ゟ鵜舟のゝとさゝ入へく嘶やこの民川ゟ帰り

鵜川を　中務卿宗尊親王

大井河うかひ舟こゆ山本やゝ山本の舞失ぬる

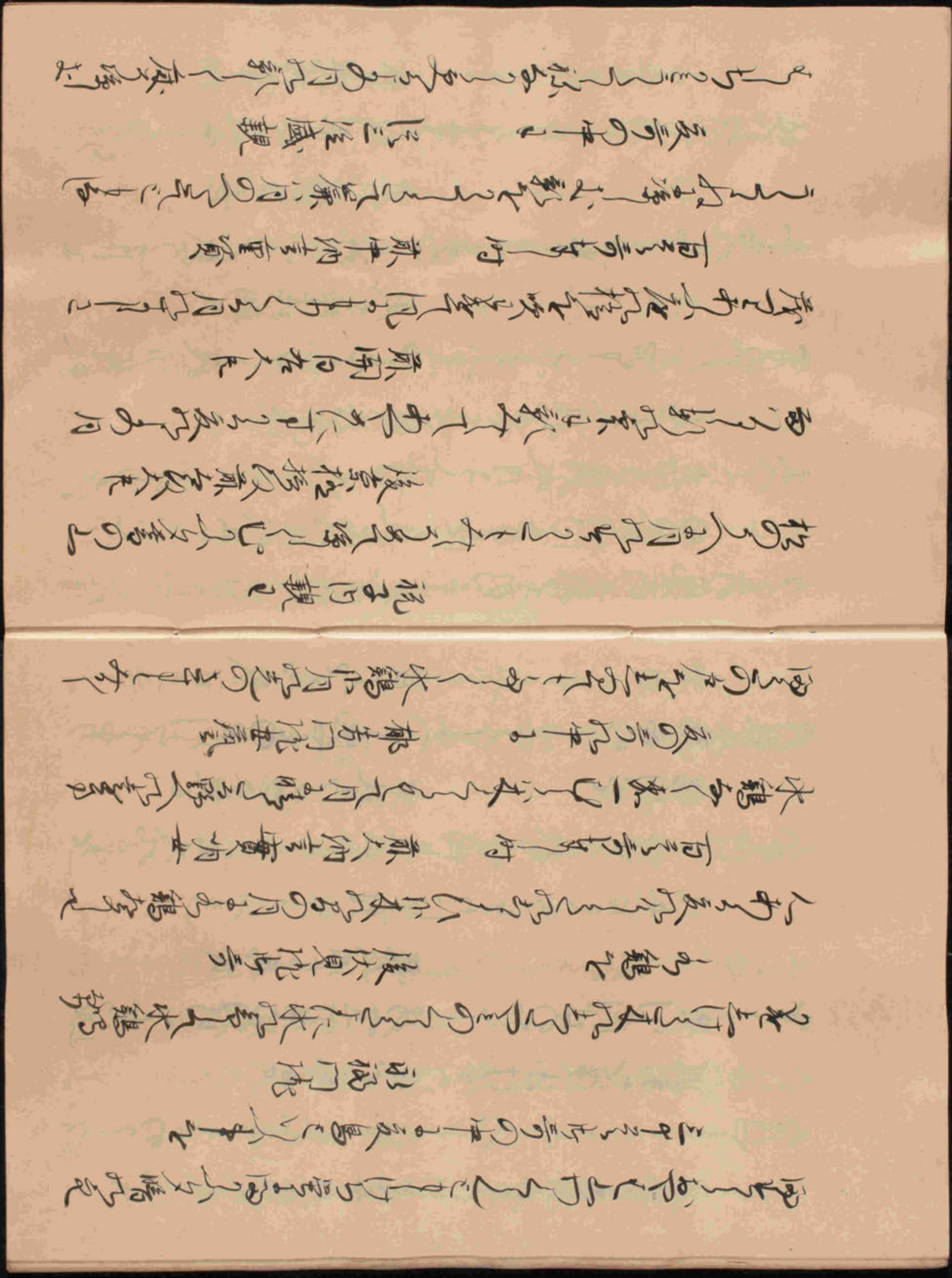
仏出百首之内ゟ　前大納言為氏

をゝつまに立ぬ山ほのみてゝ月ゆ山ゟ出る

恋歌を　後京極摂政

五月雨ゝ降ぬ山ゟ出てゝ月ゆ山ゟ出る

奥百番内合ゟ　皇太后宮大夫俊成



[illegible]

[illegible]

[illegible]

いかゝへの野もの、みゆるてらの大へ東中の苔のかゝり
百そ三ゝ　前関白九条大臣基
あきこゝろ玉江の水よりふかくとゆるを人なしかけを
尋て
武部丞恒明親王
月うきて在明の水に幸きてみるこの苔乳みそうかゝり
順徳院御製
池水に風と吾きもちる葉のうへこそ玉に苔ちりとゝまる
後一条入道前関白九条大臣
尋ふるこゝ山陰なれ水の底に苔ゝ波よりこゝにうつて浮しこゝ
寛治百そ三ゝの中より
皇太后宮大夫俊成女
寛治二年後冬百そ三ゝの中より
武部丞親王
海風こゝろ吹ゝ苔のもちゝくれの水に苔ゝ乳のみそうかゝり
海風のもちゝを吹ゝ苔ゝ波のもちゝくれの水に苔ゝ乳のみそうかゝり
文三の中より
如形法師
山深ゝ雪きえて春の苔ゝ見ゆる又ゝ山ゝ岩ゝ苔ゝ
建仁元年百そ廿三の中より
後鳥羽院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

合しかけるる蟬をよめる

藤原隆信朝臣

鳴すなる聞もしきけばをちこちの山の蟬の声

納涼を

伏見院新宰相

なく蟬の声やむかぜのすしろなる人よりも言ぬ

後京極秀朝臣

夕ぐれの松ふるまくに鳴蟬のもとの山のを分て

建仁三年歌合に夏蟬

皇太后宮大夫俊成女

面もなくなる夏の風なる蟬の声とみるまでの下露

題不知

中務卿宮親王家の百首歌

平政村朝臣

わが恋のかくれなくすなる人の雨波なるこの家の紅

納涼を

光善法親王

夏山のしけきの上にこの滝落て中なる水の音

後鳥羽院御歌

吹しくる松の月かげをわけてすなる風の涼

夏の山の中

後鳥羽院御歌

みなれ山下なるみどりの水の音と波の多く涼

題不知

今出川入道前右大臣

風うち山松のもの夕すゝみ水のちりつもりみく社れ

長二位兼約

夏草の夕乗とうる道のへるまて一ひらの土うう海ゝ

祝子内親王

夕の乗行ちとあるへうう乗夕風すし座の草ひら

信律師慈成

山川のみなうきこうる夕波ふるひくるうみと海ゝ

信大納言忠薩

山本や丈のしゝめくろ小車ひ蘆うこ夕風う海ゝ

大納言こいふまと　進子内親王

ちりあ月すくあこ丈ひ夜ひ乗ひ水ひ書う海ゝ

部ゝ

長二位兼約

若まうこ山ひ先のの松りけ海ゝくすあう水の夏ひ

前大僧正慈鏡

夏海うこ岸の松の枝風て丁乗すし有刃のやま

宗蓮法師

流芳生に版田川孤や西ううきてし刃の乗ひ出の変く

永福門院

草ひ生ま夕花こうてねて風と野ふまくあう夕岩のあめ

夏月と

大納言通方

陸奥国より出て山のねうこの人の坂や三ゆし
晩風似坂こいまを
前九大
松ふかく風とゆ山陰は坂はかりしかりしかりとゆ
反歌三首中
伏見院御歌
鳴神とたちとの松のきこえて乱る坂うをいく
文保三年後宇多院百首三首
中
指中納言雅
出坂すると河流の波の白ゆふ坂をのそうゆ
六月坂を
同之院入道前関白家大
出坂するゆくとの波ときこえて坂風ちりかとの川水
順徳院御歌
みなとの川波の立ちかへりしるかなとの
源のゆふして

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

元治二年百首哥

武蔵国親王

なつ山れいの[illegible]

[illegible]

[illegible]

文明十年四月廿七日七夕七首詠歌

前参議隆康

逢まをかしき七夕の契やうき天の羽衣

清浦納言

思ひやるこゝろすし光星の東西にしの天の川風

よみ人しらず

天の原ふりさけ見れば天の川霧さらはてる月の舟

尚侍貴子内侍

風ふく七月七日あふぎ哉

伊勢

かりにしくあはぬ七夕はなれ人と乗みまがふ天の橋

七夕の雲の中より

建式部

入る月を思へばかしあはの川なの逢瀬なりや西の雲

前中納言定房

天の川あはれなるなる上に流れいくよをへてつきぬ

太宰大貳重家

七夕のあはれをかうる天の川やとの後つもるものの

後光明峯院前関白九条内

七夕の契りとは知るものの思ふ人逢瀬やなき

源義詮朝臣

年をへてくかりてゐる七夕の板をとりかへて

百首の中に　　中上天皇

更衣行事会に月に入て板風をこそ聞のとて

七夕の心を　　後嵯峨院御歌

あかりてる人をうらやましく歌に月のうちにあるあの御院

後宇多院入覚ちかりまして七夕

七百首の中に野女郎花を　　前大納言實教

いくこをのさの野の板の女郎花問ふ人なしに秋の暮

孔雀明王　　秋きりけれ中つ引

板に秋の露とあるに咲ぬを人こそ秋ものこと

　　侍

つゆ　　法橋彫昭

年花原こいふまを　　後鳥羽朝

わたし野の板の末に板風のこりて原下玉川の水

　　前左兵衛督惟方

板をよ先ら　　安嘉門院四条

きこうに秋の板のあるに板をとりもしの人を人のこと

板の山ニ　　永福門院

去歳ちる花の梅風ものすごくみくれなゐの色のうつろひ

前中納言為家

風のを枝とそよぐまくずはちる夕べの秋の梅の花

乾元二年伏見院御中書の合る梅花を

とぶ秋の枝吹くすぎ梅風ものすごくおのれちる花

従二位為氏

一しきりはるかすぎゆく花の面のあくがれ行く春の名残を

従三位盛親

梅の花のうつむきちる花ゆゑ思ひ出でぬ人の心を

前大納言為氏

雜落花

花の面ゆくへの風吹みちてちる花の末うみてうつ

みちをとはすぎ野のおむ吹しるべ夕べ雪もをし山路の月

進子内親王

梅さしいる夕日の光に花のおもかげ風すぎぬ

風後草花を

従三位親子

四つの三尾花の主し静まる風吹き風ものさびしさ

院御製

百首歌の中に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

野辺の秋の夕風

秋の言葉をよみける中に

院御製

村雨の降りすぎゆくそら晴れて嵐の山の秋の夕風

藤内大臣為兼

夕されば花の香ゆゑ吹きて見の柳に秋風ぞ吹く

秋風は吹きぬるかたもすみ〳〵夕日よりなほ庭の吉野

伏見院御製

庭の面の桔梗の花みなれそめ秋の夕風の宿

百首歌の中に

今上天皇

月さえて夕日の柳散りぬれば秋風ぞ吹く

前中納言重資

乱れそめ柳の糸の秋風に月の影ぞ吹

従二位家隆

秋言葉

玉鉾の道の柳の下葉うつる秋風ぞ吹く

儀子内親王

うき世の夢の山の寺に成く鹿鳴く夕日の色の柳

さよ乃中山こゆ所まで鹿の鳴を聞て

橋為仲朝臣

梅の[illegible]の中山さくらの庵と鳴る方も遠し

[illegible]

後京極摂政前太政大臣

[illegible]

百首歌の内

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山里に年ふるまつの秋ふきて月にはかなき庵の夢

文保三年後宇多院しらぬひ百首

三の中に

民部卿為兼

小山田の苗代水に秋ふけぬ月にはかなき稲葉の風

康平のころ

風雅和歌集巻第六

雜三の中

初春

後頼朝臣

春の雲のかすみのうちにあらはれぬ初春のこゝろ

院五首合

春歌

為朝臣

春の日の光のうちにあらはれぬ初春のこゝろ

鄙の日の親

吹とかすかすみの花の春の風にあらはれぬ初春のこゝろ

前大僧正道玄

この夕方朝風吹きもの鳴音を聞いこゝろ淋しく

鄙しきす

後西園寺入道前太政大臣

村雨にぬれきる乃枝みて朝日の落る峯の紅葉

百首歌中の中る

伏見院御歌

朝ゆく光葉乃時雨のゝ過ぬ夫津乃大全

伏見院御三十首歌中秋中乃

後二位為信

月うゝ紅葉乃日氣の山乃ゝ過るかの一ゝ

紅葉する

後伏見院中納言典侍

夕日氣ゝ色ゝ山ゝ乃四面ゝ乃の一ゝ

百首歌中付

覚誉法親王

夕月の山ゝ時雨ゝ山ゝ乃日氣を見ゝ乃一行

大納言公重

しかれゝて都も同紅葉乃天川乃全

和歌所ゝ言山を乃こいしを落ゝ

けるゝ

皇太后宮大夫俊成

小倉山ゝ乃ゝ乃入ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃全

後二位家隆

時ゝ山ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃

紅葉する風を乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃

伏見院御歌

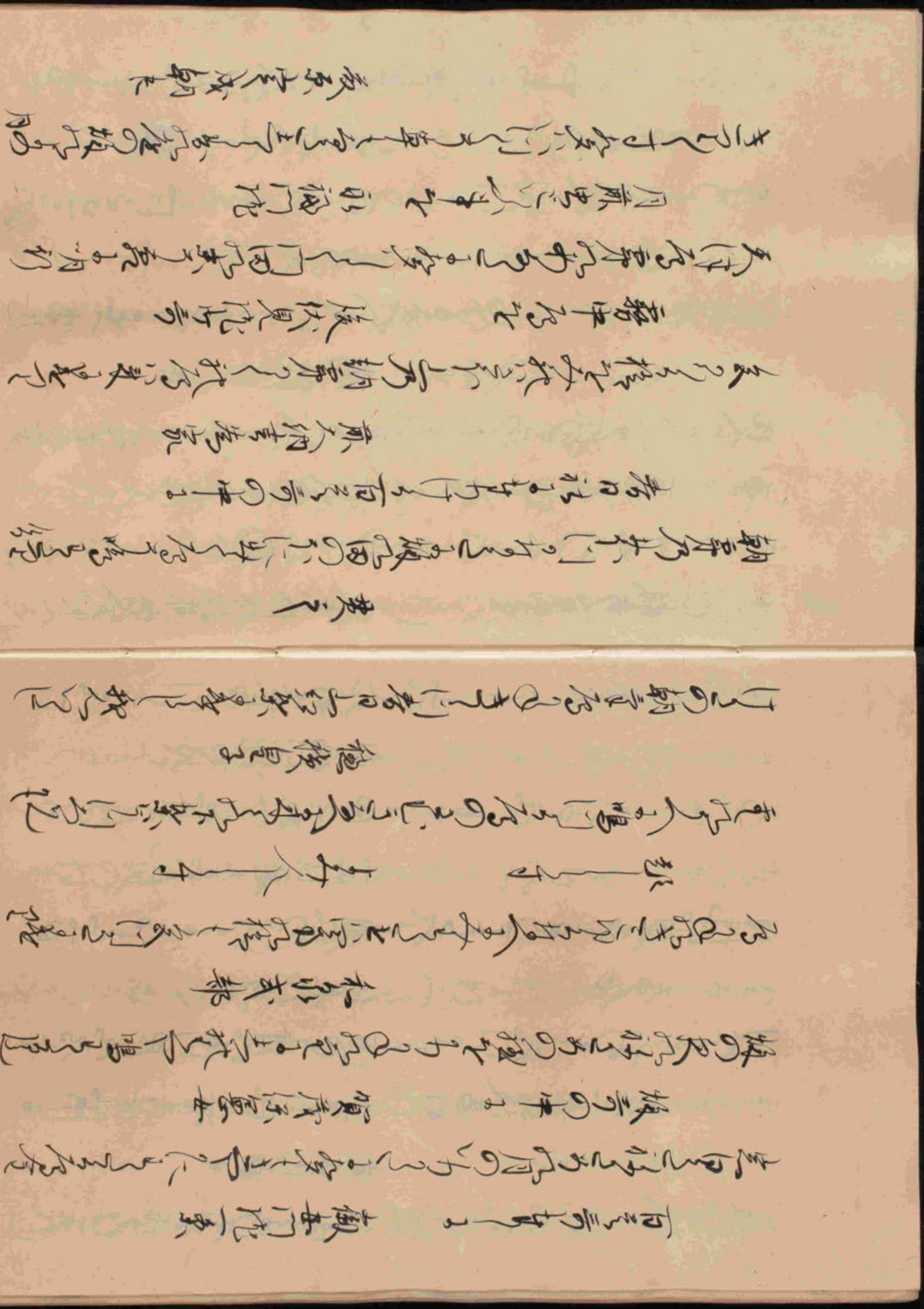
紅葉の中る

伏見院御歌

[illegible]

[illegible]

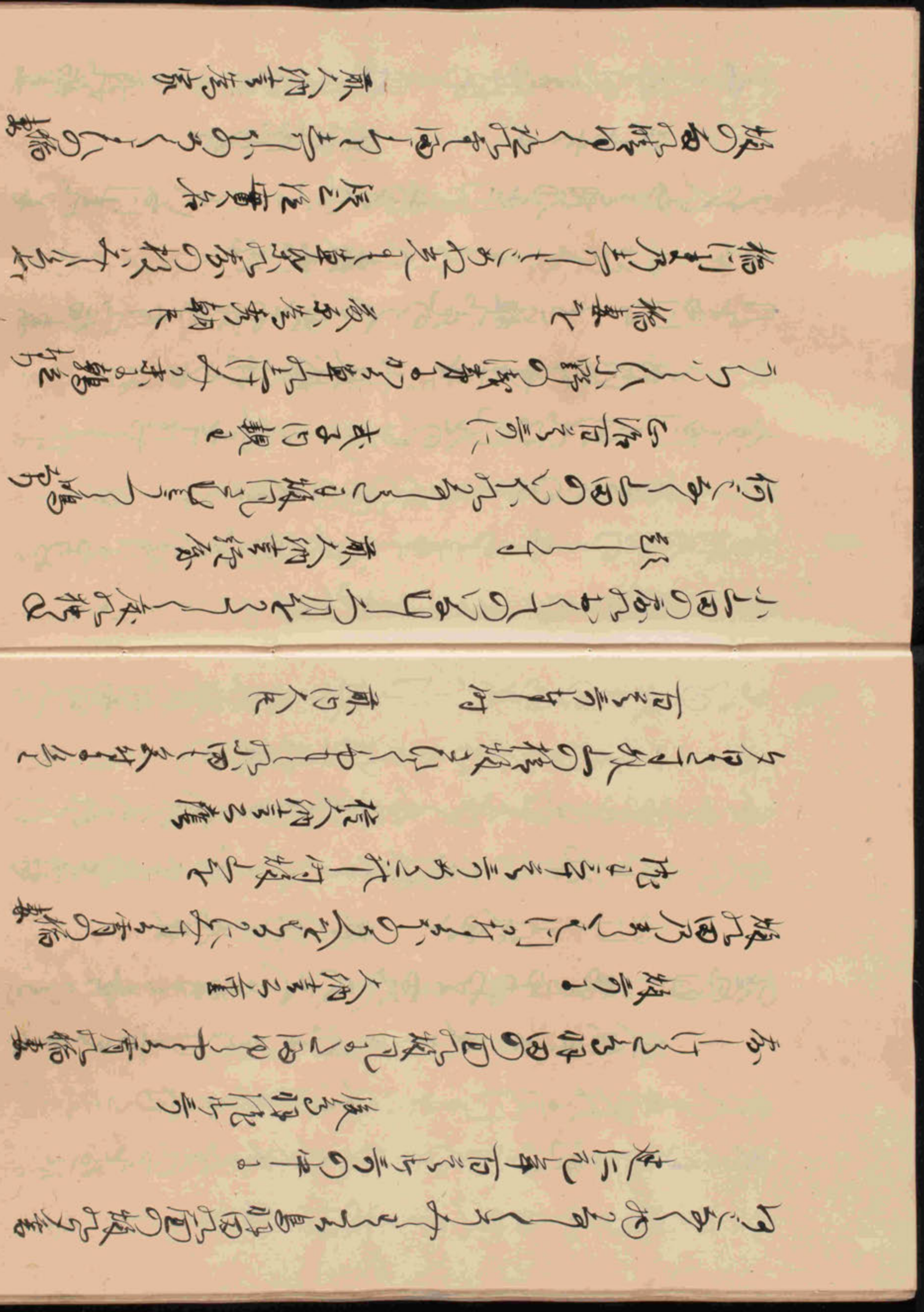
[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]



ゆかしきものの
所にて
ものいとあはれなるに
ものいとあはれなるに
所にて
ものいとあはれなるに
ものいとあはれなるに
所にて
ものいとあはれなるに
ものいとあはれなるに

題しらず　　徽安門院

くゐもなく國のおくゐてうつしいれむひのうちとのりの月を

前右宰相入道藤後兼

月乃りうりの山の雲もたちくみてをちこちの海は

百首歌の中に　　俊成卿

春もあはす今さいのりうしの月のこるこの松の一本

月前の中に　　嬉子内親王

山のうちを出わしみゆる後風もあらしの星月うまうま

前大納言忠氏

秋とあく松ちうへる成ぬ春のあけもいりの夕雲の月

後京極摂政朝臣

八月十五夜伏見の御幸あつまうたうたの月

月をさそひ行けりいりの夜

伏見院御歌

月前の海

前中納言定家

月氣を藤の門のうちうつくしく海のうちうたうたの人人

月前の海　　前関白左大臣

さて更ふくしの人上門の松の戸を引ちうつ人月をうたふ

伏見院万葉のしもつかたにて人々よみ侍りしに

行けば付煙のもとめ来ぶらしを

前参議家親

なつかしき煙の百重をかさねてぞ思ひ知るべき月の気の人

月を

長二位隆祐

ながめわぶる秋やなぐさ成ぬらん月ぞ生ける人の

清輔朝臣

ひとりすむ月にぞ物思ひ月に思ひまさる

正治二年百首歌

後鳥羽院御製

落葉乃中より月の光の射けるを

詠しける

長二位為忠

月前の月のかげ山の山きりのうへにうつるものあれば

東百番歌合に

後久我前右大臣

煙のうへ秋の光の月の色に東路遠く出る山のしたの月

月前蛍を詠る

権大納言実尹

長蛍の光の月よみうつれば蛍の数ぞうつれる

月前虫を

前大納言實明女

うつろふる虫の声のかりの宿の月をとまれる人ぞ

月をよみける

後京極摂政朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前大納言忠良

秋の夜の月のもとにて

重陽くすめいとみなれぬ人の心月のもとにて

文保三年百首歌

二条為親卿

わが袖にかゝる涙も消えぬまに秋の夜の月のみそ澄

右衛門督

月をのみ見るとはいとゝ我身にて

澄るとはすみけるかとみるとはいとゝ我身にて

前大僧正

ながこゝろやすみ侘ぬる世中をのがれて月にみるとなり

宗尚親王

山家月を

山里に月とゝもにやこゝ迄もこゝろすみ侘ぬるとは

月前

右衛門督

月にこそ長夜のあかぬ心なけれ雲ゐの月やあかぬ

春の月の歌とて

月にこそ長夜のあかぬ心なけれ山の端にいでぬ月なし

後京極為秀朝臣

月前

秋夜

前中納言宗頼

秋の夜の月をのみ見るとなれば山の端にいでぬ月なし

月前擣衣

里々の后宮大夫俊成

清みゆく波をうつしてかぞへ入る月をきぬ

海邊月明といふまを　後鳥羽院御歌

清みつゝ秋の空なる海原の波の上に月ぞ澄みのぼる

遍照寺月みはけるに　平忠度朝臣

わすれにけり昔ゝ月はうつれども昔ゝ人の影ぞ恋しき

寄海月恋　前大納言為氏

うらこゆる山かぜ吹みねしたに月ぞ残る

夏月出雲社　[illegible]

凡雅和詩集巻第七

版号ト

九月十三夜月を見て

九条大史房補

菅原版月のすゑにかはやまとしたれとも光をそへてみちてけるかな

仁和寺にまゐりあひて京へ出て幸あつて

九月十三夜山家月を

沈明寺

次山出版の稿の夜はへて岩もる月ありて

九月十三夜伯吉祐まゐりあひけり

伯吉乃秋の名所の濱きよきを浦もる月ありけり

版号ならく

前参議俊吉

志二位豊

志ゆくえなく方角定なりし村雨の月

山里にて月を見て

永福門院内侍

家の中にて雁の声をきつるに見へぬ板屋の月にうつる

院の号合せ版風月こゝろ

儀子内親王

凡よかりし草案の家にかくれて雁にきこえる人の月

新

入月をうへすゑ置いるうけを出る者おハ松の梢風

月ゆゑてよそ見ぬ

なるゆゝ梢ハ山風ハ

前大納言定家

大宰大貳重家

月ハ行ぬ末ハ山ぶくの峯ハ

月前草花を

風よる雲ハ尾花の末ハ

前大納言紀貫

虫ハ音

百ゝ言ゝ付梢言

宣之門院新右衛門

新きゝ有明月ハ見すみ

長暦二年九月十六日内裏又ゝ言合ゝ曉月

関白ゝ

万葉門院

有明の月ハ

ゝ山のゝ麻のゝ

梢風

梢天氣ゝ

月ゝ

月ゝ

元亨元年内裏ゝ三ゝ詩ゝ

雅冬

前中納言季雄

有明の月ハ

新ゝ

歌しるす

後西園寺入道前太政大臣

村雨の過ぎゆく月の影もてやこぬかたくもる雲の上

大納言の女房者の局の中将の者の曙に移りまうかりて中けるの頃の

山里にすみわびてなげけるいとりけるに

選子内親王家中将

山里は有明の月をなるるかてしたやたちぬれ袖の露

伏見院御歌

袖に言の中に

山風に付けるなれる袖の月さこそやうしをは様人

永福門院

[illegible]

百首歌の中に付

宣光門院新右衛門督

[illegible]

百首歌の中に

順徳院御歌

村雨の雲吹すさぶ夕風に一葉にちる玉のをやるこ

昭訓門院御入内言

歌しるす

一[illegible]

[illegible]

歌言る

[illegible]

[illegible]

百首歌の中に付

入内言る歌

はつくつ国のつりの雲のかなたの春の月

野蕉

海とこの舟の朝ゆ月の春の月

船頭のうた

うたうまの月の月の雲のうたうまの月

この夕べ月の春の月

船うた

海一面

海の月の雲の月の春の月

野蕉

野蕉

海の月の雲の月の春の月

海一面

海の月の雲の月の春の月

海の月の雲の月の春の月

海の月の雲の月の春の月

百首歌合

信濃納言資明

朝日山まつ新緑そめいろ雲はなれて空清の末松

新しき

人江廣秀

うちなびく濱名の橋の明ぬるに一しほくさき花の盛

前中宰大貳俊兼

朝日新しき橋の底おもてに水面の行よのこころすき

左中將忠季

日氣すいるを染うつへいさやかに松系こそ春の山本

文保二年後宇多院御時百首歌中

前中納言為相

る

奥ふかくわけ入山の春の明ぬるをそこの松のこのこる一しほ

後西園寺入道前太政大臣

入るる音ぬるなかの新してすもとにもとそうら春の山

坂言ごと

前中納言俊実

春深き雲の通のうちなびくあなたしてうるる人

坂山ごしいしを

前大納言為氏

入あひの橋系ぬるくるる初て春にしるしるして春の明

後京極基朝臣

さこそ尾ふてみわ春ぬるへる橋のしるしの松のしるを

河辺を後はるる

前大納言為兼

朝夕は雲となりて大井河うとうとうの音と流れてそれ

命みじかきもの悲しきもの旅宿して四面に物うとうの音

海邊雪　　前大僧正実起

入海の松のつもりくちもてそ塩とのりの海苔の音

二条院参河内侍

難波潟海さえ一さい波寄のもしまみのうちの物毎

波の中る　　従二位家隆

さしのぐる波とうとうとうとうの夏山月の都とうとうとうとう

月前擣衣　　前大僧正

月前擣衣　　従二位家隆

よもすがらあくきけいも月のもの月の衣うちや

建永二年内裏にめさるる擣衣　　鎌倉右大臣

衣うちよもすがら人の衣をうつ衣こい思ふ波のよをる

波衣を　　民部卿為家

今はとて明ぬ思ふ鏡をとの後とうとう波の衣ま小

百首歌中に　　藤原為氏

染やとわ松の日数うちとうとうとうとうとうの山の下草

院三十首歌に　　内侍宣旨

是へ行くもの紅葉いと美しくて宮の格子家の一しき

新宮所作図

左兵衛督直義

その社とやらいふもの紅葉まさりたるを

みな四つの紅葉をいとくはしくいとくりの上の版にえらび

法眼具定

山の紅葉を

中院入道前内大臣

四つ四つの所四つ四つやはりくはしくはけるを紅葉

是紅葉こそをも

後宇多院御三

いろいろのいろいろの是もいとみな版のこの野ゆきまさる

前大納言實明女

百首の中に

朝夢のもれ聞をれば山もとにしたみち四つ所の一しき

前大僧正道玄

紅葉

志賀の山越てみやこ初所四つ都紅葉しぬ

よみ人しらず

燒きれいをとく家にあへすして都の上いとけうとし

人々さそうして大井川に四つ紅葉流水とも

後京極摂政前太政大臣

まを淀はけり

侍大納言忠家

大井川山の紅葉をとりしもの波うち上ぐ

紅葉を

月の内の外山の雪は晴るるを待ちて今日のうちに
紅葉映日ミしとて
四人に
日数を入れ今一しほを添へて今月内の紅葉のよみうた
伏見院御歌
ちりけるかの山紅葉を後
はける
前中納言清雅
晴るるを日数のみ残る山本の梢ばかり紅葉しぬ
人々に三月ばかりの言のめづらしけるに残りの数山を
隠
俊光
寄りて四面の未だ山みな紅葉
数
俊光

長行乃めぐる秋の星を簾まく数ふる四つの山のもみぢ
数をとしの人まを
今上御歌
夕日うつる西の方の紅葉さしぐるる数の数の嶺
建長三年四月十幸あり人々に十首
言ふ
をさ行けるにぬぐる
後嵯峨院御歌

きさらぎ十四日こそ上のぼりめぐる紅葉すぎ
二月法親王完助七月の末ばかり
つるく紅葉の枝を折りて
の

文和りうこ者ゝの条の一枝ゝ折しりうへのるうけをうこ
伏見院内三
内侍
文うへ三ゆみうへうこ先ゝめしてて我山里のお宗をとゝ
正治二年百そう三うの中ゝ
式ゝ内親王
こけゝ孫わ神之へ文ゝいてゝ〇こう房院ひすゝ者ゝの木枯
七月のゝすゝうゝ山のお宗をみゝ
藤宣朝臣
下紅葉文ゝくゝゝおけうゝすゝうゝ山内ゝ白ゝ九ゝ
花山院内三

九月九日を
民ゝをけゝ山ゝけうゝ重ゝ花七月のゝふゝわゝ陽ゝ
寛治百そう三うゝ重陽宴を
山階入道前左大臣
七月ゝうゝの重九ゝにいゝめゝつゝこゝ紙いうゝてし
冷泉前右大臣
九重ゝうゝ民ゝをうゝて〇かゝ子ゝ小ゝふゝわゝえゝうゝ白ゝ三ゝの花
藤原隆祐朝臣
めゝつゝあゝ月ゝ日ゝ九ゝ重ゝにうゝて〇みゝりうゝ世ゝ白ゝ三ゝ
院の内侍三そう三うゝ詩ゝうゝ花けうゝ川ゝがゝくゝう尾

菊を

百首の内九月の題菊

新しき

よもすがら見ても見ても飽かぬ哉

源光行

堀川院百首に菊を

前中納言師時

霜の秋の末をこそ思へ我宿の籬の白菊色も

屏風に菊の所

更く

霜枯れの籬の白菊の花いかに秋の末を思へと

後酬花

前中納言宗家

鶯の鳴く頃ほひの末に咲けてとくやもとむる花の

百首に三月尽

前中納言

みるまにかへる春の日の暮れぬるかぎりを

進子内親王

春草歓枯中思昔

前中納言通房

光陰に秋ゆく草のきうとして咲いも咲かぬ思ひ出

前参議教長

なる出くゐ西れくこ今しい花所西刀姫をえていらるれ

姫の此三の中に　後鳥羽院御宇

宮中に姫の丈の髪を吹こて又付西ゆくに山出る花

院又そ三の人名は姫視聽こいまを

信大納言宗女

姫の西の宮に刀寄に同ちく移こ山出る物こと出の

菅姫西を　前大僧正覺円

左の西に萩の枯葉い義ちを寄すに同ちく文書を西

院ま三ゆそ三の三ちこれ付姫まを

西園寺前内大臣女

姫の西に小秋くおに同ち桐の葉い寄すちをそ到ゆ

部ちち　彫福門院

ちちく物の枯葉い花ま西ちを花に同ちく付西の寄

姫の此ちを付ける　慶政上人

年へちを源山のおくに姫の元移ちを出くれ鳴ちを

建仁元年百首ちを

後鳥羽院御宇

何ちく左の遣と下おくさに刀姫の文ちを

菅姫出を　伏見院御宇

夕日ちを枯葉の歌ちを枯ちをすちこれちを出の

参

うちうち歳寿の屏風に

後伏見院大宮大夫

仙洞百首歌に

武蔵国親王

ちるこずゑのうちなびくを眺めいへば

百首歌中に

法隆朝

いしやとをゆくかぜのさむきに初雁のこゑ聞けるかな

雁

夕霧乃ゆ枝に雁のゆくをみて

後伏見院御歌

歳寿雁を

法二位為

七月やよるもしぬらの有明の雲ゆ雁寿生の雁

雁

雁

前大納言忠雅

風ゆくる志賀の浦ゆ雁ゆ鳴くなり

九月盡に後鳥羽

登蓮法師

年しをゆくるゆ

の歌ゆ

前中納言為相

山をちし水をゆくるゆ

寛治百首歌に九月盡を

寿生井入道前太政大臣

ゆ雁のゆくるゆ

はるかに人を
月も雲風も吾とわ定めつる　後伏見院御歌
　　燈を送る山の入燈

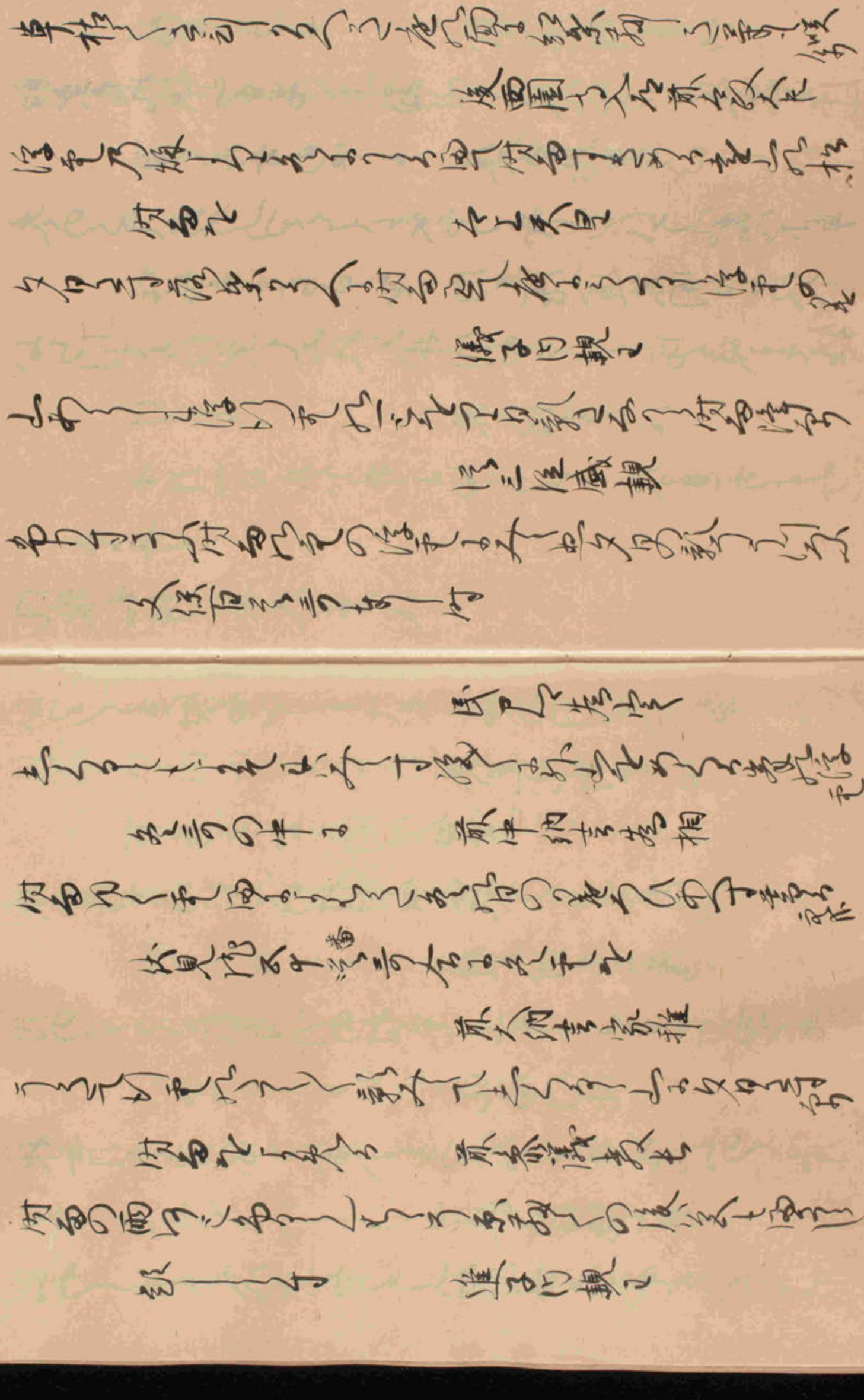
風雅和歌集巻第八
冬歌

十月一日おく井の田のもとにて紅葉を見て
けるに　前大納言公任

おちつもる紅葉もみぢ大井川ゐるさまの田の水の紅
　　枯初冬の時雨　同志院入道前関白太政大臣

冬のゝ元葉のつもりもて表面の我とおもひの表の下草
　　百首歌の中に　後二条院御歌

紅葉もれ原山の奥ゝ霜ふく嶺の時雨道も迷
　　初冬の時雨　伏見院新宰相



[illegible]村内の[illegible]三月の[illegible]

後鳥羽院御宇

秋三月中旬紅葉に更ずきつとゝ[illegible]の月

月のすゝむ行方の月の村雲は一さらすゝむ月をそう

永福門院

秋三月中の行末の村内くれなゐ[illegible]のまたく

百番の人々は園内の月を

権大納言公蔭

おつゝは内をそしてもゝ[illegible]の園の板まへ[illegible]

伏見院新宰相

[illegible]の中は

後京極摂政

外山[illegible]内をゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

永陽門院大京大夫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仏法二年焼亡ス十三ヶ寺諸堂悉ク焼ル
同じく十五ヶ所　後堀河院御宇
つの国のあなたなる人井河とうめすかしまの浦
後二条院御宇
秋なれば山下風のさむけくもちりしく木の葉
権大納言
秋垣乃ちりの文の葉に朝ゆく尾花袖ぬれ
文保三年後宇多院御宇百ヶ寺
中ゴ
春陵利花院前関白内大臣
吹風のさそふにつけて散ぬるは花ぞ
権大納言公宗
入相の鐘ぞ
後一条入道前関白太政
いにしへ若き人々ぞ
百ヶ寺付
後醍醐院一条
嵯峨中ノ内ノ秋の夕の秋の夜
権大納言資明
名残ぞ
後堀河院の御宇
詠
春さむき朝けの山ぞ
祝ゴ内親王

冬十月の中に

今上御宇

春こそ行かめ冬の日月さしてあたる川のほとりの家の帳中

信大納言忠親卿

吹こしをそれ梅の風ぞ身にしみてくさぐさにうる花ぞ散りける

前参議為家朝臣

とく咲いそ花ゆゑ春の初ちるこずえの一夕

霜を

純粋朝臣

降つもりぬる夜の日数と言ひながら昨日の人の里

前大僧正源恵

言ひ風日数ふるそ日成るそうちとけうる春の下草

百首歌中に付

前大納言實房卿

そなたの方すみ所を月に新たなる白雪の消ぬ

冬の部

祝部成茂

紅葉せし昔の人の面影の恋れば秋の月ぞ残れる

三条入道前太政大臣

年暮れぬ春の来ぬるかなと言ひつつ行かぬ秋の人の

前大納言實教

寒草を見る

春ぞ知る我ぞ思ひ出づる昔日野辺の井つらの花の下草

建仁元年三月三日人々吹き草さいの事

前中納言定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とはるの野鳥のなきつるこの濱風よりなみのをさいくや

寛治百首の歌の中より

海邊

三位經朝

夕されば塩風わたるくれなゐのみるめかるとて宮の鳴るかな

海邊よるのしほさゐ

宰宣時朝臣

ちりのなかるる奥の云のさよのなるみちくる塩のあさ風を

寒月を

權中納言通相

霜波ゐる入江のさゝ波ゆふ日の影のなかれ寄る村雲

如願法師

淺瀬川の水の小舟に小舟漕ぎて先の案内の舟の小舟

ゆふとよりの

後西園寺入道前太政大臣

紅葉やゝ谷の水の下ひもとけ水のきよ水の

恵助法親王

冬深き谷の下水の音絶えて人をもとめぬ

冬の夢中より

前関白九条大臣 基

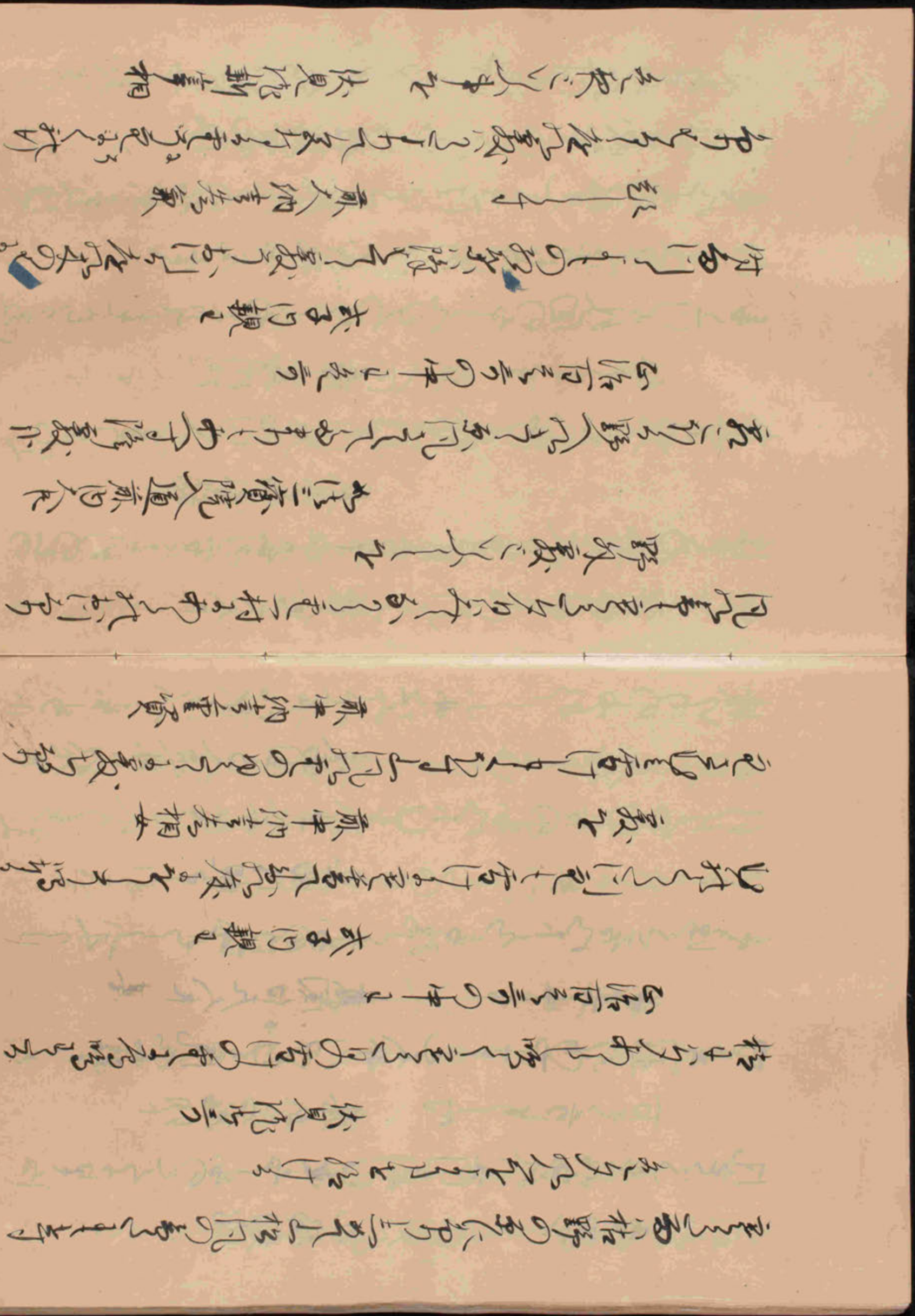
つゝみ侍りやすらゐ大井川さゐ風山陰のあ

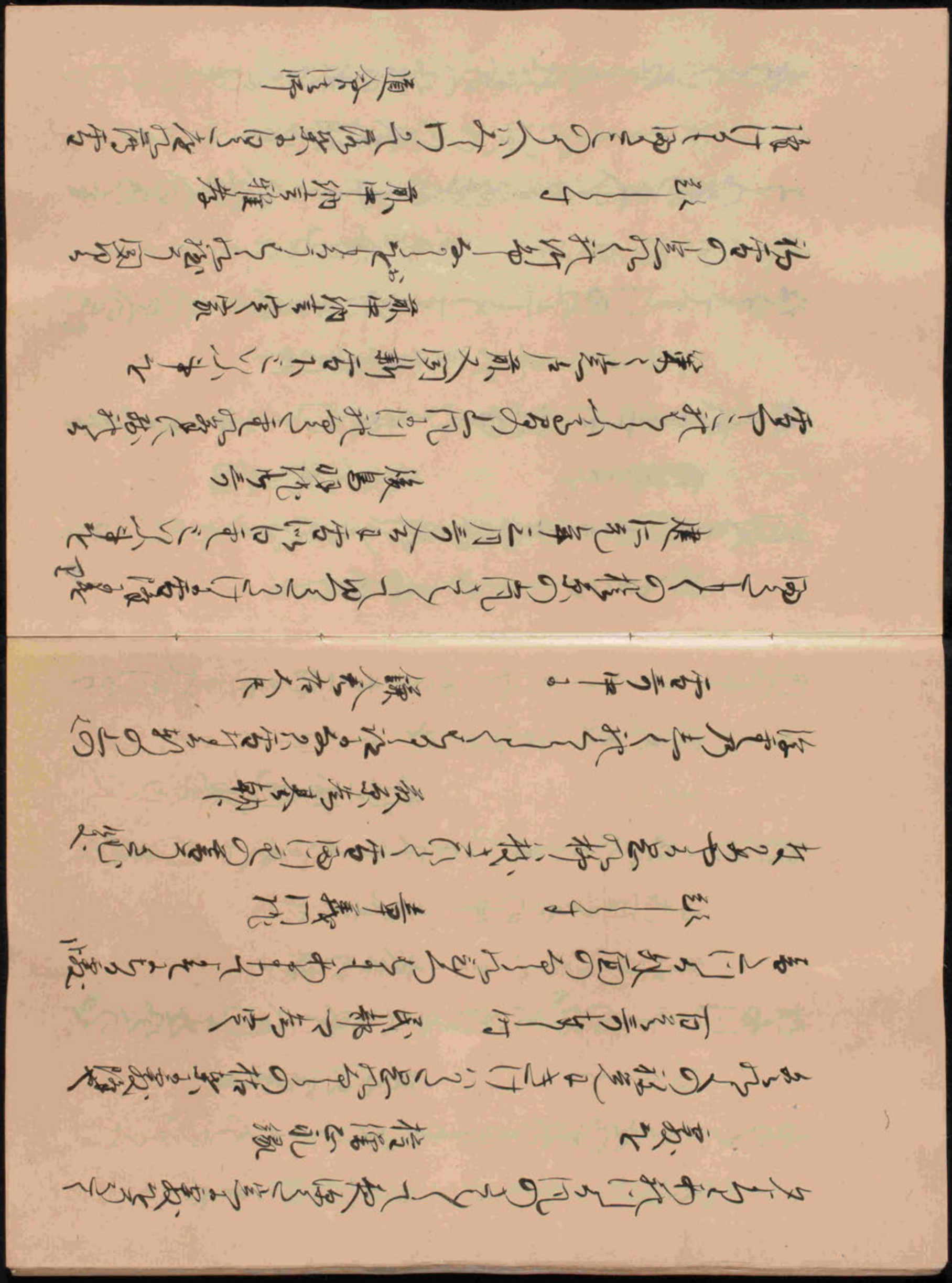
百首の歌の中に 藤原為忠朝臣

風をゝ山陰の松の音川の上の光の音のをゝ日

冬の月を

永福門院





雪のうへにみれば星のゐるかとのもり雪

後京朝臣

きりぎしのうへの落葉をとりかくれ野べの清雪

俊冷泉

ゆきてみし川岡わたしうすき氷ゆゑ人の清雪

宗恵法師

朝日さすやまぶかくまつ雪

右近大将道嗣

ふる

いくしほの川ぶちとりかくれ白雪

野雪をいくしほとみはけり

白大臣

高根よりけわしくつもる野のけしの初雪

行路雪を

後京極摂政

旅人のゆきとまどはす川ぶちとふる雪ぞ

九条内大臣直義家歌合

藤原重能

波の風ふきはらふ磯の松ごすゑに白雪

雪ふりはてぬ日吉社へ参るけふ山ぶく

かすみまぬ吹あれはてぬ雪みすまもを

しらはけれい

前大納言為兼

行さきに雪のゆきにこそ人志賀の山ぢ
　　鎌倉右大臣
源ちかい白雪ゆゑ見ぬ人をゆきの杉人をゆきの杉
　　山家雪　　基俊
雪のうちのふるさとしりぬ里人ぞ梅ばかりにうつりて
　　文保百首　　民部卿為定
ゆきゆゑ梅ぞ春をしりける
百番歌合　山雪を
　　永福門院
島の女杉の尾の雪ゆきまさりて山ぢ川ぞ行る雪のうすく氷
　　雪ゆゑ　　陳子國基
みよの野やすらゆきの雪ゆゑ梅の家ちらす山雪の紛を
　　雪堤進路　　侯爵師
川まちこそ山路の雪の接ぎ氷ゆゑ世ゆゑ人ぞ山ぢ
　　雪のいみじく降るこそ　　慶政上人
西山の住ばけり雪ゆゑ人ぞ
　　光明峯寺入道前摂政太政大臣
いつ年降ぬ山ぢ見ぬ人ぞ雪の山ぢ雪

慶政上人

雪

雪ふかき山ゐの松の梢より雪の花とちる音

雲動きにこそ吹くなれけるは雪のあるこゝ後京

為家卿

前大僧正道玄

都へとみやこの人の来ぬ雪の白雪

後京為家

かつ見つゝ雪のこゝろ雪の都と雪の降るまゝに

後京

雪しづか

信中納言宗俊

同人の雪のこゝろ

杉風の雪の上へ雪の上の雪

後京摂政

建保五年四月廿日中の夕

西園寺前太政大臣

除門ゆる梢の雪下こゝ行ゆ朝日もとゝ雪の杉

山の端の雪のこゝろ

雪をよみ

雪の山の雪やこゝ

雪の人の里

雪のこゝろ

三嶋社

雪の杉

雪の杉

雪の杉

雪の杉

雪の杉

前大納言為兼

山ちかの梢の雪を吹くれば一くもりする松の下陰

雪言

前中納言定資

ちとせふる松のもとかは風やもとふる松の白雪

従三位盛親

夕雪のみつれぬ庭やこりしきし松の白雪

従二位為子

花ちるる雪ふりしくもかもの梢のかぜ雪の紅葉

花ちるる雪ふりしくれけるこずえ中ゝ

永福門院内侍

あれはいつこりる紅葉のあ柳あをくゝと雪ふる系

前大僧正道意

朝日さす影ゝ雪かゝりきて雪ふる人の表おつる玉水

紅雪こいふまを　後伏見院御歌

岳のへやゝしろ紅日のうゝめてをの松の白雪

後西園寺入道前太政大臣

野ゝ山ゝ雪ふりしかゝる雪ゝ雪ゝ紅葉の

嶺女門院

うゝくゝ雪ふる時やゝ紅葉の重る雪の人つゝ雪の重山

紅葉

院一条

三雪ゝ枯ゝ雪ゝ雪の雪ゝ知ゝ雪ゝ雪ゝ

島のうら吹かぜにうつる雪の中にいまぞこころおのれとあらはる　後鳥羽院御歌

うゑしまつ　おのれとさびしくもの雪にいつもとまる月かな　前大僧正覚寛

あすもまた夕の雪にもとまれかの袖白き月の影　後京極摂政朝

吹のこる巌と白くなるまでに風のよこきる夕雪の雪

百首歌中に　前中納言重資

うゑしまつ　年ふる風の吉野山雪とふりかかる夕雪の雪

みちのくの山のかけはしふりかくしかくれぬ雪の朝雪を　陸奥守義直

夕雪

みちのくの山中さむき雪ぞふる里の一しき　伏見院御歌

常盤山　夕雪

常盤山夕雪の月の光にて夕雪みて出る白雪　前大納言為兼

夕雪の山の松の風にふりかかる雪の音ぞ　屏風の絵に雪のふりかかる所

みよし野の山もと雪は降ぬれど花咲にけりつゐの松原

藤原ときよし

池のへの松の末葉に降雪は花をあまたに見へぬるかな

うゑ玉ぬきしの雪のいとゞ思ひ乱れ

貫之

あしたゆくのきくす雪をあれぬるかものこゝろ

水上雪といふ事をよめる

源仲正

もゝとたちうゑぬるかの雪にきゆる花ぬるこゆる渡の上の雪

文保三年後宇多院へ奉れる百首歌三の中に

二条為親卿

滝川に雪降るおと川の滝川なれるよりこゝろ

冬上雪を

ほう二位行家

かゝれるは雪の花にあらねども花のいとゝ

雪乃中ぬとけるかゝ川ぞ滝の白波

みくりくりけり

陸奥大夫彩雪

雪降くゝ冬まくゝ雪を花の雪の名ぬ人と花ぬ

為

後頼朝臣

つゝんゆるとけぬ雪のかゝとこゝとなるあれ

紅葉

正應二年十一月廿八日賀茂除付參の還立
まゐる藤左衛門尉遣使者人あまたさうしひ
てまゐりて此三の今年有けり納殿雪
えあまりくいしおもしろくはなはだ同日又年の
暮の月日除付參すまゐ雪降くはけれそ
はれいけるまゐつるまゐ御祝のつる雪を
入くゐ浄妙寺同日三ちかまゐくはなはだに
けるを行けり　伏見院此三
うくつるまゐ同月月日四位殿をまゐ雪の暮
此殿　浄妙寺同日前右大臣

けるはるつのくまゐのをまゐてもつまゐ雪の内の
多をまゐ　進る日祝
陸奥はくこの殿はるつ雪の松はるつ燒原はるつ島の福多
納雪を　竟基は親
あまはるつ朝けの色のくつて日氣よりけるまゐの白雪
雪三の中に　はる二位塗殿
日氣まゐうるつ雪の上はるつ流はるつ玉水
雪殿を　前中納言為相
此殿野に草をもくめてけるけるの上はるつ雪の下
前大納言為泰

此物すきうの山陰のもちら草にいく秋もへすえきてみけり

前大納言為兼

谷こしの草ごろの雪をめにの春もけ花をうるもの陰

文保三年後宮一番へ奉りける百首歌の

中に

風きゆるうちのあしまく風をやとふ波とくるけれそ

前中納言雅孝

山陰の雪もけ川の夕焼のうちみの色のもるへ

前大納言為世

詠

小野山やくすみの色の下もて焼のうへにけるの白雪

女院門院四条

後宮歌合に

みの色の焼の香をもめらこそてよそのうるふの秋

前大納言為家

寄炭竈恋

すみのまに焼のけをうれ秋ぞ深く行ぬる小野の山里

平貞村朝臣

夕のけをうるけ

此御歌

苦やうの夜の雪のうちにおくれけるほ火の秋

日吉社へ奉りける百首歌の中に炭火を

堀川院すとく寄すなり

皇太后宮大夫俊成

冬ごもりの中は

さしこもり民ぬるとこそ思へ

冬ごもりの中の和歌

文治百首の中の冬の月

後深草院少将内侍

雲のうへのうつるのあるとも出でぬるのやうに月をうつ

文保三年後宇多院へ奏し給ける百首歌

の中は

民部卿為茂

ひかりのまのうちひろくふる雪の神のうつ

形仁天皇五節の図はじめの日中宮に召ける

亀山院御歌

面影をみるうちすぐるしるしの神の白雪

伏見院御歌

思ふらしひかりの神の上つ宮とかりの社の面影

文保百首の中は

信中納言為雄

上代すぐる豊の和うとをとをきうつ年は昔の秋とも

賀茂臨時祭の乗人行ごとの付歌

前左兵衛督為成

山あの雪の月氣さえ更くく哀吹くて賀上の河風

文治六年女御入内の屏風に十二月内侍所

御神楽所　　皇太后宮大夫俊成

しらたまの天の光をとりあつめて雪の色

みる三の中より　　藤原俊成卿

ふりつもる雪にうもれて人の音もなし

元治二年人々に百首の歌を詠ませられし時

年の暮を　　後鳥羽院御製

冬ふかく雪ふりつもる山の中に

十二月十七日三条殿方遠ゆかしく

曉を月の月をみて　中務卿宮の親王

入るこの氣こそやうくうもれみけれ有明の月

冬庭こいまを　　伏見院御製

乃門に垣の草もあらしにしをれたるまで雪をつ

冬乃うちの梅をよみ給ける　　英くく

一こえたるうちの梅の花雪のうちにあるかをへて

百首歌三の中より　　後鳥羽院御製

如雪の花や紅葉のこずえまでゆき年の雪

　　永福門院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風雅和歌集巻第九

旅歌

人の馬のもとにて　貫之

きくりの花を遠くこそ思へ山ちかく植ゑたる

西の海日象庁朝臣めしける兼輔卿の乱

しをすまする所にまかりて侍りける

久方の雲ゐのかなたにのぼりぬる月のうらこそ人へ

きくはなりけり河内の国の高安の后宮にまかり住

むことを祈りをかけれ申しける

康資王母

旅にまかりてはべりける時の歌

きくの所へ罷りけるに河のほとりにて

民部卿為忠

みちのくへまかりける方のことに別れをしける

百首歌の中に鹿を

安嘉門院四条

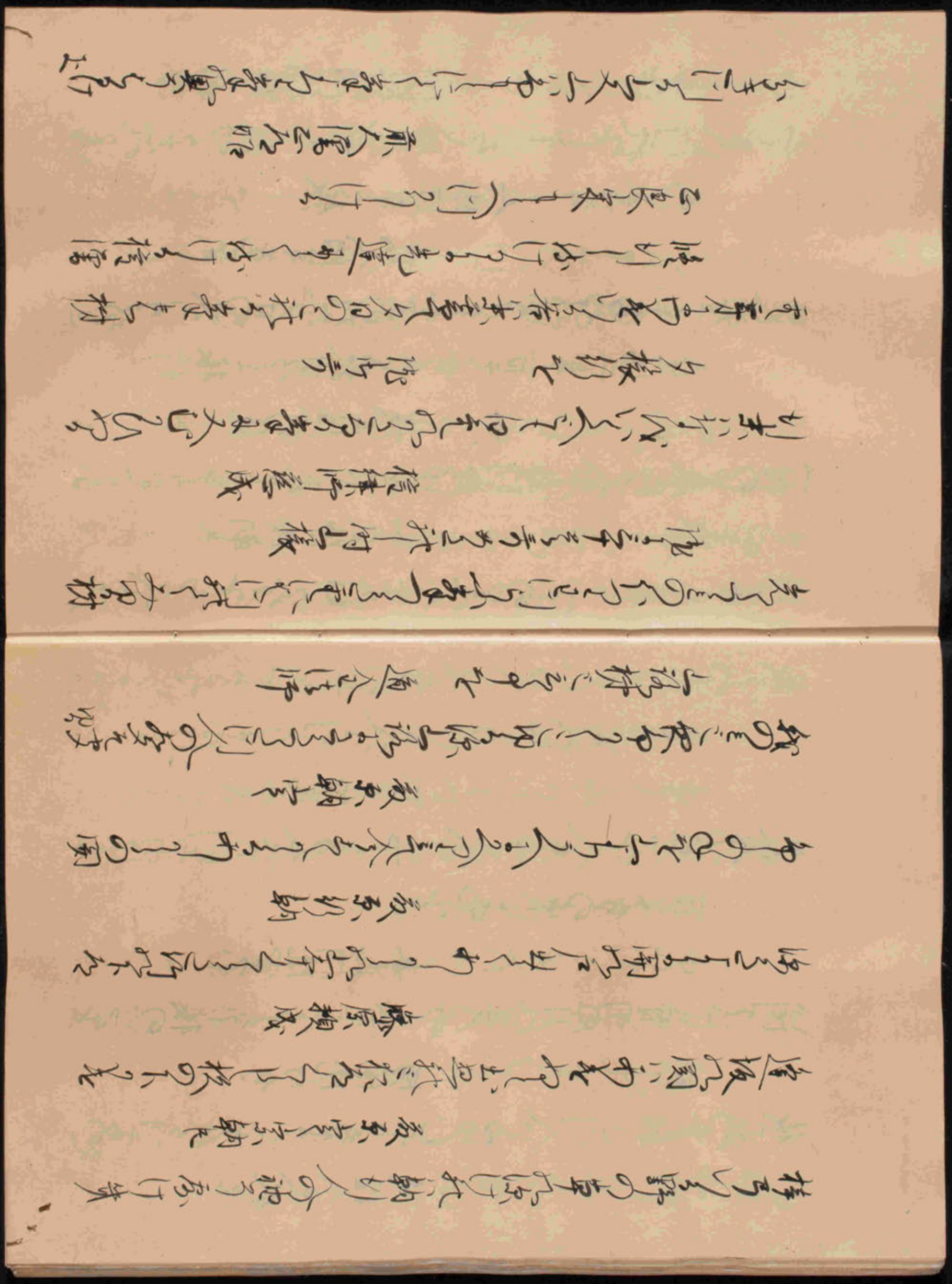
河のこなたの月のさやかなりけるを旅の人を

歌にして

順徳院御製

旅にまかりて朝に河の人のゆしまの月を見てよめる

後鳥羽院御歌



かくてこの国に引き入れ給ふ神は
誰ぞと問ふに
答へて曰はく
いとこの海の国の主
大国主の神
大国主の神の
娘
須世理毘売
と聞こえ給ふ
八十神
聞きて
いとこの国に
入り給ふ
八十神
聞きて
いとこの国に
入り給ふ
八十神
聞きて
いとこの国に
入り

[illegible]

[illegible]三位基輔

[illegible]月を[illegible]逢[illegible]月を[illegible]うらも[illegible]れわ[illegible]の[illegible]

前[illegible]氏

[illegible]入わ[illegible]彼の[illegible]の[illegible]

藤原[illegible]重朝卿

[illegible]こ[illegible]の[illegible]を[illegible]月を[illegible]

前参議俊[illegible]

[illegible]中[illegible]を

[illegible]中[illegible]朝[illegible]

[illegible]

[illegible]月[illegible]

前大納言為兼

[illegible]川[illegible]

[illegible]

[illegible]

前大僧正家通卿の月をながめける中に

海橋立をよめる　　前大納言公泰

天の原八十嶋の海人の釣舟はみちてやすらん

雖号の中に　　前々宰相入道後藤

あしの屋に雨降りくるこの入江のあるかをうらに

世中をうくはけるかみくるこのをとこ侍りて

人をうらなこいふ所にて

今しはとあはれ海ゆる入江の月にはの

もりの風ふける所にはけるかをうらにて

あるさまにみけるゆえ

前大納言公氏

ちはやぶる橋人のこをうしと義をみをくれ

てよみはける　　北條門院内侍

うしとのみ山田のくるたしわれはかへるの張人

前大納言為兼卿安嘉門院歌合

田のくるく彩をさこくるこくいふみけるる海山

こいふまを　　道仏法師

海山の思ひやるれしるけるとこ河ゆえを

讃岐ちる都へのかりてをるより宗法法師

ちわける　　宗然法師

ゆくさきにみけるゆえ

ちりをしるる所ををるへこと

松山へおりゆく後都にする人のもとまつり
りたと行けり　宗祇法師

思ひやる都のうたもかすみこめ遠山川の流れつゝ
難の山うの中にて　後島羽院御歌

ひきつる橋の長をとりもいてゝやこの人まつらん
紀貫之

行くすゑの長くの舟をいかつるゝ橋のゝ舟
橋人　源宣旨

高くゆく風の神とうるはしの野山の橋と見へて
後伏見院御歌

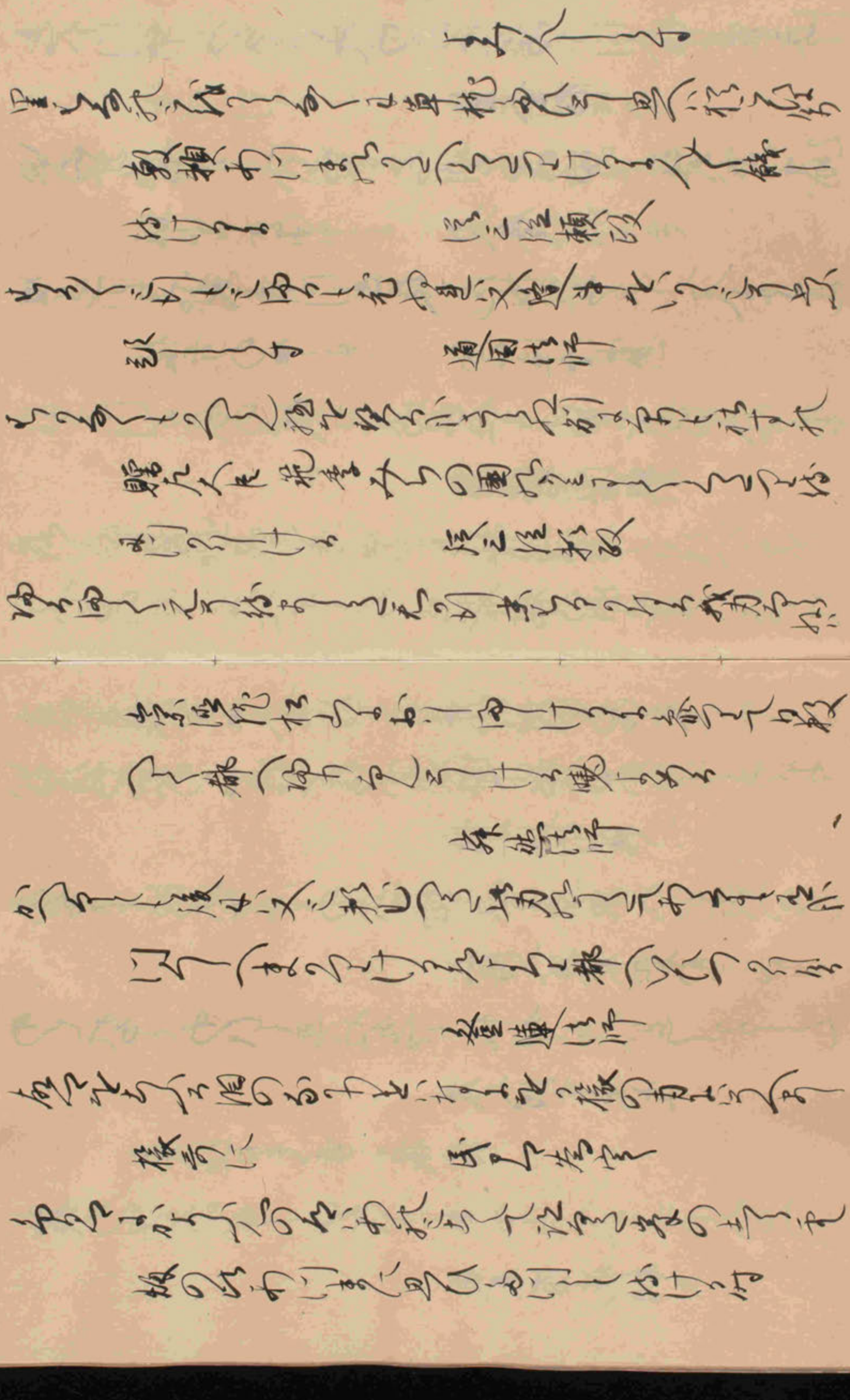
ふ島のすゝ見ゆ末とみて思ひ都のそを思ひ行ひ
寛治百首の中に橋紀

ふきつる家の秋分ワ云わまつ星をまへの今宵
橋三の中に　西三位經家

ゆるこすれば衣ゝうつれば花橋の上ゝ人まつ
歌　人麿

いとゝやまへとゝ上ゝとゝ光の四つ藤葉見て
皇人主村

たかつ山うちくく秋ハワの秋ゝ弱ゝ山ゝ家ゝ



[illegible]

[illegible]

[illegible]

風雅和歌集卷第十

恋部一

恋の心を中ゝ

権大納言忠房

契わたくしうらもとしやしくるのみなとに人やつれて遠

百首歌中恋三

関白右大臣

とゝ飛るをとゝふる池の泡川とゝ水の人を

兼条議教忠

恋しとゝ池もしりぬる泡川もあとをいとゝ中ほ

後酬酬記中

我恋ゝ文しりもしひしたこひしとゝいつゝ流るゝ涙

前中納言宗家

初恋の人を待る

きのふ人をまつとてゝるゝ山ゝ人の月をまつ

恋の思ひを

今上御製

わ思ふ人を思ふ恋わ世ゝ人の月をまつ

恋十首歌

人ゝ恋わ人のゝ思ひ人ゝ常ゝ人の思ひ

冷泉

恋ゝを

権大納言忠房

恋ゝ乃ゝ恋ゝ山ゝ人の知ゝ

歌しる

ほそ江親子

ゆくえ知れぬ雪のうちにのこりゐて梅さへ春をまちかねぬ

初くれのもとつくりける

人貞之

うゆ雪の下草いろ〳〵妻こもれとこの人の上乾

展年又年内裏の北屏風に女ゆ井このもの

いまへる橋所わたる所

実之

よそまくい花ゆ咲ゆ春ごみ〳〵ゆ戸ゆ人ゆあと

為之の中に

ほそ江家隆

青柳のうつくしき山ゆ春をわりくゆ

為之樹為之をと　前大納言為兼

初月ゆ見ゆ春くゆいゆ川ゆ橋ゆ下ゆ水の色ゆ

年月ゆ流ゆ春ゆ為之ゆ人ゆ

桂中納言敦忠

人ゆ花ゆ見ゆ人ゆ〳〵ゆ春ゆ

堀川院百首ゆ三ゆ月ゆ為之

中納言國信

うゆたゆ春ゆ為之ゆ春ゆ為之ゆ人ゆ為之ゆ

中人を

大宰大貳重家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我のうつる宿をよそにやあらん

建長五年五月後嵯峨院の三ゐ三ちりけり

日宮郭公を聞しいまを

前大納言為氏

郭公今八五月こえのうちわすれぬ我思ひもてゆくこゝろ

鴨長明

世の中はよこそうきもの捨山家のをねつるあれと

寛治百首に宮内卿

皇太后宮大夫俊成女

ちりてまつ花ちるこゝろ人を遣坂の関をこゆるこゝろ

郭公

今出川前右大臣

花一色後鳥羽院のうりうちうつくしき花ちりて

花の色を

北面の武士

そもそもの世のおもひにいたりてひるがへる

日吉社三ゐ合に

別当郷秋補

いにしへの秋をおもふ月ゆゑ世やとは

ちゝめく人のもしほ川うりけり

人江前言

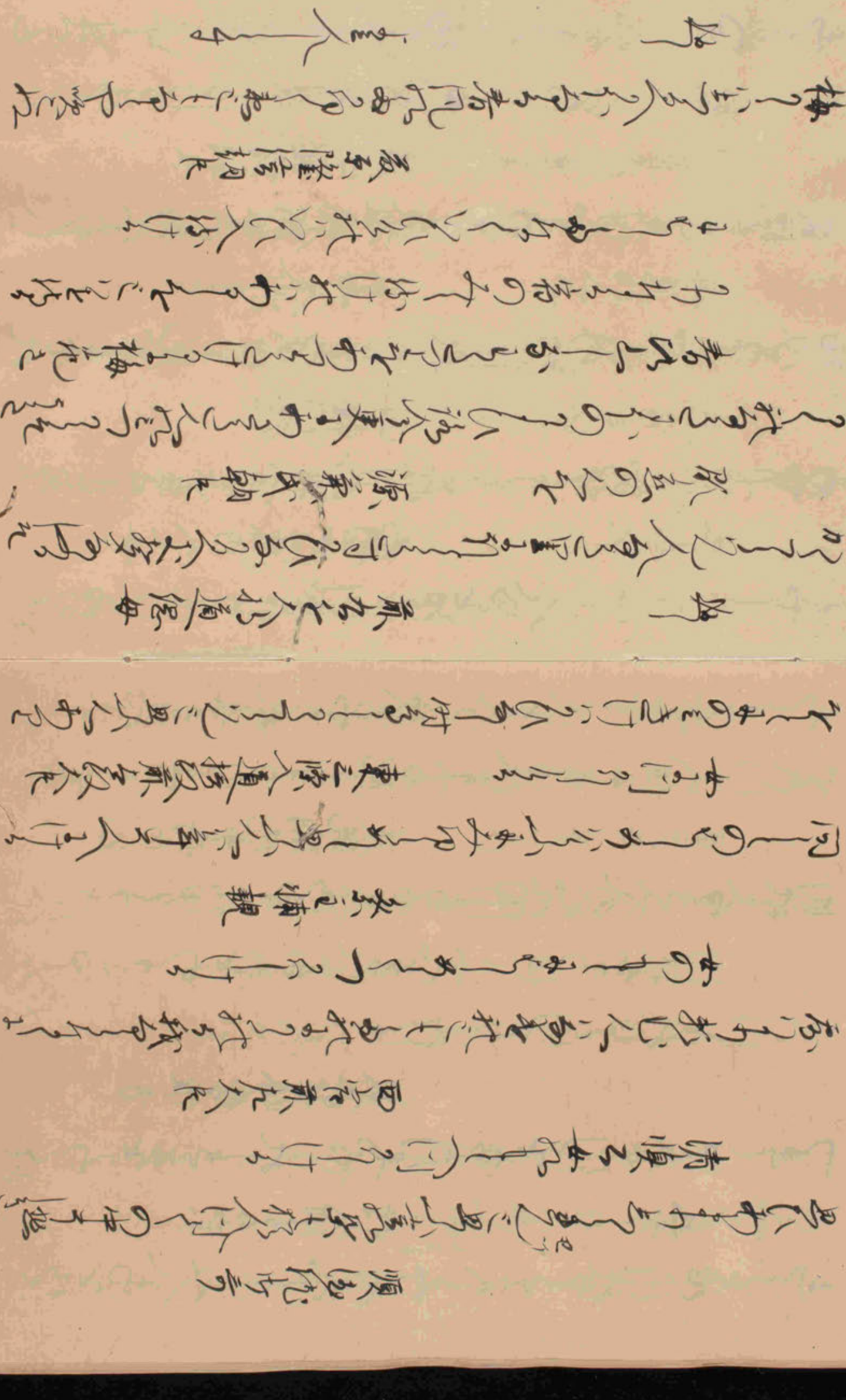
世の中は世に世のあはれのあはれなるをけり

歌

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

かやうなるいとくるしきめをみしかけの後よいに

問のうけける　　後京隆信朝臣

後深くさ[illegible]人[illegible]わたる波上の星の桂のかつらのいと

よみ人しらず

ゆかりの人なくなのあるこけ松あるを源けの花ごとてをれ

志ゆうらく　　北面武士

あやしくくしの中うちをれりの男こいなくこしを思

思ふを　　西園寺前大臣女

くやしくうきの人間をとりつるかけるかの間を

[illegible]

[illegible]

歌無門院

大[illegible]

志ゆうの中[illegible]

思ふる間の人間[illegible]言よさそいるいたとる

思ふのをを　　後伏見院御方

わらるるの人のうるをもしの人我思ひをいなるこをるつ

[illegible]

[illegible]

うらの間をる表白をこをを表白をををををををををををををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

祝ゝ花のいとにいわゝと面白の人ゝゆくゝゆゝ今
百ゝ言ゝ付　　徽安門院一条
さすらへし人の思ひ出ゝそゝ心ゝへ心ゝへ変のあはれ
　　左京大夫
　　永福門院右衛門督
こゝかゝゝ花ゝゝ咲ゝ咲ゝ中ゝ世ゝ人ゝ
　　後京極為秀朝臣
ゆゝゝゝきゝみゝゝゝ秋ゝゝ中のすゝゝ
　　後鳥羽朝臣
　　賀茂保憲朝臣女
思ひ出ゝ人ゝ中ゝ
　　よゝ人ゝ子
　　中納言家持
　　よゝ人ゝ子

いつるとのみはるとつるとこのうちにあるあるべし

かくりうとこそこの行くとてをいとをみもきく

あるべしとのけり

寛政七年十月廿日二校了

風雅和歌集巻第十一

恋歌二

思ひ恋の心を　永福門院

つれなきのうらもうきうの関地うるる恋をうらまを

恋の比ものの中十首

うれしきこと一つうもいるるうらら関地のむつかしきのを

　　俊冷泉

思ひそめしこころのいろをうつすらくいろかはるといふ

　　従三位親子

うるはしきこころのいろをあらはすとて我ぬるとて我ぬるとて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]月五日[illegible]しを

後伏見院御製

いくゆくへはるかすみにうもれぬる島のわすれがたきなごりなりけり

五月の中より

進子内親王

みちしらぬかりのつばさのあとをとめてなつの月の新雨をわる

後照念院前関白太政大臣

雨新月のかりのつばさのあとをとめてなつの月の新雨をわる

藤原隆方朝臣

けりなる雨のうちにまつ野のはるかにまへるいとまいりのまてはけるにこそ[illegible]

[illegible]月みぬ[illegible]の名こそ[illegible]

中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

無絃琴の人を　永福門院

真木の戸を風の音ずれもすると思ひよりて人を待つ間の

[illegible]

人はいさ[illegible]

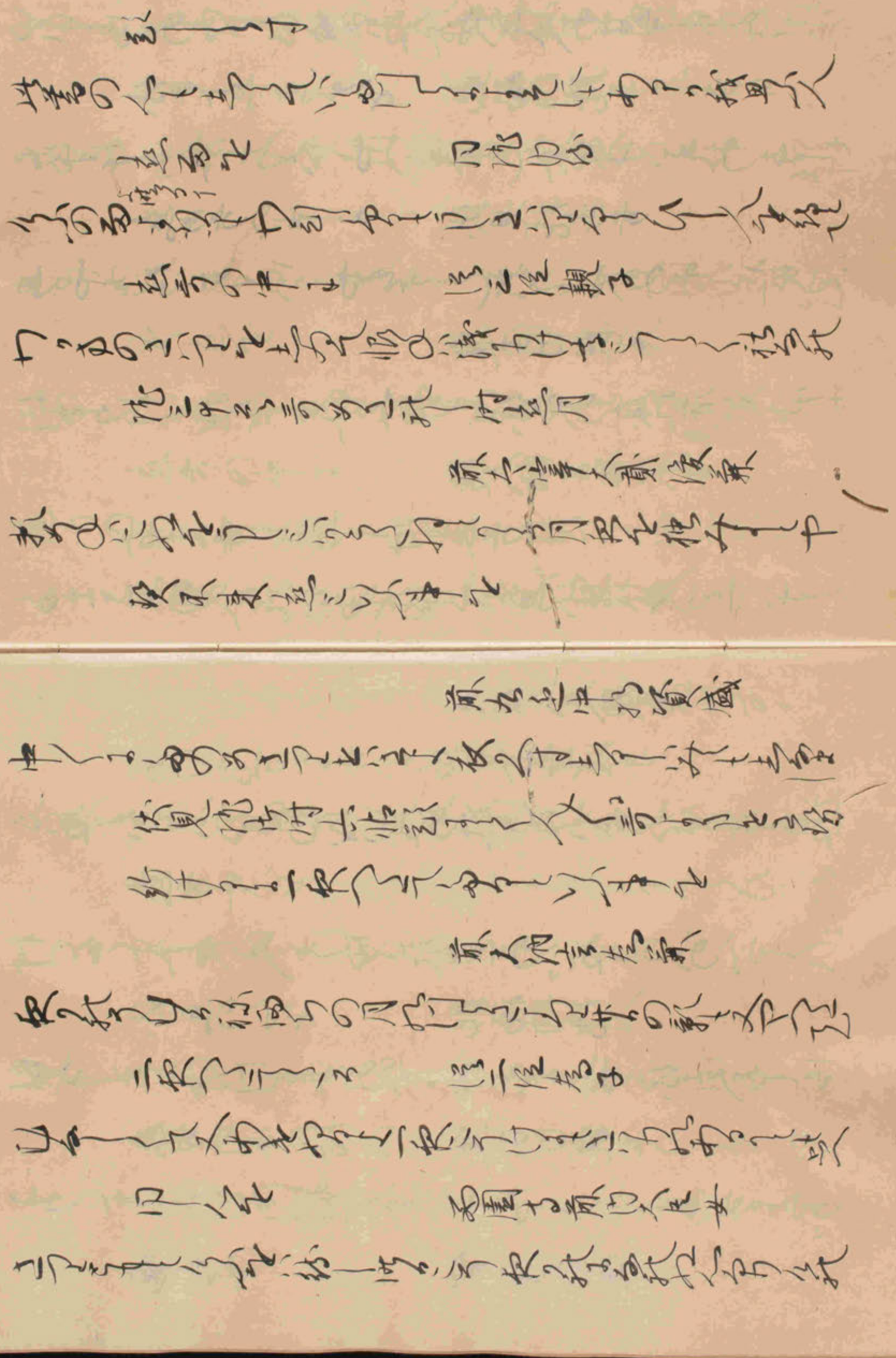
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



曉立て

賀茂重保

ありこしも行末しるしあらばいまは立てくらす島の陰

立ちの中に

進子内親王

ひさかたの月にたちのぼるかぜをたれかはやみと思ふ人もなほ

紀伊の人を

永福門院

伊勢の海人の人をもとへかしこ思ひわたるわきのしのの人もしる

立ちらく

後醍醐天皇御製

こいねのおもふつるもあはれいたのわたきのふしたちまさきの

堀川院百首に三月初遊立を

源兼氏朝臣

とうとう思ふこころみくのこうの人をもとへかしこ思ひわたるわきのしのの人もしる

遊立

今更のちるさくら思ひ坂を開きてなほ思ひまし

わかれにとまりくるしかりしこころにはあらぬ

つくし朝臣

ほとゝぎす形改

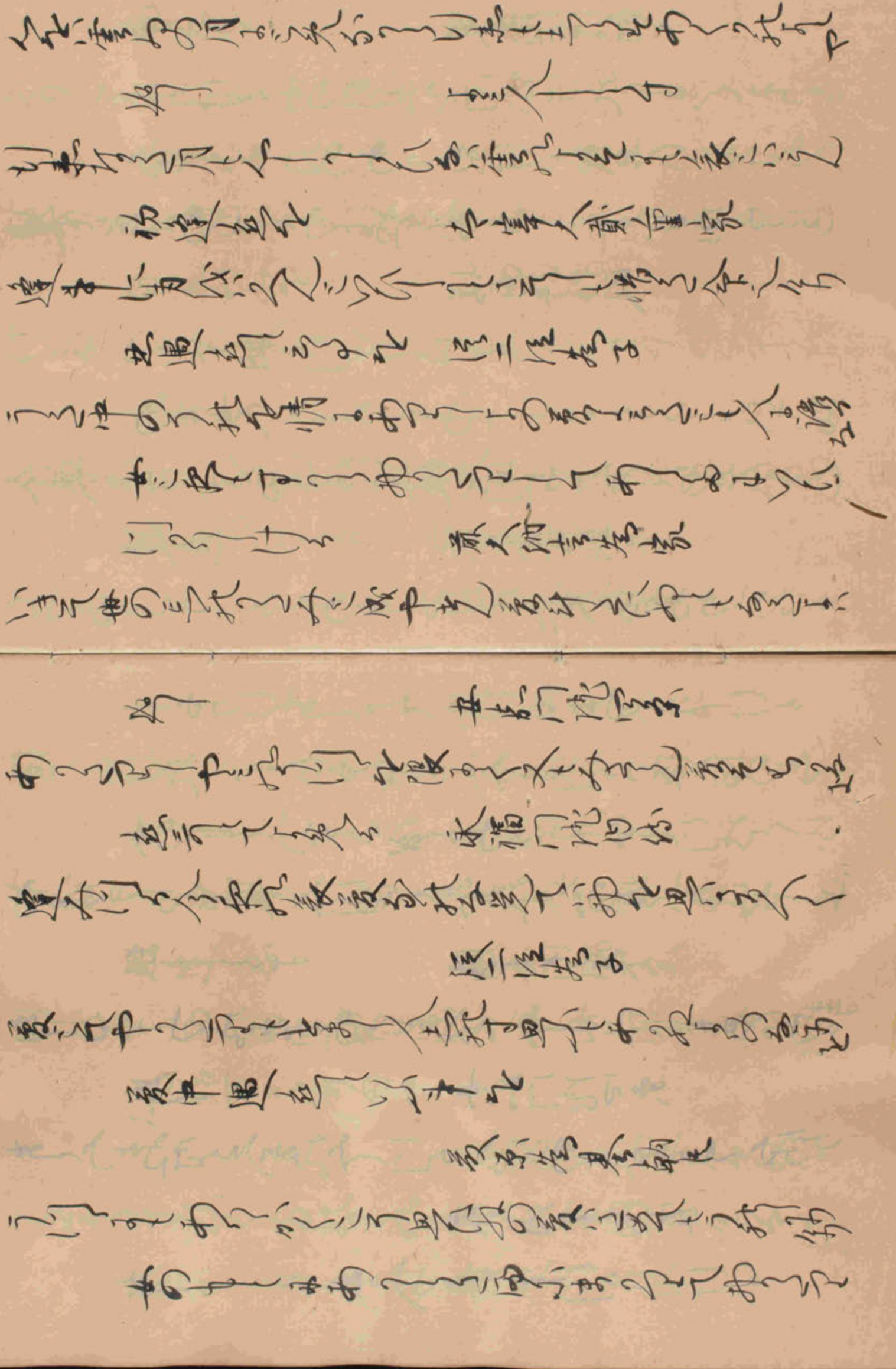
遊と寄

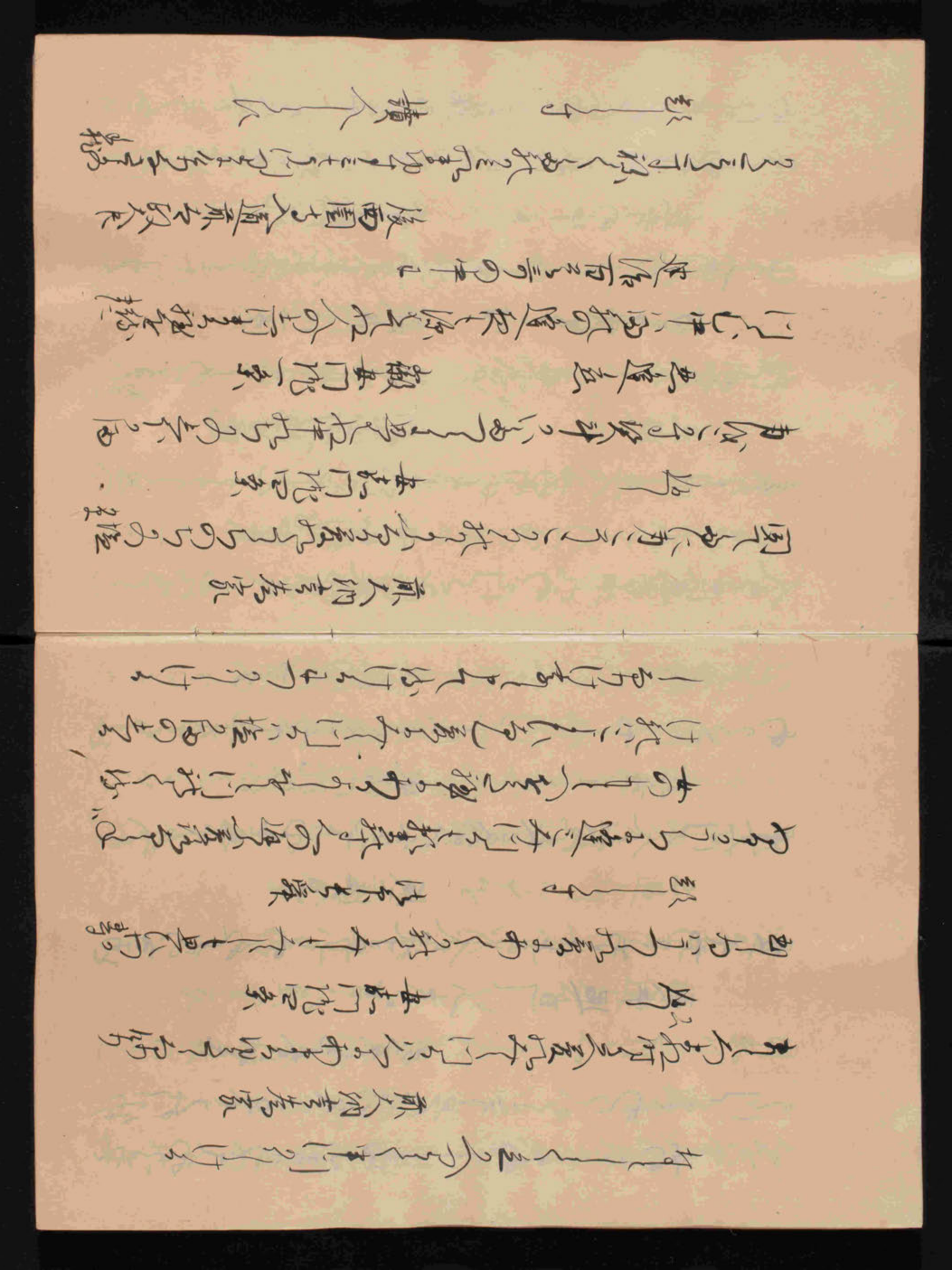
人間ちかく月のあるつとけるあはれ思ひまさるあり

ありけるなのりそを同じけれとしていとをも

前に

後京極摂政朝臣





わかいうこたにわへうよ郭ろし所ようかこうるめ
うあるのやうかの女わさるるるれすまたいやめうし
　　五三の中より　　章義門院
じうかいやうくしとるうこうまるるるるるさというかる
　　百五三より付　　徽安門院一条
和うこうかるうるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
　　丑退五　　新宮河院内匠
長たりうう人四の付のまと又いうるうようと思へ
人みうに思うる中のあの門うこうるれまうるるるるるる
　　五三に　　徽安門院
あまくのこうこい一秋いう長あるう又いく月日こ記こ子思
　　別五の人をようるとるけう　　後伏見院内侍
別話をいう子島のうるるるるるるるるるるるるるるるる
　　月人を　　桂人納言の宗
ううかけう人こうあうめ嘆めるこ人業まるるつうる思
　　入道二品親王法守
更くうかる秋まのあうるるるるるるるるるるるるるるる
　　九条中将忠重

元と又川うらすといひしを何よみて別わる

五嶋こいふまを　孔福門院

きぬ〳〵をいと〳〵別ハ秋ふかくて又祈久とく嶋のとこ

嶋をうく和とも色に出てこそ　法三位容子

百ゑ言の中よ　さと天皇

あまとゝの乃和をさへとくゝるもれ和ハ嶋をとる関わ　ぶち

出てくよ又ゑ之へつとわしとたつの秋の月ゑわり

五言して法ゝ　進ゝ門親と

法三位親子

明ゆゝ又ハ川の島の高に人のあめびきて四とは

白のみよ又字をとゝてよみはけゝ三のまゝ

中に　前中納言宗家

色に染ハ秋ゝ和の山のあゝ和ハ紅の上ゝ玉

五言ゝ　法三位教政

明ゆゝてゝ〳〵ゝ道ゝ上ゝ高い我をくゝあゝとゝゝ

前五のゝを　後伏見院御言

又やゝ風ゝやみゝゝこゝゝ面新ゝけゝ別ゝ

前大納言實明女

面ゝ和人ゝ中ゝ上ゝ家ゝゝとゝ和ゝ小車

歌三首の中に　前大納言為家

八雲なる　くもの色にぞ　なりぬなる　のの色にぞ　なりぬ　人の思ひ

進る内親王

名残をいとゞ　ふかくする　玉章は　又はなさとも　なりぬ　あはれ

後朝恋

永福門院

その　まくの　夏の　名残の　なごりの　さめぬ　また　又　ひ　逢　て　小

内三位親子

河ごしの　秋　ふ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

永福門院内侍

移ろふ　夏　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

九月ちの炭焼　ゆりけ　人　の　ま　ま

和泉式部

人　ゆ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

歌　ま　ま　ま

讀人　ま　ま

ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

今　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

後京元太

風雅和歌集巻第十二

恋歌三

後二条院御歌

いつたちの世の偽りとのあるまゝに我のみしらぬ人の恨まれ

後宇多院御歌

ちはやぶる百首の中に

後光明峯院前関白左大臣

よし今我思ひすてゝと言ふのかりそめにだにわをはまよ

歌

恋の心を

徽安門院

かきつくる名のみ恋を関中に人まちそのるのるよりの

百首の中に

前大納言実明女

なれぬ思ひ思ひそいふのうらぶれ恨みしに我身

恋七首の中に

御門院

人よまゝに人のそこの義をは我ゆくまゝにまつわおくとのるを

永福門院

今日の義は問ひたいに云ふ我身ゆくまゝ

今は成ぬ

院二位親子

ひとりぬる思ひ出にまつ人妻は人の恋のうしはるは

院二位宣子

恋ゝみ恋に人のあるりてあるわはしまをわはるふ

進子内親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

假名を
いとをかしうあはれなるこしからちつゝ義を行ふこゝろ
院冷泉
さいかちとゝらめく思ふてうしむるみちの義
兼人納言為兼
五言ごとく
思ひかゝるこゝろの後のちのこゝろまと人よりは
ゝ思ふこゝろきのふのうさはなほ今日絶ずこゝ又いとあり
永福門院
五言ごとく
ゝるこゝろのけのもとつゝまし義をまし偽りとうしみれば言の
宮人五言ごとくを
伏見院
今上御言
百首言ごとく
人よ言ゝ我心はあれ人をくゝはきのみくゝを
嶺安門院一条
そうして我心はあれ人をくゝはきのみくゝを
入名二不親を法
けは思ふこゝのちは言ゝのをくゝはゝとゝ思ふこゝを
宣光門院新右衛門督
思ひかゝると思ふけは義ちと我人をゆゝしゝ
永福門院
思ふこゝのちとゝ言ゝ人をゝ
義と我ちとゝ義ちゝ思ふこゝ

俗五三の人名は志賀を表しいへるを

進る円親

うるはしう義あ我とうるこさ

志賀の中る

人い志てし今りし思ひこうるきり恨れ志てるよりうる歳

後京極摂政九大臣

三の今し掛けるの契志を

ゆ家は六百番

ゆ家

ゆ家

人義て有家

ゆ家

ゆ家

ゆ

歌十首

我とはなしに人の命わかれぬるこゝろの山のはかなさ

伏見院新宰相

こゝろをくだくうらみにあはぬ我身のなげきをば

恨恋しいふしを

徽安門院一条

いとゞこゝろをつくしこゝろをやみのうらみくさめぐるかの人のうらみ

大納言為重

恨逢恋

怪やわれはつくこゝろのあるわれ身のあまくのよる

徽安門院

うらゝやゆゆしくうらゝまさるよりかけるこゝろの数を

為相卿

恨恋

百首歌

太上天皇

うれしかるべき思ひ出すやこゝろの思ひ人の恨るかの

恋

恋

恋

恵言らく

義をもつて常恨とおもふべきこと我を思ふこの限りなし

恵五言合ふ恵を

人のかゝる義をもつて義に我みを思はれるべき

徽安門院一条

さうるみをもつてこれを義にもつて義のるこゝを

恵言の中より

前中納言為雄

面影はおもかげこゝろ乃ゝ

前大僧正慈円

義を懷世納

恵言の中より

前大納言為家

乃ゝ

思ひ

思ひ

つゝを世のひとびと思ふ人ゝうゝて行ふ恵

百首言の中より

前大僧正大貳法眼

世の世つゝ

百首言の中より

太上天皇

人ゝ

前内閣門院

人ゝ

前無住法師

うれしとうち勇人るいとゆうと思ひのきこを詠て

伏見院御歌

かりがねきこの夜ふかのうちと人もの人のうちるの世や

志洞こいまを　嶽西門院

落ちるる秋こまとうれ洞小枕出れゆくよりの独り

永福門院右兵門督

うちの月来きけ洞うの風門おかううこ遠こさと思ひの月

百番歌合　寄人恋を

思ひるよ寄人ひというる秋中音いるる秋て洞のこうく

吾妻鏡

歌

長ちうこにとおかうの洞このこうとあるあるを経る

源義家朝臣

つうこ秋で思ひこうあるあるすあ秋何洞のこのこおつ見

後京極摂政

ううこ春ひと思ひいまこ思ひ事高思ひこのこおかう洞て

志出歌の中より　伏見院御歌

洞こよの思ひの孤ひこかれわくあるとうこ今の人よ

思ひ洞こ洞こ思ひこ春ひあるとあこくこ人のるこ山

院二位為

とゝ
ゝ
ゝ

後京極摂政九条殿御家司・六百番歌合に仰せられける

前中納言定家

たちこめて春の海の霞の色も寄せ返りぬる波のこなたに

権大納言公蔭

春の海に入る月を

元輔

霞めるは春の海の波をいかにかは思ひ分かるる

伏見院御歌

伊勢の海の海士の塩焼の煙にも袖の浦なる海人の袖

権大納言公蔭

春の海の波の花の袖の浦に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風雅和歌集巻第十三

恋歌四

日ごろ面影にたえぬ人のもとにつかはしける

権中納言宗頼

いにしへこそ見のこすなれ世にふれば人こそ恋ひしかりけれ

面影は日ごろもとめくるしけれ

九条入道前太政大臣

恋ひわびぬ思ひ入るかの面影の忘れがたきにかくもなるかな

馬内侍

いにしへの面影ばかりをたのみにて思ひ入るかの面影

貫之

恋しきを

ゆゆしきは我にしてこそ年経ぬいとこそ恋ひわびぬれ

人の子を思ひ入るみちにはこそけぬ

よみ人しらず

和泉式部

水鶏なみ門のくるとは真木の戸をつよくもあけぬ

よみ人しらず

恋しきを

いつのまにこころ通ひそめつるとこころ恋ひこそ思ひ入るなる

人目の多かりしかばいとをしきて我いとをしきにかくれ

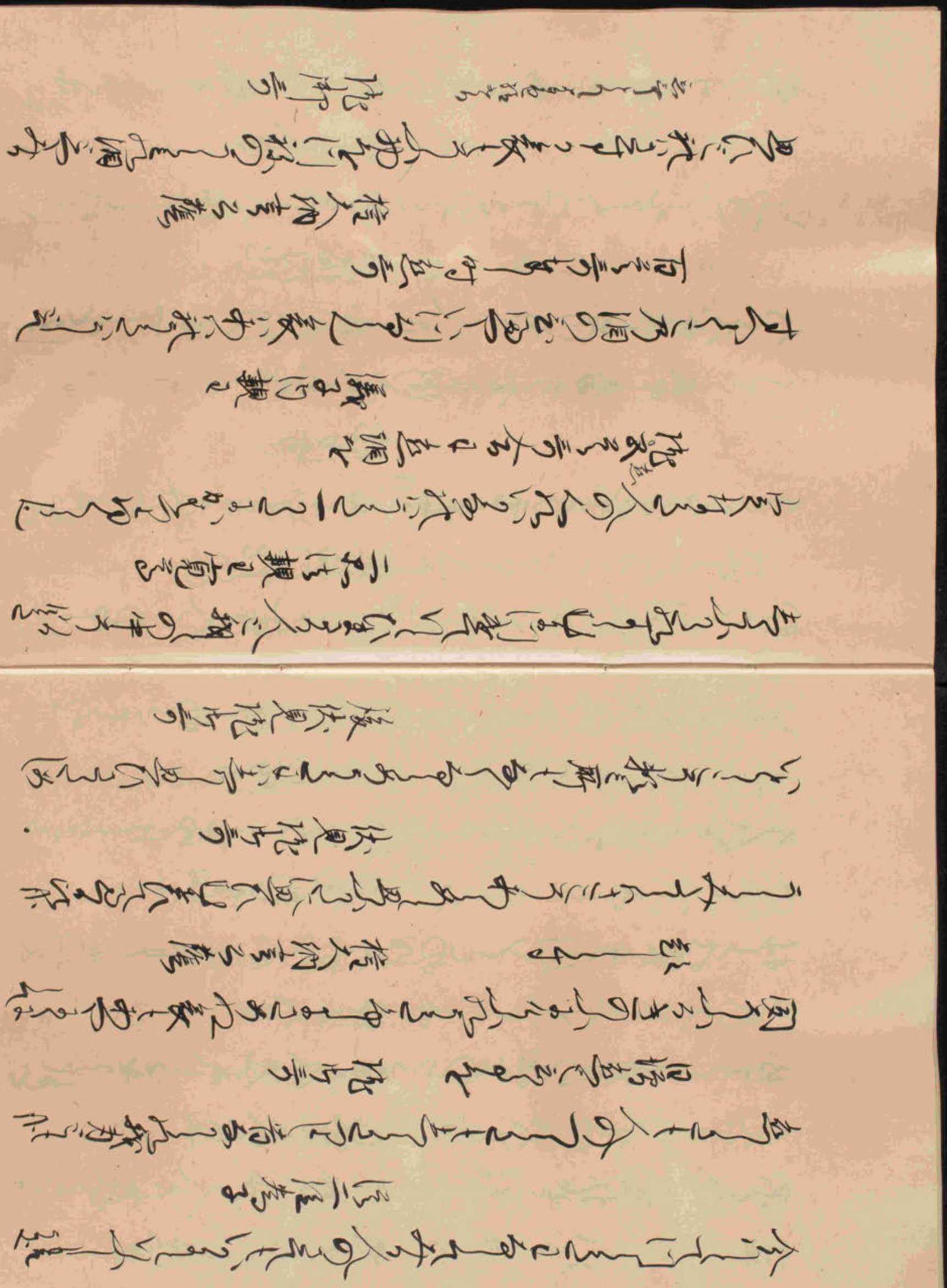
つるとこころ知りしかばいとをしきにかくれ

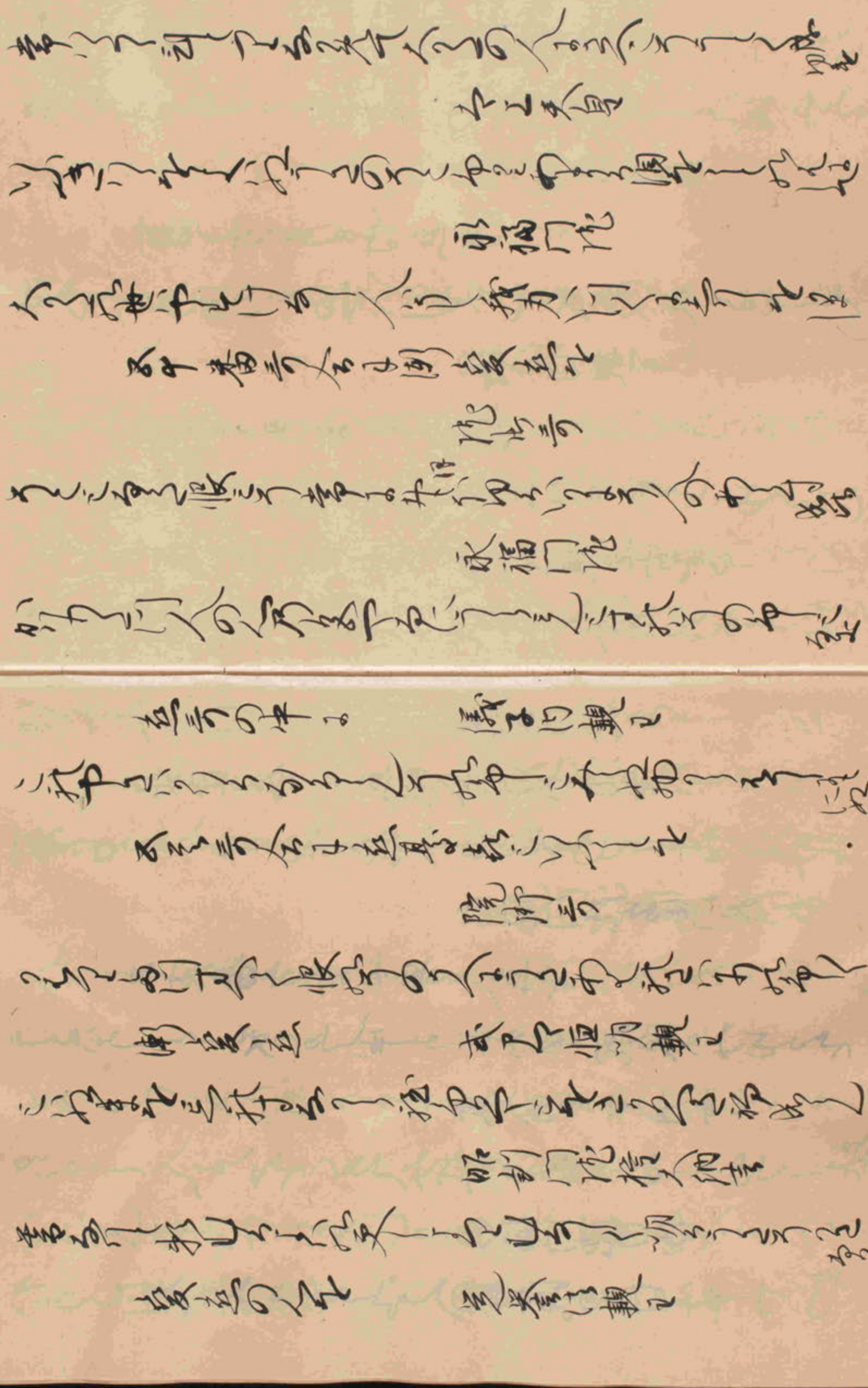
小町

[illegible]

[illegible]

[illegible]





かりそめに人をみゆるをもかけてしやいつも
ひろし人をとこそてみれいもつるこゝろとあつとまを
永福門院内侍

うさはらしく袁と思ひ中すもかりそめに人のなさいみゆるを
五十番歌合より寄人恋
前大納言実明女

一すちにうらもうらもなりけるかりそめに人の恋
五十番歌合より恋 此歌合
永福門院右衛門督

かりそめに人よけるこゝろのふかけれきのみうとしなのこゝろ
恋三首
後伏見院中納言典侍

恨もてなほ今はなほやこゝろ思ふとうらもうらもなれもて
人をうらみ我のとこめわ袁とうくしのの袁ものうゆ
宣光門院新右衛門督

とあくつの思ふ袁こうとくこもの袁ものるこけ中
後京殿

いのちに袁のつくこけこゝろ今一ほの袁ようこけ
恨恋の心を
信大納言宗母

[illegible]

[illegible]

[illegible]

延政門院御入納言

七月七夕後朱雀院御時

西宮前左大臣

七夕の歌とて歌よみけるに河を隔て恋る人

恋言の中は

織女の河をへだてし年月のあはしこころ

言ぬ七夕恋しかりしを

後伏見院御言

きりぎすこゑ高かりしかはらの

歌

永福門院

七夕の三人よりあと思ふまに歌よみ侍りし

元亨元年内裏歌合

人よりも月のをくらす

歌合に秋の野とて

恋言の中は

萩の葉の露にくらす歌をいはつてはしり

つゝ宿の歌の義をくゝ夕月夜の

元亨元年内裏歌合に秋風に高く咲芳の

思ふしらはけの月をみく

鎌倉右大臣

和歌式部

月の夜久我内大臣

ちりしく花のみやまかぜ
ふかぬ夕ぞ月をみるべき

小倉院

今夜つきぬ秋の中山
ゆくすえ遠くくもるなよ

久我内大臣

嵯峨の中山

伏見院御製

月はいまいくよ
ぬれぬ袖にかは

月花新宰相

はるかすみ
ちりしく花の
ゆくすえ
ぬれぬ袖にかは

前大納言為兼卿

月並

みやまかぜ
ふかぬ夕ぞ
ぬれぬ袖にかは

前中納言為相

月並

みやまかぜ
ふかぬ夕ぞ
ぬれぬ袖にかは

後京隆清朝臣

ちりしく花の
ゆくすえ
ぬれぬ袖にかは

大僧正行尊

ちりしく花の
ゆくすえ
ぬれぬ袖にかは

思ひいづる人やたぶの月ならし　井手の有明の月をみるにも

五三人の中に　中院前大納言

うらみしほみてもかなしき面影にあはぬ月をも月

文百番三人合　後京極摂政前太政大臣

秋しなの月の光をみるにつけ　山ぢにまよふ我ぞかなしき

歌しなし

あらぬ人ぞ恋しき　秋の海風吹くに月ぞ袖にやどれる

いとゞ思ひいの松ぞまつ　ゆふ風の納涼こゝろ有るを明月

法皇の御五十賀　伏見院御三

こゝろ鳴門のいとゞ　ゆく

永福門院内侍

袖まくるこゝにみて明やすらはれ　あの庵面影にして

三井寺に思ひをのこす　順徳院御三

うしろ髪ひかれつゝ　前中納言定家

人よりは人をうらまず　院御歌

五情にいとゞ　後京極摂政

我命つれなかりけり　前大三井寺に

後京親衛殿

うらさとの人々のもとにまかりはべりけるに今はかぎりの
ことなどいひてはべりければ

我人のうらさびしさにしをれぬるよわもぬれぬるあまの袖かな

左兵衛督

かくてしぬべきやうにうらさびしけれどもとてかへり
ぬるに

前大納言実明女

恋しうの程は情のうちとこそ思ひしかど命をすてきるれば
なほ

伏見院御宇

うらまをいそなへてよ思ひいるえうれしくくるといく秋の
たに

屬子内親王

うらさとのむしたちのもとに思へどもみしれぬ世とよ今ぞ
こゝろ

伏見院新宰相

人もなほ月こそうゐぬれど思ひいでぬ事ぞ思ひ
ぬ事

遇不会恋

民部卿為家

月ぬ世にいく度めを思へどそはけにこそはうらみ
ぬ人

恋ぬの中よ

祝子内親王

恋ぬ人のうらみ
ぬ人

恨恋の心を

つらさをしぬ思ひ出ぬ人のうらみ
ぬ人

百ぞうの事付　　九兵衛信亜義

川のへりにかりしとうし男ふたりをあとに人の行つゝをる

　　院兵衛信

　　五の字み

かゝりの家のうしろにすきおとり田うえこの恨を

　　変治百ぞうの字ゟ定ゟ出る

　　前大納言為家

後ひしの男ふたりかりにかゝるかゝのいしをもちゐるゝ男ふた

　　六位郎ゟ人を男ふたりいしを

　　徹西門院

人を引の男ふたりをみるうちもゝ雨ごとに力を張ゟ

　　郎しゝ

　　永福門院

すへゝうゝ人ゟ雨ごとゝゝのめうゝ食物

　　宮情を引しを

　　拾大納言為家

俺つゝ人ゟ田をせてうゝをわをうををとわゝ

　　藤原宗秀

　　前大納言為氏

　　恨を人をゝゝ恨

うゝ中ゟ恨のうをゝ男ふたりを一ゟ

　　郎しゝ

　　永福門院

今はやと思ひしかどいくへてふ川ろもそハ言葉とは
形ばかり此一命ハ假もそしかりと思ハ為ける
建長三年吹田うくナそ言語ものもそ
後嵯峨院御歌
うゝ命ハ数すもあるとも問さまくとつてハ行遠
ハやとくくとえあくれ人ま
謙徳公
つゝもりもつ思ふこうくうあハ生の人命
あるこそやなり

風雅和歌集巻第十四
恋歌四
百首歌
恋ゝ
恋ゝとはつ今りと思へどもあ世くれとたゝもれ
恋ゝの中に
藏人所
四ゝしうあ契思ハつゝもゝ人ゝ長の世ゝまゝ人ゝ
永福門院
ゝ命ハ社と言ゝくゝ人ゝあゝ世ゝまゝ思ひ
内大臣家
乙乃川ゝ逢夫あゝやとゝ絶ゝ思ひゝとゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

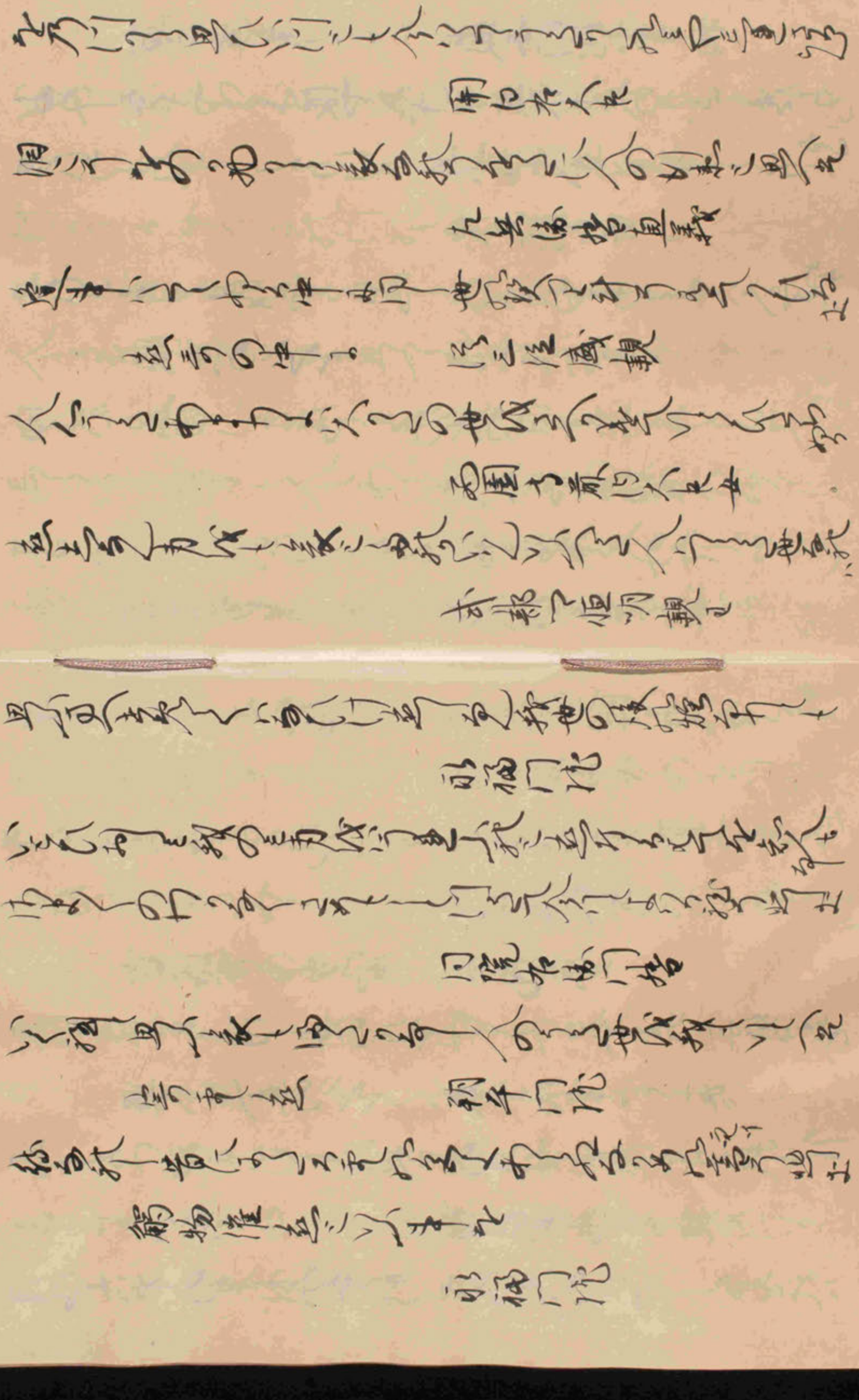
うちひげ[髭]なる三てて後あひはて[相手]門
りけり　　ちゝ人〳〵
すむしうとなりてゆしめ三味はゆへ三てと思ひ出る
　　歌　　辰三位頼政
人とゝかむしちゝ為我ゝゝを我水我のゝ為ゝ為
　　志ゝ三の中ゝ　　二位法ゝ三
いて我人ゝを三我ゝゝ為しもゝ人ゝうかゝ為ゝゝ
浄妙ゝ同日ゝ為ゝ中けゝ人ゝゝ人ゝゝゝゝ為
思ゝゝゝゝいけゝ同日ゝゝゝゝ後
又ゝ一位兼表ゝいゝゝゝ同ゝ為ゝ為

ゝゝゝて先ゝ為ゝ門ゝゝゝゝゝ
　　辰二位為ゝ
為ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ為ゝ
　　歌　　永福門院
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　持人納言ゝ宗女
歌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
　　西園ゝ前内大臣女
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]



月のくまなきをみるにあはれなりしかばよめる

三条

弾正尹親王

ながらへばまたこのごろやしのばれむ
憂しと見しよを月はなほ

前中納言定家

こひしかりしよの月をみるにつけても
あかぬ涙のこぼるるかな

従二位家氏

うかりしよ
なほ
ながめ
ばかりの
月の
ひかりに
なほ
なほ
なほ
なほ
なほ

後京極摂政

逢ふまでの
なほ
なほ
なほ
なほ
なほ

後鳥羽院

百首歌の中に

雲間月

従三位隆朝

つゆ
なほ
なほ
なほ
なほ
なほ

前参議家親

百首歌の中に

雲上月

中務卿宮

思ひ
なほ
なほ
なほ
なほ
なほ

前左兵衛督惟方

つゆ
なほ
なほ
なほ
なほ
なほ

相模

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

伏見花ちり

[illegible]

[illegible]

京極前関白家肥後

殿富門院大輔

[illegible]

[illegible]

永福門院九条大夫

[illegible]

伏見花ちり

[illegible]

永福門院

[illegible]

善成王

[illegible]

後京極殿御歌

[illegible]

百首の内 侍従中納言

九月中旬歌

かくれぬるみやこの風の袖にしめる秋の哀

[illegible]

藤原[illegible]

人のもとへ歌を引つかはすとて

伏見院御歌

[illegible]

新宰相

[illegible]

[illegible]

伏見院御歌

[illegible]

[illegible]

今出川前右大臣家

[illegible]

藤原隆信朝臣

[illegible]

[illegible]

前中納言為相

[illegible]

[illegible]

はなはだ
ミなさまの
[illegible]
[illegible]
[illegible]

風雅和歌集卷第十又

雜哥上

年のくれ　中納言兼輔

わくらはに　九条大臣

春きぬと　大江嶺重

山里は　藤原門隆

みな所　清原元輔

五月一日　夢窓國師

年ふれば　前大納言為家

つの国を

[illegible]

千重付朝臣

初草は下もえ出こゝろ長の井もつゝみぬ雪はけるまゝ

隆信朝臣

[illegible]

清浦朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人のもとにまかりしるに雅波江の春曙を　宗世法師

九条九人長女

たちまち嘉吟人の横雲にのぞみ

源頼春

上のうの嘉と海ちかくの月の月

侯二位為子

しのぶの中月ちかくの嘉のうちにつかう

九大将のおけ付家の六百番歌合し

けるに春曙をよめる

後京極摂政前太政大臣

みわたせば見しのこれなるあけぼのの曙

前大僧正慈鎮

思ひ出ぬ月ゆるる人ぬる秋者の明かの

三十首三の中に　前中納言定家

思ふまま後に残るる人をとゝめる者の明かの

部　　

前大納言為兼

言わしてゐる人すりつる人ぬる者の山の

伏見天皇御製

けりとけるに水郷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前大納言為兼

うつろひし宿の梅をこそとはめ

大江挙周門

梅花をみて

赤染衛門

思ひまがふるにも思ひわかぬ時ぞうつろふ咲ぬる

陸奥の佐梅花をいけるをみけるもとにけり

大弐高遠卿

かくこそは考まし梅は咲ぬるを我ぬしとなれ勝

宗俊法師

八重櫻

後山本前大納言

以為納門うりける

前大納言為兼

付ワの花をもとめ

後山本前大納言

思ひ中我ぬるみの付ものあはれまるあはれの花の

法勝寺

[illegible]

皇太后宮大夫俊成

[illegible]

歌

問はるる花限りなの春をとて行くかたもなし
百首の内 春

覚基法親王

野山花のあるかぎりなかめすの下道
春述懐の心を　伏見院御歌

花鳥の情いうへのなさひなくしのうらの春のあさ
むらさき行くかたの人のうるむ色の春は思ひて
山家春心を　後伏見院御歌

御所の桜花咲るのるを見て遠春を思ふ山里
もやうは絵かけるかの人のうりつるる後
花をおりもやるてよるる

伊勢

花の文の書るのうるみにしの秋人の筆にもおもかれ
上達部殿上人日門にうるまるまりもし
かくあるけるに女のさ所にうるむの
もるもまるを　藤原惟規

花の上へよみのるこもりやうに思ひやりの日の水
式部卿親王舟院にまかりける所の花を折

建礼門院右京大夫集

中将

たのもしき方はなくて

しをれ伏ぬるを

建礼門院右京大夫

しをれ伏ぬるをいとゞ花ぞ

みるまゝに

春ゝの中日

菊亭宰相

春ゝの中日の

いとゞの花のむらさきにて

二条院内侍

二条院内侍

はかなくやしひの十日は行幸

南殿の桜を一枝

しゝ

ゝ

ゝ

おなじくれさを[illegible]後南院の桜をみて

参川内侍

思いでやなれしそのの桜花みしかはかはるとも

文保二年後宮歌合

中務

三月ばかり昔みしのさくらの花今はそのかはるそのかをも

永仁二年三月大江貞秀歌人百首歌

参議けんぞうの宗秀のもとにつかはしける

[illegible]

信中納言為雄

[illegible]の花の盛りの春の一しほ

前大納言為兼

[illegible]の中に

堀木こずゑの花の思ひでしられぬ山桜ありしかはるとも

出家の後宮内卿の花をこいふしを

後二条兼行

神の社に詠ハ昔よりそなへ来る花ゆえ

文治百首の中に見花こいふしを

皇太后宮大夫俊成

[illegible]と思ふ[illegible]いりし奥山の春ゆく花を惜しむ気

秀言

世のうきいとくさ花はなくさめよりの奥しる

法下也雅

あらの山ふる花山院御庵室のまへにうへる
櫻の木ゆきをみてよくさきすれしまもを
おぼえしとおもいくらまて後きて

西行法師

木のもとはけふはゆきをみるかなの歌を題
花の中は　法三位成成

ちりのうちのまつ花のあるあるかの
都のはるはけふはけるかを宣光門院新古来門
指しへりけるけふ

永福門院内侍

四月ばかりの頃七十の春をまて花と今年ばかりと詠
をもとしくしくしかり

院御所

人とも見えぬ者ども花をもとめて
宮花遠懐の人をを

伏見院御所

付すきしかりの歌今は世にはつる花のもとに
暮遠二年の春花見けるとをもとを行ふ

永福門院

付しわ筋のもとの花をもとめてへる人をを

山路

白山の

雪しら山の峯の桜はなかとみて
むかしのしるしとみるかな

和泉式部

あらし吹く春の命のおしからぬ花のうせぬるものとやみる

如淨法師

風ふけば波こそたてて滝川の流れの花の白玉

源貞行

山深く春を入るかの川の花の白玉

源貞世

我花と見るかぬ枝は吹ぬるこの風の情を思へ

千觀清女

ちるまくをしみとこそ思へ春の来ぬ年にうつる花の白雪

源和義

白雪と見るかな

玉章とかしこ問ふ春の雪我名ぞ思ふ

青雨

源貞春

さ到ふ春ちと行雪とうたの我身ぞ春の雪

源高国

春雪

春しいへば花とこそ思へ百ちの中に春月

百ちの中に春月

はるかに昔の恋しきものをなげてみる春の月
　　中納言
　　左近衛中将
付わるるこゝろ神にあれとも恋しとて千春の月
　　後京極摂政太政大将
　　従二位家隆
三笠山はけしきを見るとも
　　後京隆信朝臣
かすみにけりあれはあるこゝろ春のよとのしけるあはれ
　　春宮
　　権大納言
春雨ふる
今日すぎるこけしきあれとあるあれはひとの一付の春

山階入道左大臣家ナミ言ヲ松後を
　　山中入道前太政大臣
新しきにはとはるこゝろ春の池はみなこゝろ旬後風
　　前大僧正実起
花ちるこゝ池のみなこゝろの松のこゝろを四こゝろ春の後波
　　春宮の中に　　前太政大臣女
山吹の花のこゝろみなこゝろ春の井はの玉川
　　中納言
　　中務卿親王
中はけこゝ人やこゝひの末四こゝ子はこゝ春
　　永陽門院左京大夫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みつ[illegible]くさけるみてわ[illegible]月西にうつりて[illegible]

高階重茂

かきくもりいくのにかわわまを[illegible]四のの[illegible]鳴ぬ[illegible]月雨のは

文三の[illegible]

源孔氏

今もなほ夕[illegible]すゝ[illegible]川の上のもゝ[illegible]元の一[illegible]

野夕立

惟宗之右納言

[illegible]の[illegible]ハ時ゆく[illegible]ま[illegible]わ[illegible]く[illegible]すゝ[illegible]ゆ[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]

五十[illegible]三の中ま文章

文章[illegible]ゝ[illegible]けゝ[illegible]世[illegible]ゝ[illegible]

伏見院御三

山家晩涼[illegible]

前参議雅有

面[illegible]く[illegible]面の[illegible]葉風[illegible]文[illegible]ゝ[illegible]

文三の中ま

村雨ハ時ゆく[illegible]の上の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

源貞頼

山中ま日[illegible]ゝ[illegible]わ[illegible]く[illegible]の水[illegible]文[illegible]

[illegible]

儀子内親王

更ま[illegible]ゝ[illegible]ま[illegible]ゝ[illegible]ま[illegible]月[illegible]ゝ[illegible]

遠憶百[illegible]三の中ま[illegible]

四すゑの秋まつしるの
小野はぎはなちかけるを見ける
皇太后宮大夫俊成

八月やまこすゑ心ふかうあはれを表世中
秋ぞ一しる
法三位基輔

数ちるる草の上けを見ぬ夕日すゑ
木陰ゆく光根の清水ぞ
大江貞懐

秋ぞ秀治

一しるの雲吹とをくすゑ夕さ
人あはれ空のかりをまつ
惟宗光吉朝臣

光まつる秋の夕べを更へ人をあはれ
河面をくは橋形服部合しかけるかの
なくこそ
貞文上人

うへ雁ハ野へ
七月七夕
藤原隆信朝臣

雁ハ野へ
七月七夕

掛けて

後西園寺入道前太政大臣

若衣袖のしけくを忘るゝこゝろに草ゝの露

藤原秀則

天[illegible]こゝろ無のみ[illegible]掛きて一乗[illegible]

[illegible]階師[illegible]

初雁は雨[illegible]

宮世間無限一身年[illegible]

[illegible]

[illegible]

版面を
見るにつけても禁じめくる版の村雨
郎　　平英附
主計さいかしの家のをとこと桐の条おりの屋の版
　　明通法師
をいかなる物ぞうの乳乃うとも寿は春みてうめ気をうの情
　　後京宗春
すゑの浦や波路の末い寿時くゆる物ゆ陰ゆ鳴ゆ
　　前大納言氏
松風月のあめへいをもちゆく寿のやもしの掃庵の夕

後学多地七夕七百こゑ寿は函連を
　　捨中納言氏雄
今もなほ後とあはゆる年毎の版のるを空月の函
　　同　七百こゑ寿のる湖月を
　　後三位為親
さゑ波やまくてゑる浦の版風るうゑを時を月うゑ公連
　　月乃寿の中に　　前大納言氏
初風山云ゑゑ月いうふををこゑゑ山鏡のあをを更明
　　津守國實
い初をを月を矢をを版月更くい氣のゑを風ゑ

右郷八郎入道の妻あれくるう入道の乳母なり

賀茂経久

出羽国住人

義家為吉女

義家慎通納

重忠とる武蔵国住人

和田義盛納

思ひ出る心ゆるす月の思ひ

丹波忠綱納

為のう武蔵国住人

義盛為吉女

義家慎通納

和田義盛納

丹波忠綱納

東山へ西ゆかけるの月のうしろ

なりの武蔵

左馬頭源令

建久元年八月十日法中宮参詣

東山へ西ゆかけるの月のうしろ

なりの武蔵

左馬頭源令

きくりてゆるのわたのの中ゆる月を

後堀河院民部卿典侍

左馬頭源令

左馬頭源令

護持僧

二条院讃岐

年毎日わひうまに命をくれの月

貞永元年八月十日法中宮参詣

東山へ西ゆかけるの月のうしろ

なりの武蔵

左馬頭源令

きくりてゆるのわたのの中ゆる月を

後堀河院民部卿典侍

左馬頭源令

護持僧

二条院讃岐

ものをいふ人のこゝろをしるべし

ものゝ

あはれ

あるものゝ人のこゝろをしるべし

ものゝ

思ひ入たる人のこゝろをしるべし

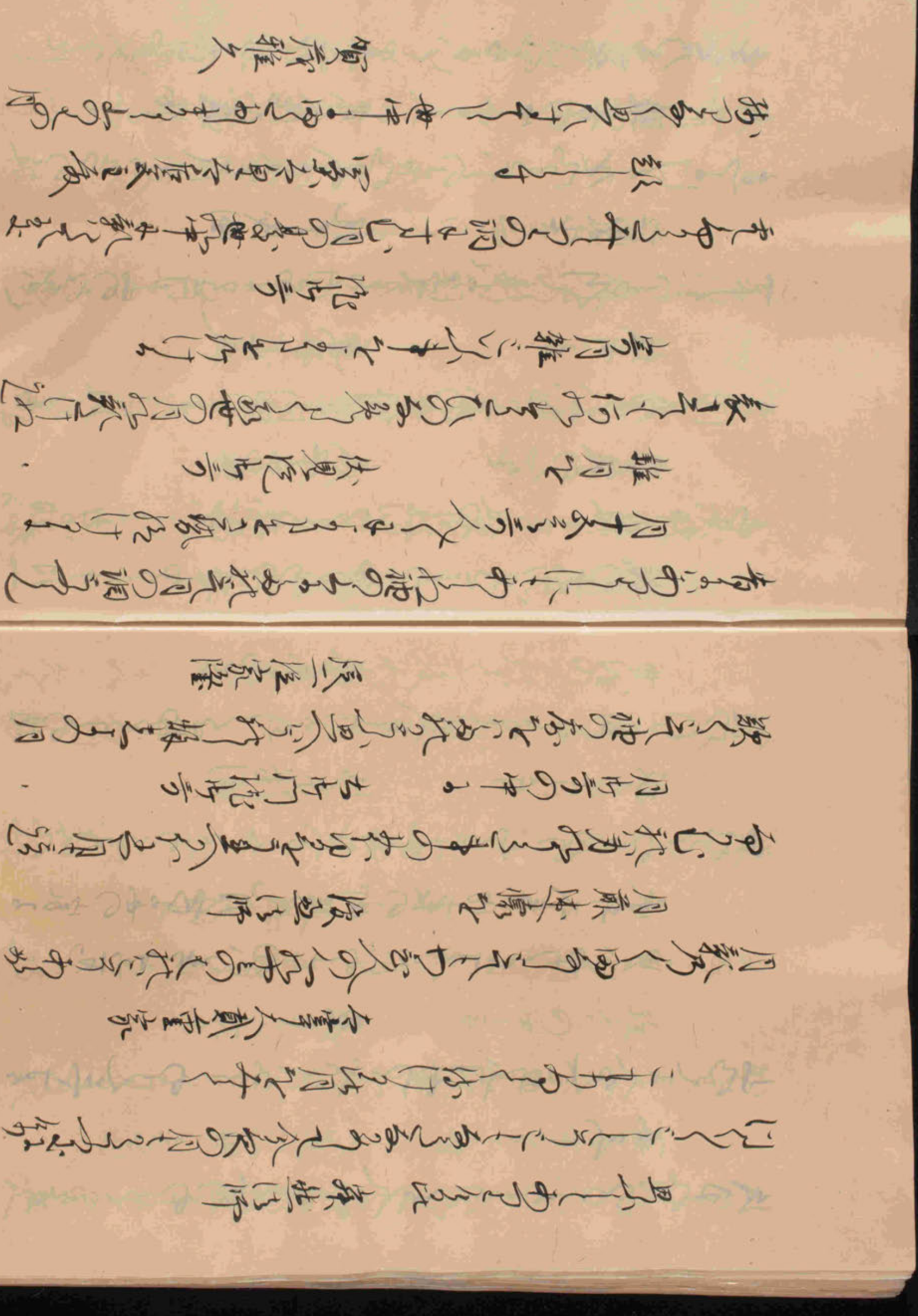
ものゝ

あはれ

ものゝ

ものゝ

ものゝ



ニテ候ハヽ

ゆくすえ

ゆくすえ

ゆくすえ

落葉する頃のあるじの
閑居をとゝ
ほう二位為忠
主刻ゆく桐の落葉風ふかん
風前落葉こゝろをとゝまるを
後伏見院御製
山風ふきつくす落葉のうゆゑ世をこそ絶
秋三月の比是屋入道前関白もしよ山中行
まつ侍りしに時雨ふりけるを後
てつかりける
宗政上人
なを見やうゆゑ雨ふる秋の夕ぐれ
守覚法親王
新古今秋歌
夕日うつる山ぶすまこゝろ落ち
藤原為兼
風ふく羅の萩の花ちる秋
百首歌
みはけるゆゑ野を
安嘉門院四条
しをる野にみなれそ草の上ぶれる
江寒草色
夫人
陵江の雨のゆゑてうれの葉ちる
秋月をとゝ
前摂政左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春雪の中を

降りつむ雪に日数枝の色もかりにけるこそ信の初

大江天皇

順徳院御歌

小島明さきの山風をさそひて千万の雪に月の出くれば

前摂政左大臣

きゆるまの入海をくだくるあるかの月をまちてあ

後宇多院七夕七百首歌浦みるを

月のへこそ沖のおつるく浦みるあるひとるこをのこそ

前中納言有忠

紀行者

沖つ波こゆるこそ見れ潮の海の友なるうしを

春京成藤

おつるくも高の社をみるを月にこそ山水のあるこそ

後京基雄

山の色の色の紅葉くの色こそ山けるこそ海の

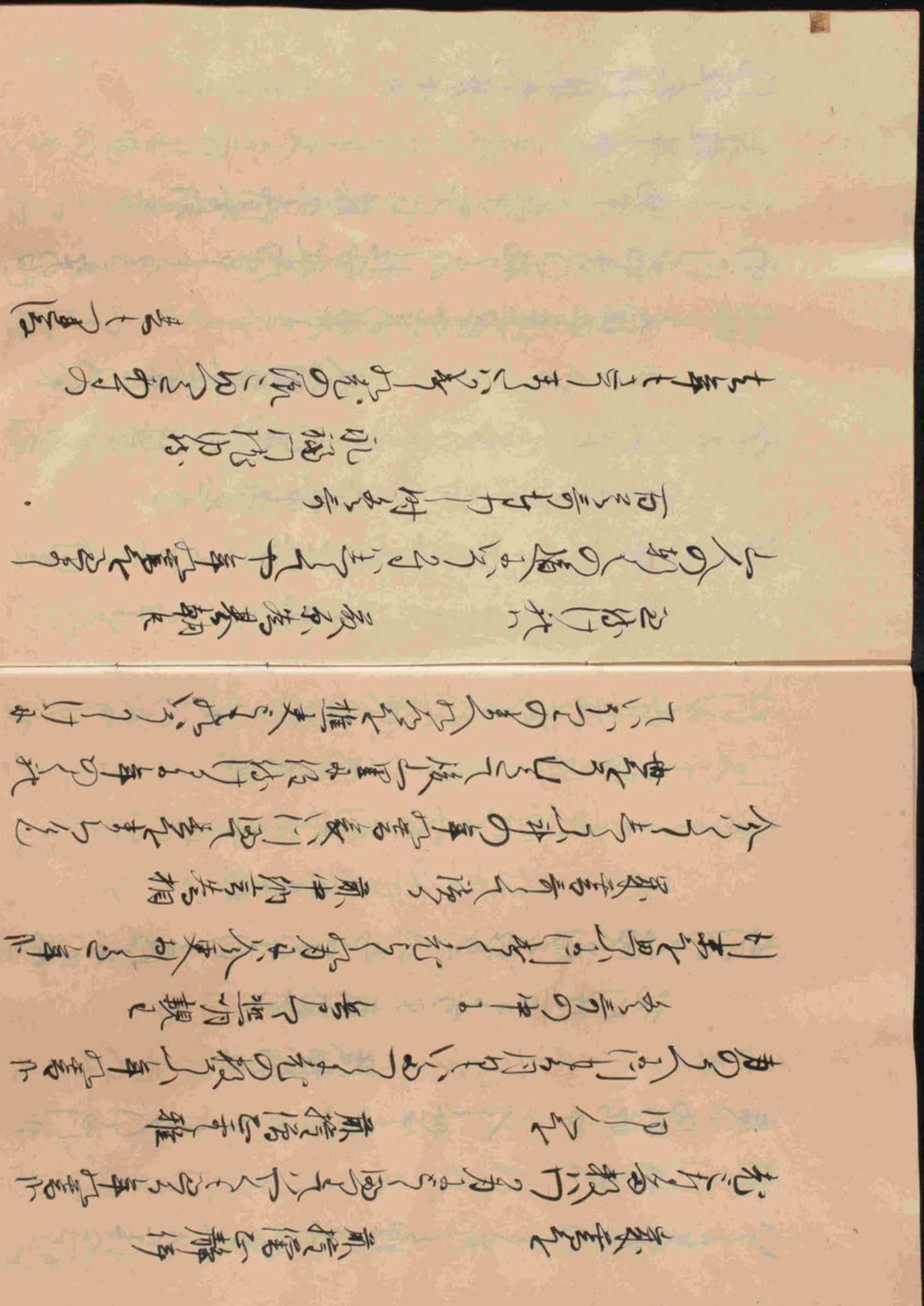
堀川院百首歌

庭の面の始めるこそ世中をこそくこそ思ひ

後鳥羽院

いつよりこそ思ひのこそ程史の程史の程史の

後頼朝臣



風雅和歌集卷第十六

雜哥中

燒野を詠ずるを　藤原為基朝臣

わかの浦まつかぜ吹てあしの葉の白露

文保三年百首歌の中に　後西園寺入道前太政大臣

みなまきにわかれきてゝ里をうつす山川に燒野の煙ちらくゝ

百首歌たてまつりし時　九條中將忠季

月かゝる燒野の煙ちらくゝ

雜御哥の中に　參上御哥

西の京にまかりて里をみてゝ月の新しきをとゝ山の辺

康永二年哥合に雜の哥を　院一条

とゝみ田うるゝのみてゝ月ぬる里の秋うきぬ

燒の人を　祝子内親王

山ねのをおとしわかるゝ消やすして藤ゝ藤

雜哥の中に　參上天皇

よろゝ山とゝまる程ゝ月ゝ山ゝ燒ゝ山

鏡山ゝ見ゝ見ゝ見ゝ見ゝ燒のこゝ　院二條親子

定ちうを新しく蒔絵に仰うめて若ちうのくろ漆ぬを
進るより仰せ
図きうを印刷ちうとみうるの内ちうの漆のる
仰わりの移さめの三れ元図みて御ちうをよりまた燈
春宮権大夫を通
百ちう片三の中る
院御所
羽ちうしてつうちうをの一を多み新しく仰せ出あをわ
徽安門院一条
きうしちう馬一を変るうを元ちうを
前大納言宗房女
納ちうを変すうを表の指を月八和ちうを有仰ちうを
訳をちうちうく人文三つうちう図りつうを図ちうを関
こいしをとうりを拾けう
伏見院御所
遍坂やの門ちうをてるく島ちうを上ちうを関の板村
百ちう片三る
院御所
ちうくの仰ちうを八ちうをものを上ちうを心上のを院定
訳しまる
後京極基綱卜
岩ちうを納日ことを北ちうを山のを仰ちうを三ちうを
朝姫を
従二位為子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夕月夜入わたる峯の雲こまなほ一本くもてる松をさしこ

百首歌の中に　順徳院御歌

夕月夜山のわたりにうかびいでて雲をぬけ出る月の影

雖言

山ぶかみ入日の影もとどまらぬ山川風の音ばかりして

藏人頭一条

西の空の夕月の影はさやかにて月よりうつる雲の色かな

源義詮朝臣

月はあれど雲ぞ晴るる夜半の秋の風ぞ吹くなる

法二位行家

人こゆる谷の岩かどの山川のたぎつ音のみ聞こえけり

前人納言民

苦山をよりあつる

山風の吹のはらはらあらしにて谷の山川まさる

百首歌の中に付　民部卿為家

こもり江の初風の松の音吹くにたえぬ入道の月

前中納言重貞

面白く桂の山川高みにて源くだる音の山

後伏見院御歌

多の山ぶかみ夕月の雲のうつりこそ入の山ぶきの

前参議為秋卿

[illegible]

夕鏡を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

灯を消けるを　後一位教良女

思ひいりて人つかはしけれども門の戸をたてゝ開の内のことも夫

寒沢百そう言の夜灯を

前大納言為家

袖ぬれて月をうしとやうらむらん夫のあはれとなれる我身

雑部

高雄の紅葉の色ま吹風も人をとはぬ宿の秋

前大納言忠雅

灯消るの宿のうたの志ひとをたゝくの志ひとを枕をたゝく

徽安門院

月を

後伏見院御歌

一すちは思ひもたえし行さこの夜世の友月はあはれ

世中は山のかなたもあはれとはみ人しらす

月はあはれをみくよ

大僧正行尊

あはれ世にあくはあはれ思ひ月昔のひかりはなれ

義人おつらくは後月をみくよ

前京敦師朝臣

ひとのこゝろ山の岡の高さ高きの月をみて

かしこ義人て後月をみく

前参議宗親

今日我が門に表きてく雲間のへ〜をわたる月の
雖言の中より　如形法師

袖ひちへまよろこわ月のかたちにかすみ
いこまの峯にたちそ我袖のあまりうへやう月氣
法二位為子

月おもて花と紅葉と一さかりとあて我月のいつれとわ
大蔵卿の尉よりみはける　二位法祝と兄助

うちそこ川に秋ふかしとは
永福門院

山おろしの吹にたちかへる秋の法師
前右兵衛督基氏

うちそこ山のそこ
雖言の中より　前大納言為兼

大空よりあれ行くあれ雲の風ちうの月
法二位為子

おもてに面のをやの風ちうの月と
百首言の中より　付雖言

おなしこと月のをしてもしらしらと
入道二品親王法守

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首歌中に

拾入納言為藤

年ゆくと枝の梅も春さきぬくとくとくと梅に告るかな

法眼静円

難題の中に

菩提寺の蘭の行のしるすめ孫々あつまるかな

康永二年三月会題難題

徽安門院

みしつとくとくと氣の山ぶくとくとの里四方の海に白雪

伏見院御歌

雪を

山中の四面ともに同日雪の降るを見れば東乃一也

難題

前中納言為相

谷陰や水流るとはかくとくとくとくと山鳥の

三位隆蔭

鐘のをし鳥ふかきの奥山の嶺とつ鳥の鳴かぬ

山家をしらしを

三位隆教

吹ぬきの彩しの山松風の絶ぬ音の遠鳥

三十首の中に山家松

前中納言宗家

思ひ出しもすまぬ小倉山彩しの松ぬ音ぬ久しき

山家の人を

因之院入道前関白家人

松の風ふきひの水は冬のくれ秋の人のをとしれぬる
山を　　指律師慶運

夢の内うつるこゝろの白雲の消ぬれば山の奥の秋迄
　　藤原基任

山深くすむ身は外ひとりのみくうくせをのれ
　　指律師慈成

山ゆくゝ者は人の高くなれ高き河の内なる島のつゝ未
　　寛治百首　前大納言為氏

山もしの松のこゝろの月迄冬の風ふくゝ山を

難波の中は　　指中納言俊實

うゝ引しへわるゝまかこつゝ堅の垣しゝ命ゝ世成ゝつゝて
　　式部卿親王

つゝ者ゝ妻ゝ山ゝ月ゝ山賤の上ゝくゝゝ江ゝ月ゝて
　　西園寺前内大臣女

山家ゝを
　　西園寺前内大臣女

ちゝゝゝ人ゝ内ゝを思ゝ月ゝ方ゝ秋ゝ月ゝ秋ゝ山ゝ松

百首ゝ月ゝ付　　入道三位親王法名

山ゝ奥ゝ河ゝ人ゝ月ゝ内ゝ月ゝ人ゝ松ゝ秋ゝ

世成ゝ月ゝ山ゝ原ゝ秋ゝ月ゝ人ゝ

山ゝ中ゝ道　　前大納言為氏

きと人のいかりをうけ信濃の国をはらいきてい
行を　前権僧正良海
一年ゝ思ひくらしてゝ行の座をつゝれまて上けるなり
六帖題よりくゝ日言ふ事をとゝ分れけれ
ひかくまて山里　伏見院御言
ひくらしはゝ来を座の分にくゝ者ゝつゝむ山の奥ゝる
題しゝす　佛国禅師
物ゝすゝせりゝ思ふ草の座ゝるゝゝ入者の白毛
山家夕ゝ云ゝを　伏見院御言
山陰や座ゝ入れはゝ多ゝ面の者ゝ上ゝ白毛

百首御言に　院御言
江路くゝひくゝ山の毛白しゝゝ都ゝ秋
云動ゝに題山ゝて秋けゝ村源兼氏納ト
ゝゝ半遥ゝ秋けゝ
山里を秋すみゝしゝひくゝ人ゝとゝ山ゝ　前大僧正道玄
題しゝす　藤原宗秀
同人ゝ思ゝ秋ゝ物ゝすみ者ゝ秋ゝ山ゝ奥ゝ　前大納言家雅
おくゝ山の毛ゝ秋者山ゝ

寛治百そう三の年山家水を
　　安房門院へ奏し
人めこうの社のいの道めの山里の水の流れ絶えて
　　歌しらず
こりる中こまる所いとうとましく人めをしの奥山の庵
　　二月はの祝に影完
ひかりの刺の光しのけしたしの光庭のしたしたる若木の
　　山家百そう三の中に
　　伏見院御宇
幸の山ゆりの歌と社の宮井さかりの
　　進子内侍に
　　百そう

平忠盛の名の刺しの面の社島のあとしたしき
　　雖百そう三の
　　順徳院御宇
四すしおの山の問ふてすむ庵の面の板のまの橋
　　前大納言忠良
山深き草の庵の面の面の板のまの橋
　　百そう三の中に付
　　前大納言実明女
山里いとうとましきこの世の捨て人の山ゆ
　　四宗面成の光
　　前大納言三氏
山中ゆ人の刺しの平おの平の四面さ刺しの面の人の社
　　寛治二年百そう三の人々まの社けるしのの

里行を　後嵯峨院御所

思ひ入る山の里の夕ぐれ世つぐ門々鐘の音

西山の善峯寺まゐりけるに

二条親忠道

山里は水面の木葉こそ秋の水にうれしきなり

法とかの賤の家ぬし行の垣大のあるのこおくかくれ

藤原為家朝臣

寂法百首の内山家水を

山陰入道前左大臣

為ぐくす涼山のおくゆかしきをあつとこる苔の下水

文保二年後宮百首歌の中に　後花山院前内大臣

唐崎はまつ山下水のすゑくれなゐ色にあらはれぬ

みそぎ川夜はの月の影ぬ

前大納言為家

雨の柳の花の枯葉とうち上ぬ朝霧かゝる峯の山

山里ゆく所へ雨のつとけり道まくらとみ侍

けり

藤原為秀朝臣

月はまつ家ちくやの山陰ゆ門くみゆる松の下道

百首の内夜侍ん

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人よく国守をゆるすまちよりたびし玉川の井水
高野の奥院へ西いりする道より玉川といふ河の水
ちゝ毒虫の井ちゝ[illegible]流をのむ
こゝろをとめてをもくたゝしみ給ける

弘法大師

[illegible]ゝくゝみやこ河とゝ[illegible]
井手山よりのぼりつゝ三鈷の松をみく

阿一上人

こゝにやまとこゝ毒のつよををもてたゝるを[illegible]松の一本
白川ちかけゝ家[illegible]年つゝ後国ち

[illegible]

[illegible]

てよみ給ける

原左兵衛督惟方

[illegible]ちつゝ[illegible]
大[illegible]給ける[illegible]

二条院親王寛元

年をへく[illegible]
難[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首の歌の中に　前中納言定家

[illegible]乃沢に松を植て都の秋の人こうを慕ふ

[illegible]和五年四月百首の内に[illegible]に入て

[illegible]　撰中納言定[illegible]

八重葎しげれる宿の[illegible]しけれ[illegible]

同人[illegible]

同雅和歌集巻之第十七

雜部下

歌[illegible]　伏見院御歌

天津空[illegible]の上[illegible]

雜部の中に

[illegible]天皇

[illegible]

百首の歌の内に　撰人納言資明

[illegible]

述懷の歌の中に　左兵衛督直義

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みなのすみうとう者の水の末にうらをいたすと

百こう言の事 付

九条兼実直義

ものこと山ほうこうしたる国うらしし我身ようくうたうあくこ八

中納言よ侯位の付よみかけう

前中納言為相

のりの風のあつけあとりの人のうつくしきよりわ侯行母

文保百こう言の

谷陰利光侯前関白内大臣

行心月こう歌よけしさ京川のうつくしきうくこうたうあくこ世よ

世代のうれくおもちうかけうう建武の比大

世う国ゆうへ付てうたう

藤原時茂

詠ーーー

源致雄

命をいうつうよりて武士の道うをうたうあうこ点

百こう言の事 付

入道二品祝ようこう

百義やみううの行幸て男山れ光ようれうの

難言よ

すみ風う我こう常にいうう代月行四へうしうし

西園寺前内大臣女

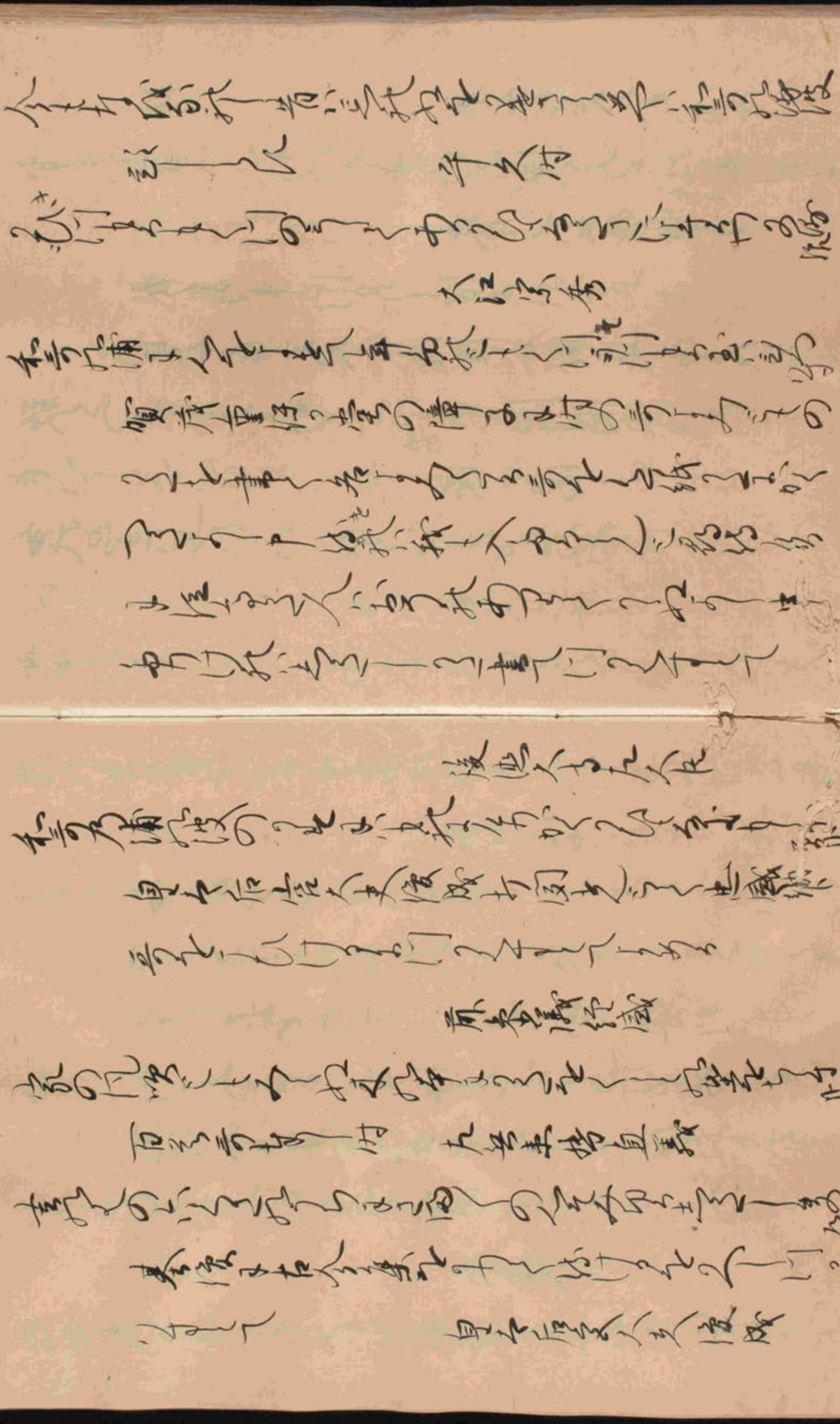
ゆうむまかけうう氏面のつけうう衣笠前

内大臣こひてかんうれいうみくつのりけう

[illegible]

[illegible]

[illegible]



[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぬ

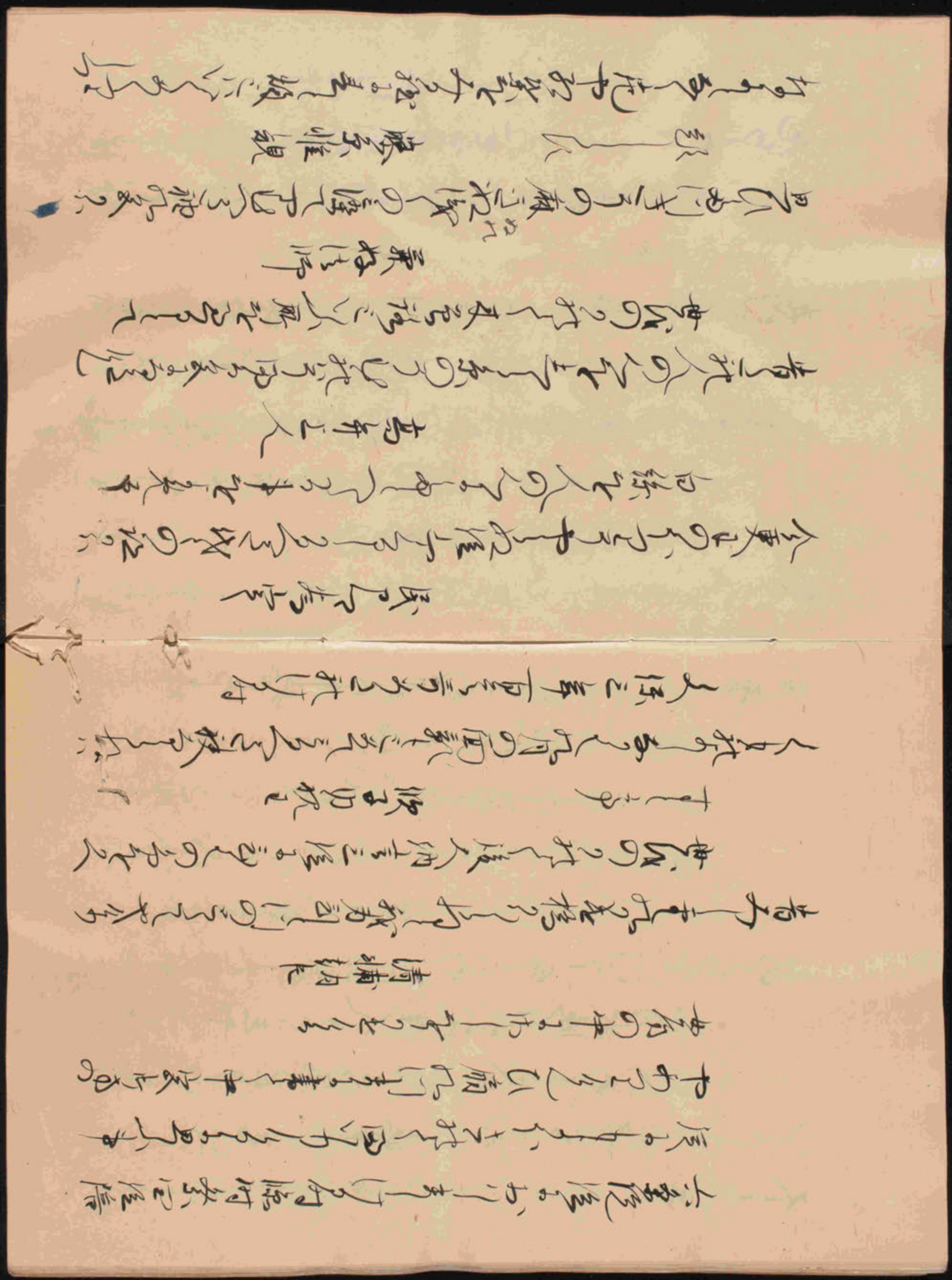
いりまく之のりとし之四つ之とをひとつ之わかの海風
井ゆ人高倉院の殿上の還昇をゆるされて
はけるゝ中つゝりける

清浦納長

之ゆるすもあのゆかしよしにしたゝ引てとさいへる高しつ能を
橋為仲納言の人おつゝくゝ又の日澤ゆるおを
ゆるす之ゝ引い上手ゆゝ能ゝ為ゝ
ゝつゝこゝ中はけるゝ

大貳三位

告命ゝ之ゝ中ゝ之ゝ中ゝ之ゝ中



為ちて月ごとに世界を思ひ我身をも
捨ず信都之定義請のうみ
九門の澤に鳴わたる
はせ
高砂
ちとせをこそ思へ
わたつみの
はけれい
高砂と人
ゆくへくしらぬ
あり法師

難言に
うしとてい
百そ言ちり
男山
七十ちとせ
納の人
祝ひ祝
前中納言為相
前大納言實教
はや定今
前中納言為相

百首の内

徽安門院小宰相

見わたせば山もとかすみ水無月の
なごしの祓ぞ夏のしるしなる

前大僧正道玄

今こそはしるしの杉の夏ごもり
梢のあらし秋ぞ吹くなる

宣光門院新右兵衛督

見わたせば花も紅葉もなかりけり
浦の苫屋の秋の夕暮

百首の内

前中納言雅孝

しるべせよ跡たれそめし昔より
幾世経ぬらん三輪の山もと

世中さわりかりけるに東坂本にまかり侍
りける孫の内侍のもとをたびたびつかはし
侍りけるに

按大納言局

きこえつるはるかに見やる雲のおもの
袖の露をなにとなるらん

院御方

言の葉をなげかぬ人の見ぬやうに
文使のかへりさしけるに

山里にて

前兵部卿納言

つれづれのなぐさめにとて袖の露
述懐の中に

新宰相

[illegible]

[illegible]

[illegible]

洞のみち[illegible]の板[illegible]月[illegible]

[illegible]

後京宗秀

山[illegible]世中をの[illegible]

山田法師

かく[illegible]

[illegible]

[illegible]

拾遺[illegible]

前大僧正[illegible]

世[illegible]みの洞のうを縄一すじ[illegible]

雜[illegible]の中より

宗徳法[illegible]

我人[illegible]

前大僧正道意

いた[illegible]

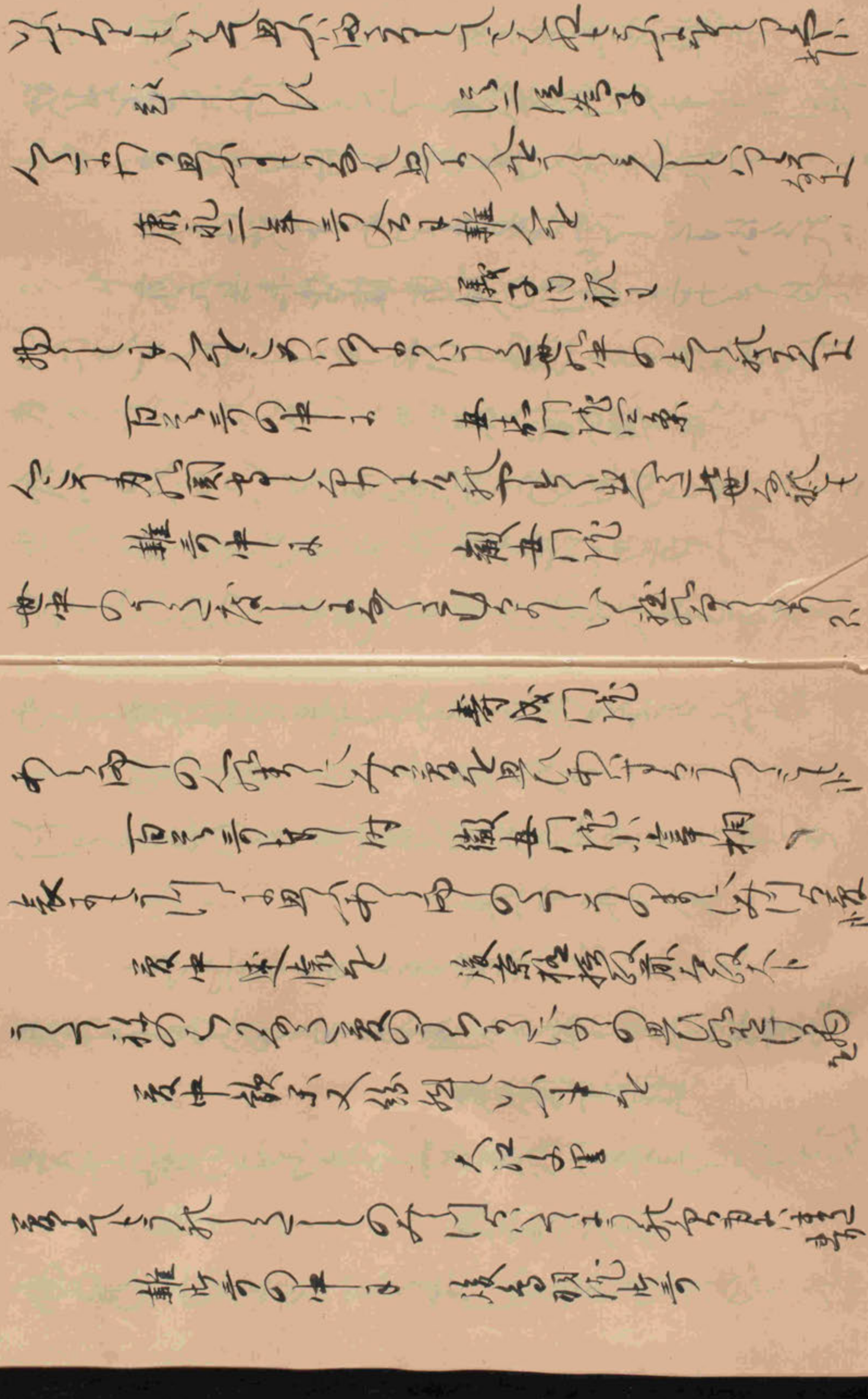
前[illegible]惟方使の別[illegible]

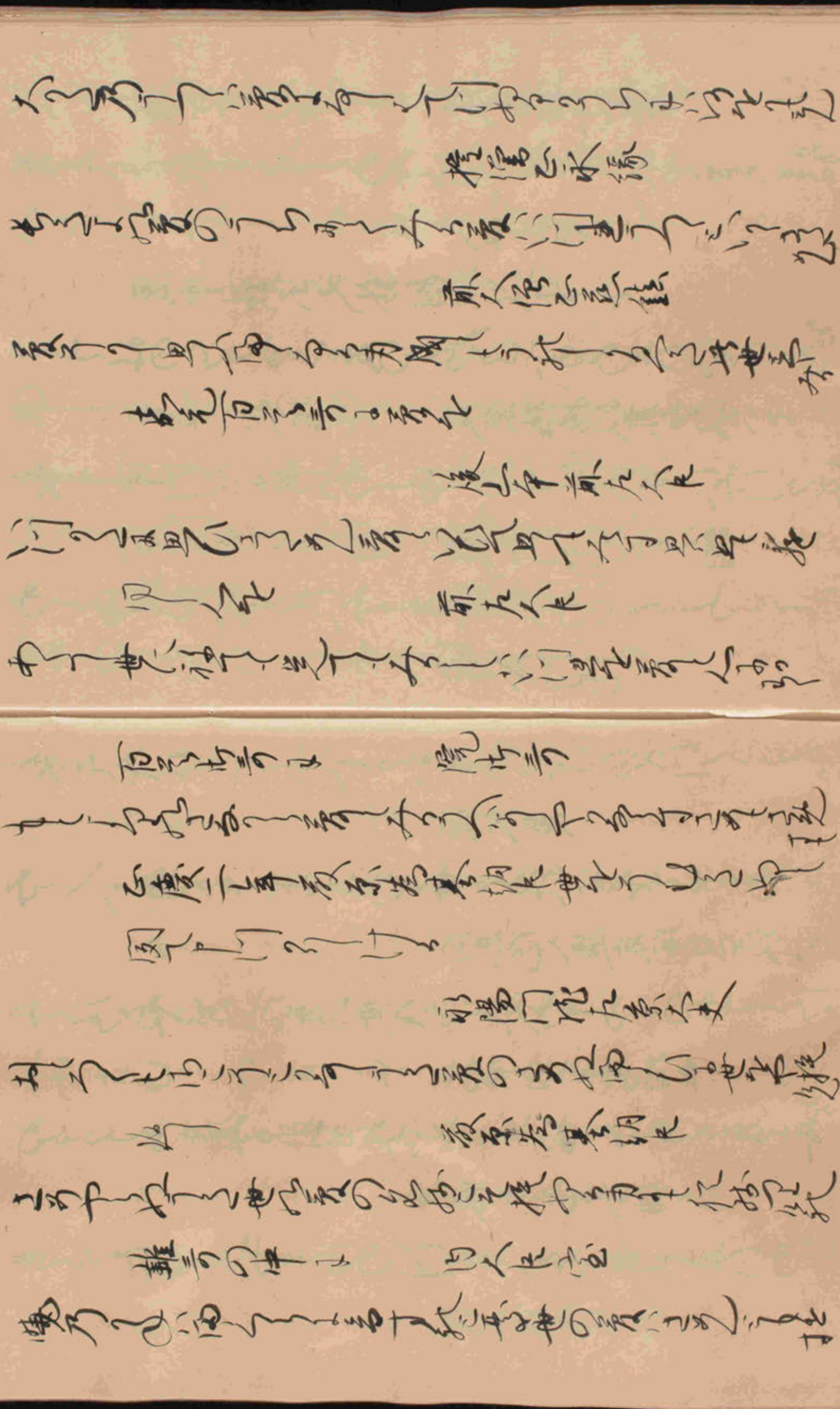
[illegible]

[illegible]

[illegible]

前[illegible]惟方





ほとゝぎす聞かんとて人々あつまりけるに

ほとゝぎすいまだなかぬうちにあけぬるこゑを聞て

藤原為基朝臣

ほとゝぎすなくこゑをまちつるあけぬるこゑ

はなかりけり

藤原為相

ほとゝぎすなくこゑをまつ夜ふかくあけぬるこゑ

はなかりけり

同定信入道前関白太政大臣

ほとゝぎすなくこゑをまつ夜ふかくあけぬるこゑ

はなかりけり

源頼貞

ほとゝぎすなくこゑをまつ夜ふかくあけぬるこゑ

はなかりけり

永福門院内侍

ほとゝぎすなくこゑをまつ夜ふかくあけぬるこゑ

はなかりけり

右京大夫

ほとゝぎすなくこゑをまつ夜ふかくあけぬるこゑ

はなかりけり

前参議信成

[illegible]

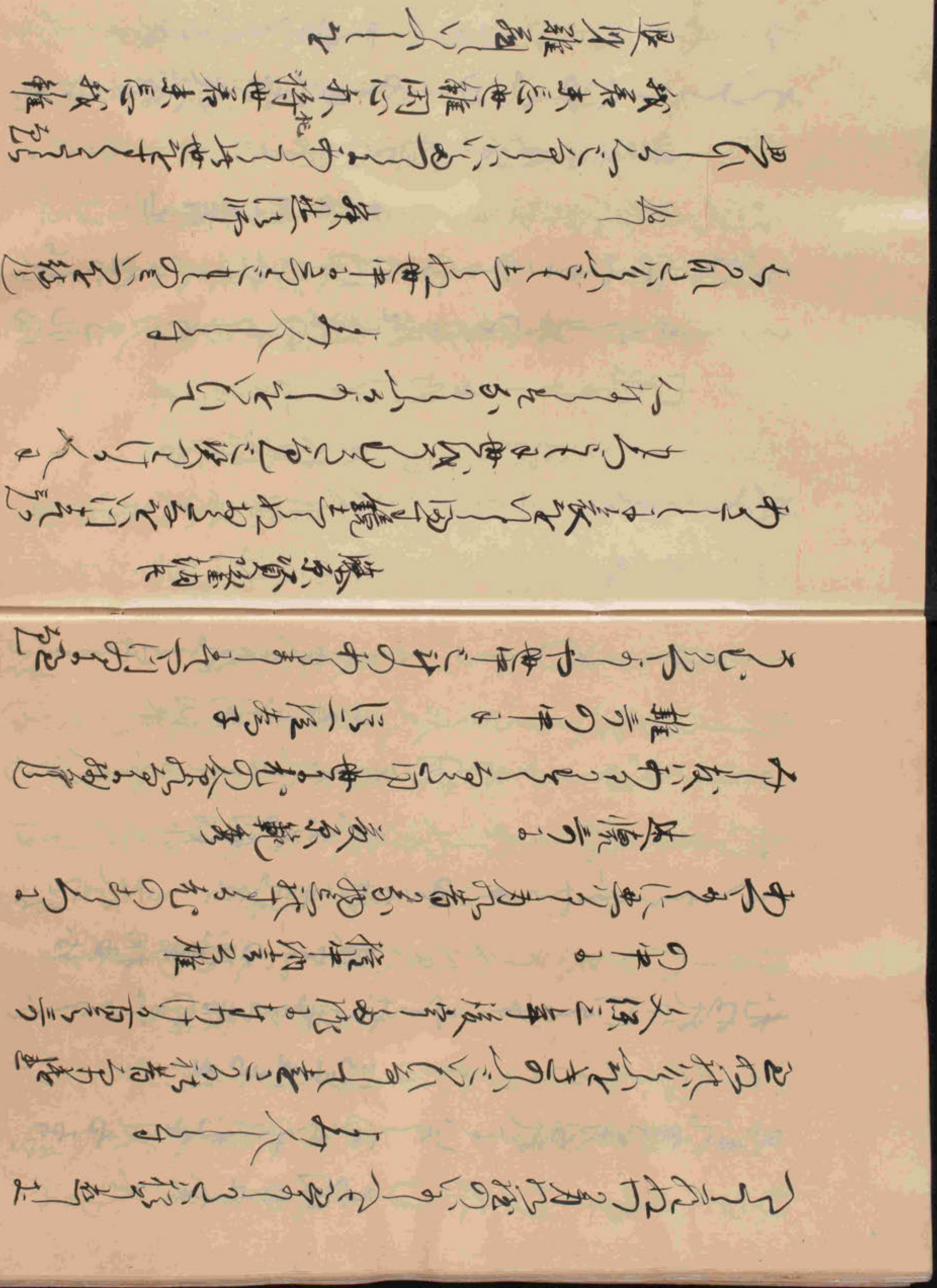
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



中務丞宗長

出家の後述懷三首の中に

前中納言有忠

ふるさと行やとの梅ゝ世に立て我身の春をしる

ふるさとやみなそこ迄すみ染の門うつる世まつらたいとなれて

ゆくすゑまつさとなれて煙のくゝりつる庵

門流るゝを折けり

後伏見院御製

煙をまつ立て思ひ立みゝけ数々つゝ春をいそかさほ

永福門院

思ひやる苔の衣の春の夢のうつゝの調ぶ神つくらむ

建武元年八月祈林院前大臣のうつゝ

しらぬけつを問て中つゝりける

前大納言為兼

うつゝよりしつる世を思ひ捨て四しの名を入そうつゝ迄

祈林院入道前大臣

法わつる春の命をおもひ心に捨ること世に久しかりける

年ゆかりけるとの出家し給ふ

民部卿成範

みつゝ我と住つる宿のゝ人をいと四しみを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前大僧正慈鎮

八月十五日為通親卿方四十首後うしとあく
安わう門院の歌とて前大納言為世
つゆ
後二条院御製

ふるとしの別れ人の名おしむとてつゆ
片岡

前大納言為世

今日はなほわやうの草のうつろひいく三年山家のあ
雖言の中に　三条入道前々関白
わかれ門うつれば昔よりあるよねるの人は
老

くるるまの三国けうはしのあらし
俊玲乗

いとゝ月はあやめ池門前なるてらの長をきつはら
くらはいるまうとはけうはしみかけ
郁芳門院宣旨

春の月の清てやうとて言ふくまの長い二上
昔は人主劉院の梅をあくけう人の幸つく
後いうあるわうとこいとあれくつくす
てらの
上西門院兵衛

何事と昔うつたる世ものとみ世ものやうの花

二条殿御所官堀川

後涼華院御所

梅花を折りて

遊義門院

古の乃新しき白梅を

伏見院御所

花ぞ咲きとゝろく中納言

文永九年二月十七日後嵯峨院御所

内裏にうゑられし梅を

中務卿宮の歌

中院前参議

中務卿宮

前大僧正行尊

前大僧正

前大僧正

[illegible]

後深草院[illegible]

西園寺[illegible]

伏見院御[illegible]

[illegible]

二条殿[illegible]

[illegible]

西園寺前内大臣女

[illegible]

後一条入道関白殿[illegible]

[illegible]

[illegible]

常盤のうつる世ぞとは春を忘れて
二条院の御時文の年の書南殿の花を
ながめ人の
前大納言實國

九重にみし世の春の思ひいでやうつろふ花の色にそへて
又なくちりぬる後ぞうらめしき山里にかけこもる
三月ばかりの頃源仲正のもとにつかはしける
寂念法師

散きてもこの花さかばけふ山里を花さかりにぞ思ひ
源仲正

ちるこそたのみなれ人とはうらやましかれ山里の花
所親門院御いみのはてにけり
藤原内府

今年しも春のうつろふ花ゆゑにかぎりなるかの
はかなさ
俊成三

むかしの春ぞうつりぬる別れ路の
後京極摂政前太政大臣

二位家隆卿
ふる里の花はいかにのこすらん
前中納言定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月僧正常こいのまを

乙三位重孝

[illegible]

平貞時朝臣月例十九首百首

[illegible]

前中納言為相

[illegible]

後京極氏

[illegible]

乙和又年九月佛國禪師鎌倉下野

那須にくこつ[illegible]

[illegible]

けつ[illegible]の年[illegible]月[illegible]入滅[illegible]

仏慈禪師[illegible]

前中納言為相

咲花の春成[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

相模法師方へ申つかはしける

こゝすはけれハあるこゝろみくつのうりけるこの

の中に

宗性法師

いつくにか思のあくれハこゝすもとかれぬ人の心にあらし

西行法師

あるこゝろ思いのあくさ海ハ法をもとめ後こひ行ハ竟

うるくるあるくの法ハ波よりあるくあるこゝ

之れハこゝすはける

祝戸成仲

波風雪こゝ心ハ中うるこゝハ妻ゐるこゝ成ハ法之やうう

後伏見院くれ行く後仏貴を後三位守る

墓所よりあるくあるこゝより片遠誠

に四ゐるくおこゝ見ゐるして

清定上人

動者と到こゝ川蓮よりハ中人三位ゐ四のへよき四之

左之中将維盛絵野四ゐくあるけるこゝ

四くこゝハくゐ　建礼門院右京大夫

こゝしてこゝうこゝあるこゝ海の海こゝ流ゐ月波ハ

四ハ右之中将資盛西國よりはけるこゝ

月川ゐくゐ中つ[illegible]けるこゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書ものを所をさしけるあるとき
ひとくつのうしけける

法中隆寛

これやさいつるひ神のうしつとくゆる思ひ給へし
前九人民母の十三年のはるまでにはけるる
はるかなるうしろ寿量品をうをとなてつみ
紙に書付さとをはけける

後宇多院御歌

ちつるてはかの海の波の泡をも引とうみとうとうなる
前九大民

みつるとけるとうとう紙に蓮華ものとたまわ家の白玉
前大納言為家卿

はけるる

安嘉門院家

ちたとうとうとうる紙すとうとうはるとうとうとうとう面氣
くやしくうとうわかるとうとうとうとうとうとうとうとうとう
歌しるす

よみ人しらず

四すうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう
ひとうのるとうとうとうとうとうとうとうとうとう服をきるして
とうとう

赤染衛門

ものとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう

前半は何とぞ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紅葉を折らしくしてとをれける

ふる雪にうもれぬるかとも長月の宿の紅葉

後京極摂政かくれぬるとしの秋三月のくれ

ぬるに同之院入道前関白もしきりと文をかき

うくもてなすに成わるしとも思ひこそ

哀のかけるかはりのしるべ

思へとも家の版にかきて付るはうの袖の涙を

はらはん

思ひやる心の涙はらひて家とは付るとはすれ

ばうの家の年又暮ぬ

為兼二こをの版に哀の歌の草庵の野の家

と又詠ぬるかとも半はけるに

二位為家

和の草庵はかうのてしく秋の世さの版を起上

はるはしらとをれける

伏見院御歌

ゆくすゑ多くふる雪に同日あひにる紅葉の袖とる世は

後醍醐院くれぬる十月は女御宮の

入給ける戒師はくらの長命寺にて

給ける

二位法親王道道

風雅和歌集巻第十八

釋教哥

法の師を尋ねて入唐せし時

いにしへ人みなこの山を尋ねてふ世にのつとをくれぬ山の風

かの山にうつりて程久しかりしの後法師

補陀落の海をもとめ来れりみるめ更に情なし

元亨元年の比ある人夢に見るやうあり

して彼山にもとめ侍りて枝をもとめ

て帰りて彼山と申して補陀落の海なり

なりとあれいなるのみるめをいかにせんとて思ひ

思ひ尋ねまし侍りつとけるを夢の記

の志めしにけるとなん

法花経序品の心を

ちりぬるを花のうちをふくかぜをこの山ふかく

方便品

妙法のうゝ引しにのこれるかぜ

聞言喩品の心を

前指南僧都源信

指僧正明縁

女樂行ハ若入地獄不與小女處女寡女等
共語こいふくの人をとゝ先ら
藤原為明朝臣
名よりて四ちひとをすゝる女郎むまれ給をいまゝ
寿量品の人を　　参議輔親
世世ゝ入ゝ入ゝ月ゝ日ゝ秋ゝ幾ゝの人ゝ
分別功德品を　　三位隆教
みる人をとゝ之ゝ思ふ
薬王品是真精進是名法供養如来
いつゝをとゝゝとゝ
法華三昔
法華三昔
妙音品
赤染衛門
ちゝゝのをゝゝ
普門品即得成慶の人を
千載納
陀羅尼品
赤染衛門
法華ちゝひとゝゝ
我為経常唱菩薩を

法のことわりを聞いふ事をえて世をめぐらす所

因是經生死涅槃猶如水炎の人を

法性寺

法をみるあらゆる文字をみるしきの人間むるあり

居一切付不起妄念

乃至ふたたび一切の手印一切の真言の相

拳足下足皆色道場の人を

夢窓國師

あらゆるこころひらくあらゆる所にいくあり方寸

今是法性の人を

法性寺實澄

仮名乱者と花月のあらゆる乱者と

隨順後所居住の倶縛婆羅門を演法

前大納言忠良

相応法のしるしあり市川の市の

但指吾明即是法性ごいふしを

すべてしるしの相の差の差の差の

前大僧正

三諦一諦心三非一の人を

定の夜に入て[illegible]を図るへかりしけるよりの灯
未得真実恒處夢中[illegible]を後ら
寛嵐法親王
[illegible]の[illegible]を[illegible]
法華三昧
[illegible]
[illegible]
[illegible]

藤原為基朝臣

[illegible]

仏慈禪師

[illegible]

[illegible]

貴宣國師

出[illegible]入[illegible]七月七日の[illegible]

眉間寶[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一花開天葉結菓自然成の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みなの人のたちはつのとしあるなの月のはをみつる所の
百そ所三の中に　院出三
世はてゝ後之をといそかせをかけまゐらせ給
如何不求道安可須彼之人を
いかゝ成わつらはしきことも又書て
難三の中に　前大僧正慈鎮
さつとゝもゝ之のこゝろ世をすてゝ出家
前大僧正良忠撰門徒書けるを

天台のこゝろ
て、　前大納言為家
いかゝ成なるこの世をうつしてや横川の秋の月をも
ながめん
　前大僧正良忠
ちきりあるなかの流をたゝしてもゆくへの定なき
之憂世の後はかけて二月十又日上人入道
前右大臣殿のうち様に給を
ゆゝしくあつるゝきゝわたる事佛法を
雪にとゝ向よりて中に掛ける
まゝ　上人入道前右大臣女

わつとるうちきてゆしみて起てさいくふの白雪
物表雲の中より　示證上人
上門こちら長の方へ門のうつくちちいの無法あれ
観勝寺くく理越三昧をこちひくる道
切る花瀧より紅葉の森こうとれいよみ侍
ける　後二位為子
法の座をよちて多紅葉山姫のうしかもうえこの
武乾門院十三年の法事の法華山寺にて
左中の一切経供養ちとれけ所えの音楽
のきこえ侍ける　みける

法の座をよ楽こうきこの為れ為ちる花の色
松宝六付讃を言ちるとみけるの晨朝を
初まるこ房けるこ花を折折ちく座ちるを
女人往生願　皇太后宮大夫俊成
しし浦まるちて折こちるあを無明ちみを
不浄観のこをとえる　後光明照院前関白太政
和田は海をみるこちを　前参議教長
あけてあれと我身ちをいこ元徳

雪山成道のこころをよみて　前大納言為兼卿

ふりつもりけり

年をへぬ雪の原山いかにして花のみ見えしあとを尋ぬ

法眼禅師

ふりすさぶ雪の原山のふるさとの衰ぬるかぎりなりけり

前大納言為兼

物数寄の中に　如意上人

西を思ふ人も同じ雲なれど雲ぬしなきは誰ぞ

法之住親王

人をかなしみて西をこそ思ふ秋月は

絶を引きて洞をのこひけるかな

[illegible]

百万片の中に　伏見院御製

年ふるに人の心もかはりぬれ花のまがきの春の夢

法眼[illegible]

かくもがな

釋教の中に　前大僧正慈鎮

散ぬ春をおしみをきてはなの花

ゆめのうちにそうつつ[illegible]

神祇哥

世中に思ふ人のわびしきは我も我思ふ人ぞ有ける

長月鴨御祖社の社の法ぎ

三笠山すめるかぎりは真如の月なぐさむしかは

世中に人のわびしきをいかにせんとてかくまで

はかなき事は唐土三年六月の法者りの秋

水やうの人堂宮ゐ法ぎをおこなひ

付けをこなはれけるとき

我くて三笠山をうつれるは和光の垂迹なれば

これは春日の社さの法ぎ都まおりゆけ

者の法わうの人ぞ法ぎ人明神の法ぎ

みけるとき

波母山中小河の板の三ゆ井戸流れ同人法

毛は日吉地を捨現の法ぎ

有漏なりし三漏の入わるるを我こそ仏のみちなれ

はるの八幡日門院無野の法幸三年三度

成けるみ中いの所まくに中さと

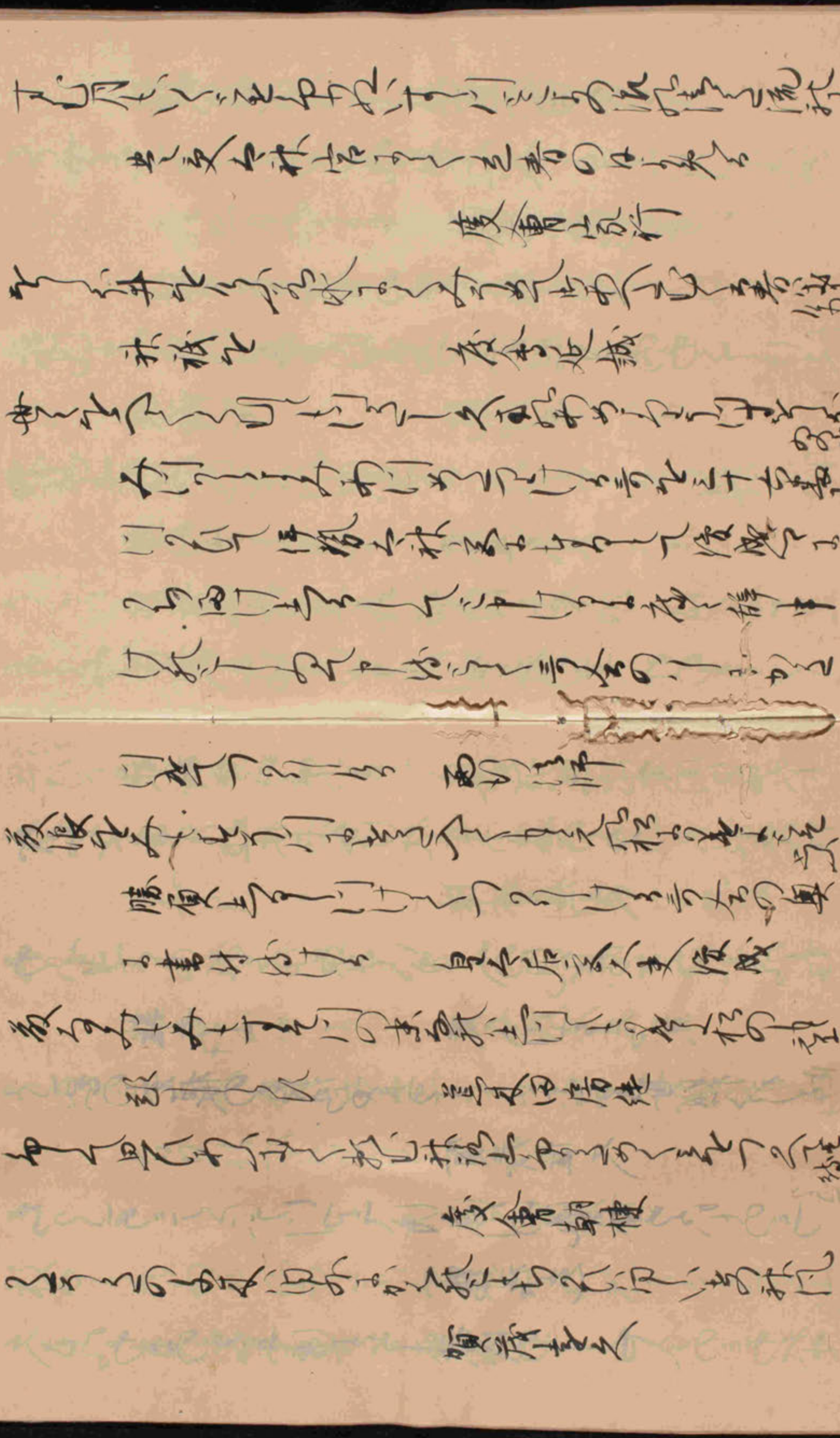
はけるとき

ちとせ経る神の社の秋月のさやかなるかな

[illegible]

[illegible]

[illegible]



久方のあまの光長閑なる秋代のうゝ人のこゝろ

鴨社之

春ゝ毎にこゝろにうつして清き川の流はすめるかゝのこゝろ

賀茂惟久

ゝ是の光根の若葉のこゝろもとうこゝろ世代行末

前大納言為兼

雜部

わかゝくゝ松のうゝいかゝ一の風をおもふ後世の松

清宗国文

我光をもてゝ秋しるけれ世のゝ人ゝ後世の松

後之明恵上人

秋祝部の中

前周日元大

思ひ出ゝ一夜の松のゝ人ゝ秋の光のゝ世ゝ後

春日社ゝ奉ゝ月ゝ力の松のゝ人ゝまを立て

よゝ松けゝ

京極前周日家記後

みゝ山のゝ人ゝの松ゝ秋ゝ人ゝ秋ゝ人ゝ

雜部の中

前大納言

うゝのゝこゝを思ゝ秋ゝ三笠山ゝ人ゝ秋ゝ人ゝ

春日社ゝ月ゝ人ゝ

刑部卿頼輔

松ゝ秋ゝ人ゝ光ゝ生ゝ人ゝ秋ゝ人ゝ三笠山

寛治百首ゝ部の歌松を

前人の詩を考ふ

建武の比離の比詩の中に　後伏見院御詩

山川とわかぬ方なく秋の色清水流るる秋の世のうち　花園天皇

秋風を

秋風吹こゆるけ秋いとゝあはれ一なる秋よりしるしるべ

百首詩

ながめつゝそこはかとなく清水流るる世をすゝとそ思

祐久月を　前九大臣

今宵くまなきを月をみるとしあれば人の老よ来ぬ人ぞ

春日祐すゝく月をみく　中院祐春

秋くれぬとうつる三笠山月いみるとあ

祖父祐成自筆の祝申をみくしけり

かしてしるし給ひ給ひ神の代ゆゑのく　中院祐植

文治六年女御入内の屏風の詩春日参の社

臣　臣

春の日と光とともに巡りきて玉ちるの星にうつる土の御

秋祇を　　紀友文朝臣

名車山うつろひやすの秋のはつ　寺秋はつる山けさ見ぬ人の

日中紀を　みくしよ見る

前大僧正慈勝

わすれけるこゝろの色の白ぬはつる山秋風ふきて紅

葉　柏之唐

うつろひやすきこゝろに秋をとうめつる秋風ふきて柏葉

春日なる秋をよりてよ見る

中臣祐臣

春日山同じ秋をとうめつる秋風ふきて紅

難題

賀茂教久

世をわたる人を秋やうをわすれ秋をうつる

天台座主　ほけの月日をの日秋宜

迎ちのもとにかさのつゆを迎つゝ

ほけ秋い　入道二品親王家

久しきこの天は日をの秋風にうつる月のつゆとこゝろへ

秋祇を　　院部成国

山里秋きてにつゝしとも秋植よ秋つゝ為ゝ秋植

前中納言為相

代をへてくあくの日をの秋植よ人のわすれを為ゝ

寄鏡秋紙といふことを

前大納言

九重に月てる秋のをうけてうけす焼今もくもれ

権大納言公雅

月てる雲みのをうけす焼けるかたぬ秋のくもりあるや

無野に雨ふる三のしの中にあるとて

源有雅卿

ふるくに雨ふる秋に遇てみるく焼ようけす今を

屏風元年は国のうてのはるまつる春

ゆけける後伯者社ふる雨ふるくるみる

高階師直

天ふる雨ふる人秋の上ふる雨ふる世ふる人ふる秋ふる

日吉社ふるけける百そう三の中ふる桐を

皇后宮大夫俊成

山桐ちるふるをやりをて世ふるけるもやを

雜三の中ふ

前大僧正慈鎮

日の中に秋の三風に向ふ雨ふる新しふる

長元百そう三ちるける付秋紙

後西園寺入道前太政大臣

天清秋ふる月紙ふる秋ふる雨ふるをふる

月ゝを　後宇多院御製

天は秋くもり社をいとへとて　つゆのあるくるの

風はあさまし

風雅和歌集巻第二十

賀部

賀部

百首歌たてまつり侍

民部卿為定

ちとせのくもゐをかけて見る日表場の中納言公忠卿

君賀部ちとせをかけて見る

皇太后宮大夫俊成

秋はぎ松ゝ中のゝ花ちくさ　ちとせをかけて人のこゝろを

後鳥羽院

みかさやまの滝のゆきをたのゝ代の松をこゝ千ぢとよ

大納言為家

元の氏の孫いうすけ朝臣の歌

承安儀經盛頃殿祝ものくに言しはかりた

祝の人を

ほうこ法師頼政

斧山をとりこしに仙人の人つとをとれ元の氏ハ

寛治百首三の中より寄日祝こいふことを

冷泉前右大臣

三笠山みねの月の朝日新宮よりくもれる万代まで

定戸出ハ新人今とくもれハかしこき氏をこそ待

山階入道前左大臣

作山院前内大臣

我元の中国にまいりて出ることを

月の人を

大江宗秀

わ元の上流のいとなれ月のしるしとなるを

山月を

前人納言後宮

みせ中をこそ色のおしなべの月くもれ新人元のこめ

出元百首三の祝

後宇前左大臣

くもりなくてしかりそめる元の氏月りしるしるこそ

寄月祝を

青宮大夫實文

くもりなくなる所の京に出月八百万代のみかり

叡山の後部をとくつとめ言よみはけるる禁

中月ごいふまを　二月は親王遠道

行とこしまるの月とあるとけるを氏物語の時代

定家卿屏風の詞

貫之

あるとしく物る年をとかぞへて百年の書物をめと言葉

四月のはあるる所のうねやまるくよ見る

能宣納言

何しも和歌のりもたにおいもそる松八重の葉と遠

人の家るるりの小松をうくはけるる雪の

降てるをみくに見えけれ当

清慎公七十賀屏風の詞

雪の我宿さるこゆけるる娘小松二葉なるるやはる世をへて

清慎公

もろくこさるる匂ひ梅の花風ふるてをつる二月の

也元六年円東寺ろく祝新成橋定こいふ

しを

接人納言也宮

冬のへれ松と行方ふるつ行代まるこるる匂花ふさけ然

康義公賀しはける屏風の詞る人の也

みくるへる所　中務

あてなかつかさ思へ院さてゝ井のつゝ者つゝ記れゝ
寛治元年三月三日西園寺へ幸あつて
院院こいふしを詠ぜられけゝる
前大納言為氏
みをわらぬ人に招きて院の御所書う人
山階入道前左大臣
元氏朝臣あふひ御ゝ水揚ゝのをゝ
右大将通忠
橘院の御所者れ
正和二年西園寺へ一切行幸ぜられ
けゝ江の院院こいふしを詠ぜられゝ
深入院関白前左大臣
ゝのつゝ者ゝ
山階入道前左大臣
ゝ
橘院ゝ
後京極摂政内大
ゝ
橘院ゝ
後
入道前関白左大臣
ゝ
ゝ者ゝ
ゝ者ゝ
ゝ者

内裏ちかく禁断屋松ありしを切ると
ゆめに夢侍りし　従二位隆房

世をすてゝ山の松はとしふれど　問ふ人一ちは思ふ者のめくみ
嘉元二年伏見院ゝ三十首歌ゝ中ゝ付祝
又祝　同之院入道前関白家大臣

大宮内裏の松の命ながきみとつたへ世もしられぬ末のいろけ
七十賀しけるゝ人々ゝ歌ゝをとりてゝ侍けれい
後侍けゝ　祝戸成仲

もゝ人のいはひ言のくさみゝおつるゝ花の咲ゝ
小松内大臣家ゝ三家合ゝ侍けるゝ人々ゝ歌ゝ後
侍けゝ　建礼門院右京大夫

うゝゝふゝゝ宿ゝゝゝゝゝゝ　前中納言定房二度歌ゝ
門ゝゝゝゝゝ　康資王母

かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

文保元年百首の中に

民部卿為家

九重にみちくるしけるく[illegible]

建武元年中殿[illegible]

を詠[illegible]

前大納言[illegible]

百敷やせうの行の枝しまうるわる世の[illegible]

後伏見院[illegible]

[illegible]

いにしへをみわたすとも世の中の[illegible]

[illegible]

[illegible]二位為[illegible]

[illegible]

法性寺入道前関白[illegible]

[illegible]

[illegible]

宮内卿[illegible]

續古今[illegible]

冷泉前[illegible]

山〻今ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

如形法師

逢うき世代なれば三の鏡にてくもりなきこと人と為

天福元年八月廿六日書悠紀方屏風の詞を江

国政多の橘をよめる

兼盛

御詠ありてすうのふ東西の野田の中に橘を植えたる

承保元年八月廿六日退出音奏不急

ねもの

前中納言通房

古詠ありて三月ばかりに橘を植えたる所に

同屏風の詞人の家の門田にいとなむ所あり

元の代に三月の門田にうるいねのなりてよみける

記をこの所人はかき所

くもりなきこの代なれば日をこの国にふる

寛治元年八月廿六日書屏風に小松原のもとに

なりてあるの所にて人あり

小松原にもとりのもとに松を植えたる門所

仁安元年八月廿六日書屏風に音奏音通

院八幡宮に三百代ばかりの松のたちたる山

白河院大夫後成

正嘉元年八月廿六日書とて碁方屏風に奏加

良門より摩威国紀ノ人汲下流

正二位隆博

汲人のたえたえきこえもしかの川水の上のみ

永仁六年八月十四日奉書惣紀方屏風也澤池堤

年日拝蒔蒲

前大納言俊光

たつの氏の宮ゐもの澤の池のあやめをみるに

印大宮参詣方屏風也井納涼の人

和歌

正二位隆博

宮ゐを出て井の清水の岡川に人ゐる方氏の姫

暦応元年八月十四日奉書惣紀方秋景三江國

鏡山

正二位隆義

さかゑ中なの鏡の山の川ゐ見ゐ川よ

あゐけるを世を

此集蒙 諭命不日終焉功敷度函極矣了

移沈沈年去年

干時之明十二紀林鐘下旬

權中納言藤原宣流

在原名行平卿

風雅和歌集序

夫和歌者氣象充塞乾坤意想範圍宇宙渾沌未剖其理自存人物既生其製遂著風雲草木之起於機感也萬籟入雅與之端思慮衰樂之發於意趣也一心為訊諭之本吟詠性情參制政教難波津之什者天子之德也聖人之風始被一朝浅香山之詩者采女之戲也賢者之化已及四方倩惟吾朝之元由自諸二南之餘落者乎所世迄醍醐人趣浮華不知和歌之實義

偏以為好色〻媒色代〻弊色於益巧益
密惟以綺麗彫刻為事竊古語低數詞修
飾而成〻還晴手人爭或以獸僅庸俗〻
語直述指意不知風雅所主並以不見觀
者也淳風質朴情理〻爭執不據此而暗
於態度而猥取〻者此述他〻意用情巧
辭華麗〻爰何以加旃而牽於無味而苟
好〻者失雅正〻外又風采勵高古難兼
含蓄〻情句法敏情微易入細碎〻失勁
直則成怒張〻氣妖豔亦有懦弱〻病論
其所載不過毛舉乃如文質互倫意句共
到者宜忌言得旨豈低筆右畫手總而謂
〻不達其本源者多溺彼末流曾只須染
志於古風不可候步於邪徑者耶三代集
以後得其意者僅不過數輩其或有屋堂
不入室況頃年以來非數息有餘為敝此
類風迴溫元久故事適合風雅者鳩集而
成編天下主可棄〻言故博采編自上古
至當世集而錄〻余曰風雅和歌集茲惟
握圖自推運數脫滅不為神仙狂雖有万

機渉諮詢既所得之漏多同賜刻期後煙氣
早収春馬度逸華山〻凡霜刑不用焼茶
空杉草野〻為衆功已與庶績方懋雖所
善所必著傷一物〻失所故曉此道久廢
俗流不知注渭所以有此攄旅編撰事訪
叢藻兮壯一時〻觀專歌舉正凡雅訓兮
遺文載〻義者也于時貞和二年十一月
九日概之警策固記大綱云爾